

---

# 真・恋姫＋無双 化け物を狩る者

定春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 化け物を狩る者

### 【Nコード】

N68390

### 【作者名】

定春

### 【あらすじ】

フリーター中村光は、神のミスの尻拭いのせいで恋姫の世界に飛ばされる。

そのミスとは、恋姫の世界に、モンハンモンスターを送ったこと。その問題を解決したら、元の世界に帰してくれると、約束されて。青年は、モンハン狩り、楽しみながら世界を回る。恋姫とモンハンコラボしてみました。

人には、チートになります。及びキャラ崩壊等があると思います。あと処女作ですので、駄文です。それでも大丈夫と言う方は、駄

文ですが、楽しんで行ってください。あと 尚作者はガラスのハ  
ートの持ち主なので辛口コメントはご遠慮下さい。

## プロローグ（前書き）

定春です。

始めて作る作品なのでご不満などあるかもしれませんがご了承ください

## ブローグ

「あれ？どこそこ？」

俺、中村光。

目が覚めると真っ白い世界にいた

「あれ？あれ？」

いやいや怖い怖い

どうしてこんなところに・・・？

たしか部屋でモンハン2Gをやったはずやねんけど・・・

「やあやあ」

後ろから声がしたので振り向くと・・・真っ白いジーさんがいた。

「貴方は、だれですか？そして、ここどこですか？」

「え？わし神様、そしてここは・・・異空間とでもいつとくか？」

「いや聞いてんのこっち・・・はっ？神様・・・??？」

俺が、そう言うと自称神様は笑いながら。

「そう、神ですよ」

俺は、かなり蔑んだ目で、見ながら

「爺さん頭打ったんか？」

「ひどっ！確かに、いきなり神とか言われても信用できんか中村光くん？」

「いやああいきなり神とか言われてもなあゝてっかなんで俺の名前・・

「まあいいわ、んで、なんで俺こんなところるん？」

「いいんかいっ！」

自称神に、つつこまれた、っーか普段のしゃべりに、なってもたww

「まいいわい、お主に、やってもらいたい事が、あつてココに、きてもらった」

「俺に??」

「ふむ、ちよつと違う世界に、行ってそこ救ってきてくれんか？」

「なぜに俺が？」

「いや、ちゃんと決めるのメンドイから、テキトーに、連れてきた・・・・てへっ!」

「いやじじいが、てへっ！とかきもいだけやねんけど、つーか適当に、決めんなー！！」

はあはあなんかこのジーさんと、喋ってたら疲れる。

「まあまあ、でっ！行ってもらう世界は、ゲームです！」

え？まじで、いいの

「ジーさん何のゲームですか！？」

やばいテンション上がってきた~~~~~

「ふむ、いい返事じゃ光君、君の、行ってもらうゲーム名は、真・恋姫＋無双でっす」

？

光「は？」

なにそのゲーム知らん？

光「それなんてゲーム？」

神「なんじゃ知らんのか？」

はい知らんよ恋姫？無双？なに無双系か？

神「PCエロゲーです」

はっ？エロゲ？正直25にもなるけどエロゲは、手出したこと無いわ

光「エロゲーは、やったこと無いで」

神「ほんとか、でもまあ、連れてきてしまったしの」

光「やったこと無いから帰してやもっとやった事ある奴連れてきい  
や」

いやマジで、ちょっとさっきは、テンション上がったけど

神「うん、無理！」

なんかちよくちよく言い方むかつくな。

光「マジかよ帰れんのかよ」

神「いや問題を、解決してくれたら帰せるから」

光「マジやな！たのむでほんま、で問題ってなんや？」

神「光君お主モンハンは、しつとるか？」

光「ん？知ってるも何も、ここ連れてこられる前にやってたし」

神「なら好都合、問題はな、ワシの手違いで、恋姫の世界に、モン  
ハンのモンスターをおくちゃった・・・てへっ！」

なにしてんねんこいつ・・・ん？



光「まさかとは、思うけどそれを、狩ってこいとか言わんよな・・・」

神「正解！」

光「何が正解じゃ！！死ねるわ！つかナンデお前のミスでそんな事せなあかんねん！！」

救ってこいって意味そういう事がーーーーー

神「そこは、本当に申し訳ない、神じゃ直接手を、だせんのじゃ」

いきなり全快の土下座してきたよこのじーさんこと神

光「ふう・・・わかったよ、だから頭上げてや」

神「じゃ行ってきたくれ」

頭上げんのはやつ！！

神「安心せいちゃんと、身体能力をかなりUPと武器防具は、揃えるからの」

神「問題解決したらちゃんと戻してやるから、しかも連れてきた時間じゃ」

光「そこまで言うならわかったよ、もし死んだらどうすんの？」

神「ちゃんと天国に、送ってやるわい」

光「・・・・・・・・やめていい」

神「うん、無理！じゃ行つてきて」

すると俺の足元に大穴が。

光「この駄神がああああああああああ！！！！」

SIDE 〱 神 〱

光「この駄神がああああああああああ！！！！」

と言つて落ちて行きよつた

ほんとにすまないな、しかしたのんだぞ光君よ。

しかし暇つぶしには、いいかの。

まあ暇だったから、いらんこととしてミスつたと絶対言えんな。

確かに駄神じゃの・・・・

〱〱〱〱〱〱〱〱〱〱

## プロローグ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

それではこれからよろしくお願いします。

文句などはカンベンで。

とりあえず来て見たが・・・(前書き)

とりあえずつづきです。

とりあえず来て見たが・・・

こんにちは中村 光です。

目覚ますとさあゝ．．．見回しても荒野です．．．

あれ夢じゃなかったんか？

光「しかしこれ……まじか……」

そうなぜか背中に、あのモンハンの、バスターソード、まあいいことは分かる

なぜ腰には、日本刀？しかも右左に2本……

そしてなぜかいつもの、普段着やしジーパンに、黒のロンティーに、ミリタリージャンパー、なぜかシヨルダーバッグ……

あれ・・・？防具は？？？

光「なぜだ〜〜〜〜あいつってかマジ神やったんか〜〜〜で、  
防具は〜〜〜〜絶対死ねる〜〜〜バスターソードって〜〜〜最  
初の大剣やんけえ〜〜〜〜この日本刀なんや〜〜〜〜」

まじ本気で、叫んでると

神「（おい、きこえるか）」

まさかの、頭の中に無線が。

光「こちら光 中村今すぐ説明を、してもらおうか」

神「（そうそう、説明し忘れた）」

うおい！ホント駄神やな！！

神「（その、モンハン装備な近くにモンスターいないと装備できないから、あと武器も）」

光「なぜに？」

神「（ん？説明メンド「おい！！」イ・・・なんじゃい）」

なんでこいつは、肝心なこと、おはぶくんじゃ～

神「（文句なら作者に、言え）」

光「うぉ～い！電波発言やめ～い！！」

光「いいよ。もう・・・」

疲れたよ正直wwwなんかいいのかよって言うてるしwww

光「しかし装備どうすんの？」

神「（ワシの突っ込み無視ですか！もうええわい、取りあえず右目閉じて、装備選択って言うたら、装備できるから後は、ゲームどう

りじゃ～～てへっ！！）」

なに、こいつ てへっ！マイブームなんか？

光「え」と右目閉じて、装備選択！・・・うわっ！！ほんまや！！  
装備選択画面でた～～～～！！」

なになに何の装備あるんかな～

ギザミスに、レウスSに、タロスSに、バサルS なんか無駄に、  
全属性力バーしてんな～

光「なあ、なんで全部Sシリーズ？」

神「（そこは取りあえず・・・・・・・・・・それぐらいのLvじゃないと面白くないし・・・・・・・・）」

光「なんて？最後の方聞こえんかった！」

神「（気にするな）」

いやいや気になるよ。

光「そや、あと武器 ぶつき～～」

神「（なんとか誤魔化せた）」

光「え？なんか言った？」

神「（な、なにも言っとらんよ）」

なんか不吉なこと聞こえたけどまあ、いいか

光「すげ〜地味に、一杯入っててスゲーしか言えんｗｗｗｗ」

光「武器は、全部あるやん！なんで？」

神「（選別するのめんどくさかった）」

光「またか！！」

光「ん？ガンナー系は、一つも無いで？」

神「（ワシガンナー嫌いなんじゃ、使いにくい）」

光「しらんわ！！」

俺はガンナー系使うのに、すごい理由で、省かれた。

光「せめて弓ぐらい入れてや！」

神「（今から準備めんどい）」

光「うおーい！お前の、ミスのせいで、やったてんのにこの扱い？」

神「（うるさいわ、わしは、神じゃ文句はつけつけません）」

光「ええ！？この駄神がああもう、わかったわ！！」



やばいこいつと喋るとホント疲れる。

光「でもさ、これセットしたけど装備できないで？」

神「（モンスターが、光君の索的範囲内に、入れば、装備できるから、武器は今持つてる武器が変わるからその所よろしく）」

光「どういうこと？」

神「（だから選んだ武器、たとえば、今持つてるバスターソードが、選んだ武器に変わるって事、大剣とハンマーを、選ぶとバスターが変わるし、片手剣、双剣、太刀、ランス、ガンランスは、その腰の2本が、変わるからの）」

光「OK分かった」

神「（あと光君の索的範囲内に、モンスターが、入れば何処にいるか分かるから）」

神「（アイテム関係は、しこたま入れといたから、薬関係は、好きなときに、飲めるから）あと光君以外でも、効くよ）アイテムの場合は、左目閉じてアイテム選択って言えばアイテム選択画面が出るから、そこから選んだらショルダーバッグから出てくるから」

光「まじか！左目閉じてアイテム選択、ホンマや、いっぱいあるな。そこは素直に、ありがと」

神「（いいよいいよ）」

なんか地味に、うれしそうやな

まあええわ。よしでもこの後どうしたらええんや？

光「せや！聞き忘れたけど恋姫だっけか？ここどんな世界なん？」

神「（ん？簡単に、言えば三国志！でも武将が全部かわいい&美人な女性に、なつてまゝす）」

は？まじで！！流石エロゲ

光「で俺どうしたらいいん？」

神「（好きにしていよいよどこかに属すなりあえてかわらなかつたり、とりあえずモンスターさえ狩ってくれたら好きにして〜〜）」

好きにつて適当やなこいつwww

神「（ああでも、その世界結構荒れてるから、盗賊とかいるから対人戦とか覚悟しといてね〜〜）」

光「え？まじで、もしかしてそのときつて」

神「（うん、逃げるなり殺すなりしてね〜）」

まじかゝそんな事しないといけないのかよなんか憂鬱

光「なあ、もしかしてだからこの大剣と2本の日本刀？」

神「（まあ、本来は、モンハン装備を送る媒介なんだけどね。護身用もかねてるから、光くん身体能力上がってるし、対人問題は、無

いと思うよ、でも調子に乗ると死ぬよ。」

光「モンハン装備は？」

神「（無理にしたよ）、この世界の人に、たとえば毒ノ王とか使うと多分溶ける……そんな事したら強すぎておもしろくないし……）」

光「それはいややわ、なんかあと最後のほう聞こえなかったけど？」

神「（気にするな）」

ん？きになるけど……

神「まあだからモンハンの場合と、恋姫の場合とでこっちで分けたから」

まあわかった、はあ実際対人に、なったら逃げればいいか

光「了解分かったよでも、バスターソードってもんはんじゃ……」

神「（そこはつつこむな）」

神「（あ、最後に、一言言っわせてね）」

なんかいきなりまじめな、感じに、なったな

神「（いくら身体能力が、この世界の人間より高いって言うても、死ぬときは死ぬから、モンスター戦でもゲームじゃないから、死ぬんじゃないぞ！そしてすまない、ワシは、直接は手出しできないか

らすべて光くんにかかしたぞ」

なんか初めて真面目に、いわれた気が、する。  
ここは真面目に、答えときますかね。

光「たく、あんたのミスの事は、もういいわ、あと帰るまで死んで  
たまるか!!」

神「（おうおう すまんの、んじゃ、がんばってくれ）」

と言うと頭の中の、繋がってる感が、無くなった。

人は出会いで成長する。（前書き）

今回は、原作キャラ登場です。

喋り方間違っていると、と思いますが、そこは優しくスルーしてください。

人は出会いで成長する。

光「さて、どうしますかね」

神との会話も終わりここからどないしようwww

光「なんとかなるか」

取りあえず町さがすか〜と考えとつたら後ろから

賊「おい、その兄ちゃん」

取りあえず後ろ振り返ると

賊「おい、兄ちゃん。とりあえず金目の物を出しな」

光「いきなりかよ〜」

まじですかいきなり賊かよ

賊「なにぶつぶつ言ってるんだ!」

光「そらぶつぶつも、いいなくなるわ!始まってすぐに賊に、エン  
カウンントとかベタスギやる!!!」

光「しかもデブに、チビに、普通って!」

3人「チビって言うな!」「デブって言うな!」「普通ってな

んだ!!」

おうおう3人がぶってなんて言つてのか分からんwwww

チビ「お前アニキをなめてんのかッ!」

光「なめてねーわ、馬鹿にしてるだけや」

3人「「「「なお、わるいわ!!!」」」」

すげー3人で突っ込んできたーおもれー

普通「何だ、この兄ちゃん、頭イカレてんのか?」

アニキと呼ばれとつた男はチビに話しかけた。

チビ「へえ。そうかもしれやせん」

普通「まあいい。とりあえず早いとこ金目のモンだしな。じゃねえと……」

ジャキン、と刃物を抜く三人

ああやべ、流石に、人殺しはご遠慮こうむります。

てつなわけで、逃げようとしたら。

????「待てえ!!」

ウツサ耳が……

目の前に、女の子が。

???「一人に対して三人で脅すなど卑怯者が!」

という手に、持った槍でチビを吹き飛ばし

それを見ていたデブは、もっていた剣で切りかかったが、あっさりかわされて、後頭部に、槍の裏で、おもいきりどつかれて混沌させられたwwwwwwつーかわ流石始まってスグの、雑魚キャラ

???「さあお主は、どうする?」

普通「く、くそお。おい、お前ら、づらかるぞッ!」  
といつてちびと普通が、デブを担いで逃げつた

???「ふんっ」

やべかつこいって、いやマジで。  
見入つてると女の子が、こっち向いて話しかけてきた。

???「お主、怪我は無いか?」

やばいやばい、かわいすぎるっしょこの子

水色の髪にめっちゃ短いチャイナドレスの、女の子

あ、あやべやべ見はれてた返事せなwww

光「あ、はい、大丈夫ですよ、むしろちょっとからかってましたから」

ここは、ちゃんと笑顔で、答えないと。



「ツ！/?/?/?/?/?/?/?/?/?/?」

ん？なんやえらい顔は真つ赤になつてゐるぞ？あ、ああ戦鬪あとやから

「この御仁は、なんて顔をするんだ」

せやせやこは、ちゃんと挨拶せな！

光「助けてくれてありがとう、あつ、俺の名前は中村 光っていいます」

趙「そんな畏まらないでくれ。私達はたまたま見付けたからであつて気にしないでもらいたい、

しかし、からかわれてたとは、助ける必要なかったですか。

ああ、しつれい私は趙雲。姓が趙、名は雲。字が子龍。以後、お見知りおきを」

ん？え？は？what？

ええええええええええ！！！！！！

おいおいおい武將全部女性って聞いてたけどこれは、またいきなりかい!!!

よし、取りあえず落ち着こう  
W  
W  
W  
W

光「趙雲さんですね、ほんとに、ありがとうございます」

いやゝホントに、ありがとうやわ、事実逃げる気MAXやったから  
たぶん負ける気しないけどwwwwwwww

趙「いや、本当に、気にしないでくれ、それと、姓が中、名が村。

字が光でいいのか？」

光「いや姓が中村、名が光だ、字は、無いから」

趙「字が、無いのか変わってるな」

「ん？ああそれ「星ちゃん」……！」は、……ウツサー  
また耳が……」

「なんやねん、ここの人間は、みんな高級耳栓でもせな耐えれんのか・  
・」

趙「ああ、すまん」

「……」「まったくいきなり走っていくんですから」

「……」「ふ、風。待って下さい。私はあまり体力が……」

「なんやなんや今度は女の子の二人組。」

長い金髪を、頭の上に人形を置いた子。

もう一人は、茶色い髪眼鏡をかけた娘。

「……」「このひとだれですか？」  
と眼がねっ子

趙「ああ俺は、中村 光っていいです。姓が中村、名が光だ、字は、  
無いから適当に、呼んで  
あとその趙雲さんに、賊に、絡まれているところに、助けてもらっ

て、ここにいます。」

程「そうですか。風は程イクといいます。姓が程で名がイク。字は仲徳です。よろしくです、お兄さん」

戯「字が、無いって変わってますね。あ、私は訳あって戯志才と名乗っております。偽名で申し訳ないですが、よろしくお願いします、光殿」

おい！なんだよみんな武将じゃねーかよー

なんでこんな可愛い子なんだよーヤベ俺もエロゲやるのかなwwww

はっ！あかんあかんここは、ちゃんとせな。

光「ああ、改めてよれしく。字が、無いのはきにしないでね。つかさ、なんでみんな趙雲さんの事違う名前と呼んでんの？」

3人「「「えっ！？」「」「」

程「真名知らないんですか？」

光「何それ？いやー正直気が付いたらここに、いたからさあ」

まあ嘘は、言ってない・・・

取りあえず真名というもの。これは、本当に信頼できる者にしか預けてはならないという名前。

もし軽々しく呼んでもうたら殺されても文句は言えないんやってマジか。

あの、駄神があ、こう言う事、教えとけよ！

しかしまじで危なかったわ・・・教えてもらってなかったら確実に呼んでたな・・・と耽ってたら趙雲さんが。

趙「お主天の御遣か？」

??なにそれ知らんぞ、ほんとあの駄神説明せいよ!!

程「え〜つと実はですね〜、ある予言がありまして・・・」

程イクちゃん説明中・・・

程「と言っわけです」

光「光が、落ちてたところに俺が、いたと？」

趙「そうです」

趙雲さん。ないない俺じゃねーよそれ多分本来の主人公やろ〜

光「たぶんちがうよ」

と言っとき〜

3人「「絶対そうです」「」

っていわれてもうたwwww

まあいいやなんでも・・・

戯「そんな服装の人は、この世界でもみたこないですよ」

光「そうでもないですよ〜そっぴやみなさんこれからどこへ？」

趙「話をそらさないでもらいたいのですが、まあいいでしょう私達はこれから南に一刻程行った所に村「ぎゃーーーーー」に、ん！？なんだ？」

なんか悲鳴が

ん？なんか頭に、違和感が、もしかして……

人は出会いで成長する。  
(後書き)

次はモンスター登場!!

狩るか狩られるか？（前書き）

ハイ 色々どうしよう・・・

戦闘描写無理です。難しいってか全てが難しい

ですががんばります。

狩るか狩られるか？

悲鳴が、きこえたで・・・あつ中村 光です。

それと、同時に、頭に、違和感が・・・

まさかと思い、こんなときは、右目を閉じて

「装備選択」つと・・・

あれなんや、MAPってコマンドがあんな・・・取り合えず決定つと・・・

これ、この辺のMAPか？なんか赤い丸が、めっちゃこっち向かってるわ～～

普通「た、助けてくれ！！」

声の方を確認するとさっきの賊3人組が・・・こっちに向かって来た。

光「おいおいマジかよ」

3人組は、追いかけてた。

青い体と薄く見られるしまし模様で、赤い大きなトサカが特徴のモンスター、ドスランポスに

光「ドスランポスカよ・・・」

そう呟いてると3人娘が

趙「何だ、あれは！」

程「な、なんですか」



戯「なんなんですかあ、あれ・・・」

3人とも吃驚した表情やな～やっぱり。

ランポ「くえーくえーぐおおおー！！」

ドスランポが、威嚇したらと思ったたら。

ランポが得意の大ジャンプでデブを、踏み潰し

それでそのままあの鋭利な爪で、横にいたチビを引き裂き、正面の普通の頭にかぶりついた・・・ま、まじかよ・・・

うえ、やばい吐きそう・・・エグすぎる、やばい怖い・・・

俺が、ビビってたら趙雲さんが。

趙「さ、3人とも逃げろ！！あいつは私が！」

といってドスランポに、突っ込んでいった・・・

SIDE～星～

なんだあの生き物は、初めて見る・・・

あんなに俊敏に、人を殺す動物を、初めてみる・・・

体があの大きさなのに、動きが速い・・・

そつえばさつき光殿が「ドスランポスカよ・・・」などといって

いたな。

どすらんぼす???なんなのだ?光殿は、何か知っているみたいだが  
私が、そう考えてると奴が、こちらに気が、ついたみたいだな

私は、とっさに

趙「さ、3人とも逃げる!!あいつは私が!」

といい私は、あの見たこと無い化け物に、突っ込んでいた・・・

SIDE～END～

趙雲さんドスランポに突っ込んで行ったで。

ってかランポってあんなに、速いの・・・

くそゲームとリアルじゃ違うってか

趙雲さんは、ランポの速い攻撃を全てかわしていた、

光「趙雲さん動きはやっ!」

俺が叫んでると

趙雲さんランポの隙を見てランポの首に、槍を刺した。

(キーン!)

マジかよ・・・あの槍で刺したのに、弾かれたで・・・

やばい！！

弾かれて吃驚してる趙雲さんに、ランポの爪が迫り、とつさにガードした趙雲さんが、ふっと飛ばされた！！

くそっこのままじゃ、喰い殺される。

ああークソッ！！

迷ってられるか！目の前で、あんな可愛い娘が、喰い殺されてたまるかーーーー！！！！

右目を、閉じて「装備選択！！！」

そのまま背中の大剣を、抜いてダッシュで、突っ込んだ。

SIDE 〽星

戦いに向かった私は、焦っていた。

なんなんだこいつは、動きが速い・・・

噛み付きと爪の連続の攻撃で、こっちの攻撃が出来ない。

しかし伊達に、常山の昇り竜と言われた私ではないぞ。

そら、隙が出来た！

私は、奴の首に、私の龍牙を、叩きこんだ。

（キーン！）

趙「え？」

私は、驚愕した、私の、龍牙の刃が、通らなかった。

そのせいで油断していた、奴の、爪が迫ってきて、とっさに、龍牙で、防御するが、吹き飛ばされてしまった。

飛ばされて、奴を見ると奴は、大きく跳んで大口を開けて飛んできた。

間に合わない！

ああ、このままさっきの賊の用に、喰われるのかと、目を閉じて待っている。

（キーン！）

えらく大きな音がした・・・目を開けると

赤い鎧を、着た光殿が大きな剣を、盾にして目の前に、立っていた。

狩ったもん勝ち！

やべー何とか間に合ったでー

今の状況、ドスランポス出現、趙雲さんピンチ、俺介入・・・OK？

あと俺ドンだけ身体能力あがってんねんwww

まあそのおかげで、ギリ趙雲さんとランポの間に入れたけど、

取りあえず・・・

光「は・な・れ・ろ・やー！！！」

おもいつきり大剣を、なぎ払う。

それで距離を、とるランポ

とりま

光「趙雲さん離れてて」

趙「わ、わかった」

と言って離れてくれた、よし、取りあえずランポ何とかせな。

そのまま走って斬りかかる

よしっ！もらったー

（カンッ！！）

・・・え？うそー弾かれたー

えええっ！！バスターソード最初の大剣つ言っても・・・えええ？

・つかランポで、弾かれるって〜

こいつG級???G級でも斬れたやる!!!

って考えてたらランポお得意のジャンピングアタックに、吹っ飛ばされた。

光「ぶへほっ！」

SIDE〜星〜

光殿が、助けてくれたみたいだ、すると

光「趙雲さん離れてて」

といわれたので私は、とっさに

わかったと言い、とりあえず距離を、とった

すると光殿は、安心したかの用に、あの獣に、向き合い走って斬りかかった

あの獣は、油断してた、アレなら行ける!っと思ったら

(カンッ!!)

私の時と同じように弾かれた。

あの大きな剣でも弾かれるのか、どんな体してるんだ!

今度は、あの獣が、光殿に、体当たりをして、光殿が、吹き飛ばされた。

さつきの賊を、一撃で死に追いやった一撃だ。

趙「光殿！！！」

程「お兄さん！！」

戯「光殿っ！！！」

私たちは、とつさに叫んでいた、しかし光殿は、起き上がり  
光「大丈夫大丈夫」

と言い手を振っていた

本当に大丈夫なのかと今度、ぶつぶつ言い出した  
すると光殿の大きな剣が、白と青に黒の線の入った剣に変わった。

そのまま光殿は、剣を振り下ろす形に構えた

S I D E 〱 E N D 〱

痛い！くそ！でもさつきの賊は、一撃死やったのに、さすがレウス  
Sまあ、とつさに選んだからこれになっただけやけどwwww  
っ！かレウスSで、決定したら勝手に着てたよ便利やな。

趙「光殿！！！」

程「お兄さん！！」

戯「光殿っ！！！」

ああ心配してくれてるんですね趙雲さんに程イクちゃんに戯志才さん  
しかし可愛い子に、心配させるわけにもいかんここは無難に

光「大丈夫大丈夫」手を振って答えとく

しかし助けに来て吹っ飛ばされるとかどんだけやねん！！

なんかださっ俺ださっ！！そしてハズツ！！

しかもドスランポスって雑魚やんけ！

なんかイライラしてきた、光君キレんでマジで

取りあえず武器変えるか

光「装備選択・・・切れ味高い奴にするか、いやあえて属性にするか試したいし」

あ！ヤベ！ランポこっち来てる！。

光「えつとえつとあああもう、これでいいか！蛇剣 黄金牙！」

おう！バスターソードが、変わった！スゲスゲ！！

ちなみにランポは、弱点氷なんでこれ、もつとあつたけどあえてこれ

テンション上げてる場合じゃねえーやばいランポ来た来た

うしっ！返り討ちにしたんぞ大剣ならアレや！

ため斬りじゃ！！



俺は、剣を振りかぶる用に、構えてつと

光「こいやー!!」

なんか力がみなぎってきた

するとランポは、お得意の大ジャンプしてきた。

ランポの顔に、合わせるように、今や! 1・2・3

光「食らえー3ためじゃあああああ!!」

俺は、剣を思いっきり振りかぶった。

タイミングよくランポの頭に剣がたたきこまれて

(ぐしゃー!)

ランポ「ぎゅー!!」

すごい叫びをあげて絶命した

・

・

・

・

・・・倒した・・・の??

綺麗に、頭に入って潰れてるしな・・・

感触はんばないやけど・・・・・・・・

弱点属性剣はんばないんやけど・・・・

でも今は勝ったんだとりあえず喜びがこみ上げてくる

光「ドスランポス討ち取ったああああ！！！！！！」

やったぞー！ー生き残ったー

やったったぞ！この駄神がああああああ！！！！！！

## 一息ついて

ドスランポスを狩り終えた 中村 光や  
今絶賛喜び中 ヒーハー！！  
年甲斐も無く喜んでると

趙「怪我はないですか？」

はい、趙雲さんです、いるの忘れてましたwww  
全開ではっちゃけてた・・・

光「あ／＼／＼だ、大丈夫です」やべ恥ずかしい

程「星ちゃん、お兄さん大丈夫ですかー？」

おおさらに忘れてた、程イクちゃんに戯志才ちゃんやな。

光「ああ、程イクちゃん大丈夫やで」

戯「しかし何だったんですか今の獣」

光「ああ、あれドスランポスっていうねん戯志才ちゃん」

趙「ど、どすらぼす？」

と趙雲さん

光「そうやで、あとこの喋りかたが、素なんで」  
正直あいまいな敬語しんどいし・・・

程「そうなんですー変わった喋り方ですねーあと、なにか知ってるみたいですねー」

戯「そうですね、やっぱり光殿は、天の御遣殿ではないのですか？」

趙「そうだな、鎧や剣が、変わったりと色々ありすぎる、さっきは、はぐらされてしまったからな」

趙雲さん笑顔で、迫ってこないで／／／／／／／／／／

もういいえな、誤魔化すのめんどいし・・・あの駄神も、言うなとは、言われてへんし。

光「わかったよ、説明するから趙雲さんちょっと離れて／／／／／／／／／／」

ってなわけで説明中

趙「お主は、使命で、この世界へ来てあの獣・・・もといもんすたゝですか？を討伐しにきたと」

神がどうかは、省いたよさすがに・・・

光「モンスターな、そうや。だから気づいたらここにいたってわけや」

程「お兄さんは、アレだけ強くてもんすたーは、倒せても盗賊である人は、手が出せなかったわけですねー」

光「そうそう、まさか人に、危害くわえなあかんって思ってたし」

戯「じゃ光殿は、ある意味天の御遣様ですね」

光「え？なぜそうなる？それは、この世界を平和と安定をもたらす人でしょ？」

俺が、上に立つて導くとか無理やしてか才能ないよ

程「あながち間違いじゃないかもですよー」

趙「そうだぞ、光殿は、あのもんすたーからこの世界の人々を、救う平和の使者ではないですか」

そういわれたらそうかな・・・？

光「まあなんでもいいよー俺は、モンスターを狩るだけやしな」

光「あと盗賊とかは、なんとかするさ、らやらな、やられるなら」

そついうと趙雲さんが、「でも、殺すことに慣れてはいけませんよ」

そつやな、「肝に銘じときます」正直絶対慣れたくない・・・

趙「それと、光殿に私の真名を、預かってもらえないか？真名を星

と言つ」

光「いいんか？大事なモンなんやる？」

星「私は、光殿が、いなくなったら死んでいたのだ、それだけではないが、真名を預けても信用たる御仁とおもったからです、ダメですか？」

いやいやそんな顔で、だめですか？って聞かれて駄目っていえる、奴いねゝよ  
むしろ歓迎です。

光「全然かまわんで、じゃ改めてよろしく星さん」

星「さんはいらないですよ」

光「ん？じゃ星よろしく」

その後、何故か程イクちゃんと戯志才ちゃんにも真名で呼んで欲しいと言われ、風と稟の真名を預かった  
あと戯志才本名は郭嘉と言うらしい。しかもこちらと呼び捨てに  
いて、いいのか？

ああ、あとランポの亡骸なんか勝手に消えた、それと同時に、俺の  
装備も勝手に戻ったわ

便利やわゝ

んでなぜかランポの装備が装備覧に……いらんねんけど……

いね・・・

ん？！いのめひひひひひ

訓練そして、上手に焼けました〜！（前書き）

なぜか全然先進まない。

とりあえずどつぞ〜。



訓練そして、上手に焼けました〜！

まいど！中村 光でっせ〜

取りあえず今、南に半刻程行った所に村が、あるみたいなのでそこに向かってます。

まあ3人、星と風と稟が、行くみたいなのでお願いして、便乗しました。

だって地理しらんし。

しかしさつき、ランポに、やられた賊を、埋めたあとにね……  
ん？

なんで埋めたって？いや死んだら良い奴も悪い奴も、かんけいないやん、なんか可哀想やったから、3人に  
手伝ってもらって埋めてん……俺のエゴですから気にせんといて。  
まあそのとき（「優しい御仁ですねって」）星に、言われたときは、  
チヨイハズかったけどノノノノノノノノノ

……そんな話関係ないねん！！

そのあとや！！

（1時間前）

星「光殿！私と手合わせ願えないかな！」

はい？なんでや？

光「え？聞いたった？人とあまり戦いたくないって・・・」

星「なら、鍛錬とでも言つときましようか」

えゝややな。

光「嫌で：「もしも！盗賊が、出てきていざって時に、手が出せなかったら困るのではないか？？」」

断ろうとしたら、星が、被せてきた。

いや確かに、いざ盗賊が、出てきたら躊躇しそつやしな・・・

さっきのランポなんて無我夢中やったしな・・・

しかもちよい前までは、日本で平和満喫してただけの俺ならありうる・・・

対人戦のときは、モンハン装備できないしな。

光「わ、わかったわ」

星「うむ。流石は光殿。そう言ってくれると思っていましたぞ」

無理やり言わされた気がするけどな

光「じゃここでええか？」

星「ああ、構わない」

光「あ！ちよつと待って」

取りあえず大剣を地面に置く、じゃまつーか星の速さなら絶対避けられる

星「それ使わないのですか？」

光「え？いやいや星、動き速いの、こんなんじゃ、無駄に隙つくりそうやし」

といいつつ腰の2本を、抜く……ん？日本刀スグに抜くとかすごくない？

初めて使うのに、まあいいか

星「ほめてもなにも出ないですよ、じゃあ、いきますぞ」

早っ！

突き早っ！

ツーが良く見た！俺！！そして良く避けた！

星「良く避けましたな、では、これならどうですか。はあああああー！」

ちよっ！まつ、待てい、おいおいおいさらに早くなりやがった。

右、左、右、右、左、下なぎ払い！！ジャンプ！！！！

うは、やばい殺される。

俺マジ身体能力かなり上がってんな、目もよくなってるし。

星さん、なんか全部急所じゃね??

星「どしたんですか? 攻撃しないと意味ないですよ」

にやろ、すげー笑顔で、言やがって・・・OKOK

モンハンで、双剣使いの光って言われてた、俺の力みせちやる

高速の突きを、右の剣で払い。

ガギンツ!!

そのまま高速で懐に入り左の剣で星に向かって振る

もらったで

・・・スカッ・・・

光「へ?」

あれ? いない・・・って上か!!

まじか！しかもそのまま攻撃してきた！！

なんとか、上からの高速の突きをガード

キンッ ！！

光「うっ！」

あっ！くそっ！！

無理な形からのガードのせいで剣が1本飛んでった

星「いや、今は、あぶなかった、しかし剣が1本に、なってしまったですが、続けますかな？」

うわーあの可愛い笑顔、絶対崩したい、ちょっとムキに、なってきた。

光「やるに決まってるやろ」

星「そでなくては」

くそ双剣が、片手剣に、なってもた盾もってないけどな！

また高速の突きが・・・俺は剣で払い距離を取る

そして剣道の中段の構えにする

よしこい、カウンター狙ったる今の俺なら出来る！！たぶん・・・

星は、弾けるように距離を詰め高速の突きを、俺の顔目掛けて狙ってくる。

そのまま俺は、右に1回転し高速の突きを避け、そのまま星の首に剣を振るう。

光「俺の勝ちやね？」

星「…っ！？どうやら私の負けのようだ」

もちろん寸止めですwww

勝つてもたで、しかし！

やった！笑顔崩したぜ！！！！

目的達成〜よっしゃー

~~~~~

ってなことが、あつた訳で、今に至ります。

そのあと風と稟に、誉められてちょっと嬉しかったのは内緒で。

しかし村までひまやな〜いくら可愛い女の子3人と、同行してても暇なモンは、暇や。

んなこと考えてると風が。

風「おなかすきますたねー」

そつやなこつち来てから何も、食ってないからな

稟「たしかにそうですね、次の村まで我慢するしかないしょう」

風「ぐうゝ…」

稟「いきなり寝るなっ！！全く自分から振ってきておいて・・・  
クドクド」

風「やゝ、つい、うとうとですねー」

なんかいきなり漫才しだしたで・・・

なんか食べるもの無いかなゝそんな時庭は。左目閉じて「アイテム  
選択」

えゝとなんかないかなゝ。・・・生肉・・・！？

もしかしてアレもあるのか？

星「ん？光殿どうかされたのか？」

あつたー！肉焼きセット！これ実際やってみたかつたゝゝゝ

星「おーい光殿？」

風「お兄さんどうしたんですかー？」

稟「こらっ！風まだ話は・・・ん？星殿どうかしたのか？」

星「いや光殿が、片目を、閉じてぶつぶつ言っておられるので」

風「お兄さ〜ん？心ここに在らずって感じですねー」

稟「まさか、私たちを、襲う計画でも・・・ぶはっ!？」

風「相変わらずですね稟ちゃん。はい。トントンするですよー」

ん？なんか周りがうるさい・・・ん？

星「光殿！」

光「うわっ!？なになにに近い近い、星！顔が、近い！」

俺の両肩に、手を置いて星が、俺の名前を読んでいた。

しかも周りを見ると。

光「なにこれ血だらけやんけ!！」

風「あ、お兄さんもどったんですねーこれは気にしないでくださいー」

光「気にしないでって・・・ん？もどった？」

星「そうですぞ、声かけても、心ここに在らずって感じでしたぞ」



ああ、アイテム選択に、必死すぎて回り見えて無かったかwww

光「ごめんごめん」

光「それよりさあ、今から簡単な、ご飯作るけど食べる？」

星「まあお腹は空きましたけど、どうやって作るのですか？」

光「ん？どうやって」

そっついショルダーバッグから肉焼きセットを取り出し。

それと生肉を1つ取り出す。

光「まあ見てて」

二人も寄ってきた、あれ稟 鼻から血が、出てるよ・・・なぜ？

さっきの血、もしかして稟？風が、気にするなって・・・もしかして病気！？

あとで、秘薬でも渡しとくかな・・・

気を取り直して俺は、肉焼きセットの上に生肉乗せそして回す！！

回すと肉焼きセットに、火がついて肉が、焼かれていく

するとなぜか、あのBGMが、頭に流れる・・・

そして・・・「上手に焼けました」と肉を掲げる俺



星「すごくおいしいですよ！」

え？そんなに・・・

星「私の秘蔵のメンマにも劣らないとは、やりますな」

光「メンマ？・・・そう、ありがとう」

なぜにメンマ？比較おかしくない？？

風「私もたべたいですー」

稟「光殿私もお願いします」

光「おう、焼くからまってな」

2人にも焼いてあげるとかなり好評で

それから3人はお替りを言うてくるので俺は、人間肉焼き機なるはめに・・・

食べてみたけど、かなりうまい、外はパリパリ中はジューシー

風「お兄さんなぜ、お肉は、そこからいっぱいでてくるんですかー？」

光「ん？えーと・・・天の御遣の、能力って事で・・・」

稟「なんかあいまいですね」

星「まあいい、しかし焼きあがるたびに、アレは、叫ばないといけないのか？」

光「もちろんです!!」

上手に焼けました〜は重要、かなり重要 大事なことで2回いいました。

## 主人公設定

なかむらひかる  
中村 光

性別： 男

年齢：25 フリーター

関西人 余り濃い関西弁は、使わない

身長／体重：175cm / 70kg

体格： まあまあの筋肉質

見た目： まあまあの男前（本人自覚はあまり無い）

髪型： NEOウルフ黒髪

服装： ジーパンに、黒のロンティーに、ミリタリージャンパー  
あと神からもらったショルダーバック

能力： 身体能力をかなりUPにしているしかしチートではない。

モンハン  
MHのアイテムや武器防具が使える

（しかし武器防具は、近くにMHモンスターが、いないと装備できない。しかしアイテムはいつでも使える）

能力の使い方： 武器防具は、右目を閉じ装備選択と言うだけ、閉じている方に、装備画面が出る。あとモンスターが近くにいると装

備画面にMAPと表示され、今いる地図が開きモンスターの場所が分かる。

アイテムは、左目を閉じてアイテム選択と言うだけ、こちらも閉じている方に、選択画面がでる。そして神からもらったショルダーバツグから出てくる。(大きさからいって爆弾系は、取り出せない) MHの薬は、恋姫の世界じゃ結構チート

武器：バスターソード 大剣 日本刀 2本両方ともに名はなし 対人戦(恋姫での戦闘)時の武器

モンスター戦(MHでの戦闘)の場合は、武器を換えれる  
大剣とハンマーを、選ぶとバスターソードが変わる

片手剣、双剣、太刀、ランス、ガンランスを選ぶと、その腰の2本が、変わる

ガンナー系は、神が使いにくい(ゲームの中で)このことで外された。

神に無理やり拉致られたかわいそうな青年。

神の暇つぶしのミスで、恋姫の世界に、MHのモンスターを送ってしまったから、それを狩って来いと言われ、強制的に、恋姫の世界に放りこまれる。でも実は、なんやかんやで、楽しんでる。

頭は悪く小心者だが心優しく結構義理堅い、しかし怒らせるとかなり怖い。武術は、中学にやってた剣道ぐらい。

そしてかなりのゲーム好き、しかしエロゲーは、やった事は無い。もちろん恋姫無双知らない。

神  
(通称 駄神)

見た目：白いお爺さん

喋り方がよく変わる。

自分の暇つぶしでいらんこととして、恋姫の世界にMHのモンスターを送った張本人

そして自分じゃ直接干渉できないからと言って、適当に中村 光を、連れてきた張本人

結構めんどくさがりで、適当で、説明を忘れる。でも中村光には、結構悪いと思っている。

MHで、ガンナーが、苦手と言うことでガンナー系武器を、一切入れなかったりもした。

## 駆け出しハンター、人を斬る

歩き続けるのってしんどい。

しかしそろそろ着いてもよくないか？  
もうすぐ日暮れるで

星「おっ！村が、見えてきましたぞ」

風「ほんとですねー」

やっとなんかゝゝん？なんじゃ？

光「なんかおかしい？」

なんか煙が上がってるで

稟「村が、襲われたあとでしょうか！？」

星「急ぎますぞ！」

俺たちは、急いで村に向かった。

村に、はいったら酷いもんな。

村人が、殺されてる・・・

光「おいおいマジかよ」

稟「生きている人が、いるかもしれません、それぞれ分かれて探し



ましょう」

星「わかった、私は、あちらを見てこよう」

風「わかりましたー 私はこっちに」

光「俺むこういつてくるわ」

くそっこれが、人間のやることかよ！

光「だれか生きてへんかー！」

？「ヤメテ！」

ん？だれかいるんか？

急いで声のしたほうに向かう。

ん？誰かいるな

黄色の、鉢巻巻いた奴が、親子の前で、剣を持っている。

母「この子命だけは、助けてください」

賊「うるせー両方殺してやるよ、ひやはははは！」

おいおいやばい、くそっ距離がある！間に合え！！

子「お母さんを、虐めないで！」

賊「うるせー!!」

母親を、庇うように前に出た少女が、斬られた。

母「ああああ茉莉<sup>まり</sup>！」

賊「オメーも後を追いな！」

母親が、やられる前に、俺の拳が間に合った。

賊「ぐべえー」

光「大丈夫か!？」

母「茉莉が茉莉が!!!」

子「お・お・かあ・さ・ん」

子供の方は、まだ死んでへんみたいだ。

母「茉莉死なないで!!」

子「お・か・さ・ん」

賊「いてーな、なんだテメー死にてーのか」

賊が、立って目の前にいた。

何でこんな奴に、こんな子が・・・

賊「ん？そのガキまだ生きてやがんのか？さっさと殺してあげないとな ひゃひゃひゃ」

（ブッチイイイ）

完全に切れた。

光「黙れ！しゃべんな・・・塵が！！！」

俺は、賊を睨み付ける

賊「な なんだお前から先に殺してやるぜ」

賊が俺に斬りかかってきた。

俺は、大剣を抜刀しながら横に振りきった。

賊は、手に持っていた剣ごと胴体が真っ二つになった。

賊「え？」

賊「ぐば j b d か d q ; i d b ん : q ! !」

光「知ってたか？そんな状態に、なっても人間ってスグ死なねーんやぞ・・・苦しみながら死ねっ！塵が！」

そのまま背中に大剣を、納刀して、親子のそこに向かう

S I D E 〱 星

私は、3人の賊を見つけていた。

黄色い布の賊これは最近巷で聞く黄巾党か。

星「貴様ら黄巾党の悪事・・・この趙子龍が許しはせん！」

3人と言っても所詮は、賊私の相手ではない。

スグにあの世に送ってやった。

すると

????「ヤメテ！」

星「まだいたのですか」

その声を聞き私は、声の方に、むかった。

声のした所に、ついなら光殿と黄巾党の1人と対峙していた。

私は光殿が、強いと言っても人を、殺せない事は、知っている。

だから私は、助太刀しようと歩を進めようと、思ったら

賊「ん？そのガキまだ生きてやがんのか？さっさと殺してあげないとな ひゃひゃひゃ」

賊のその台詞で、光殿の雰囲気が変わった。

光「黙れ！しゃべんな・・・塵が！！！」

賊「な なんだお前から先に殺してやるぜ」

賊が、光殿に斬りかかった

すると光殿は、背中の剣を握ったら

私でもぎりぎり見える速度で、剣をなぎ払った。

すると賊は、腰から上が無くなっていた。

かろうじて生きていた賊に光殿は。

光「知ってたか？そんな状態に、なっても人間ってスグ死なねんぞ・・・苦しみながら死ねっ！塵が！」

すごく怒っている事は、わかったのですが・・・しかしアレが光殿なのですか？

SIDE～END～

賊を・・・いや人を斬ったな、俺・・・

そんな事よりさっきの子や！

左目閉じて「アイテム選択！」

秘薬秘薬・・・あつた！

こらなら絶対効くはず

母「茉莉ー」

光「おかあさんこれをお子さんに飲ませてあげて」

俺は、ショルダーバッグから秘薬を取り出し母親に渡す。

母「え？これは・・・？」

光「いいからはよ飲まし、子供死ぬぞ！」

そう言う母親は、少女に秘薬を、飲ませる。

すると少女の体が光輝き斬り傷が、見る見る塞がっていき  
顔はさっきまで青白かったのに、生気が戻ってる。

・・・すげーこんなに聞くモンなん流石唯一アイテムで50  
個しかないだけはある。

神の領域だなくても、いにしえの秘薬は5個やねんけど違いが分から  
ん もっと入れとけよあの駄神が

でもなんとなく数がすくない理由分かるけどな。そんなこと考えて  
ると母親が。

母「ありがとうございます。ありがとうございます。」

光「いいから気にせんとして」

もう大丈夫みたいやな完全に直ってるばいし  
寝てるけどな。あんな傷やったからしゃーないか

母「いいえ本当にありがとうございます」

光「とりあえず、他生きてる人いないか見てくるから安全な所に、  
逃げ。それとこの薬の事は、内緒でな」

一樣この事は、黙っというてもらう

母「はい！わかりました、本当にありがとうございます」

いやもういいよ、なんかこそばい

光「とりあえず行くから」

そっいつて逃げるようにこの場から離れる俺だった。

ハンター覚悟を決める！（前書き）

いや〜キャラの喋り方かわってるな・・・



## ハンター覚悟を決める！

親子を盗賊から助けて、恥ずかしさに逃げるようにその場から離れる俺

なんかお礼いわれるの、余りなれとらんから、むずかゆい  
しかし怒り任せで剣を、振るっただけ・・・

初めて人を、殺したわ……あの子供を、助けなつて必死やったしな。  
後悔はしてないよ、やらなやれてたしな。でもなんだかな  
吐きそうとかは、無いけどいまだに若干感触のこってるな…………  
うだうだ考えてると。星が、こっちに來た

光「ん・いたんか？」

星「ええ、先ほどからいましたぞ」

星「どうやら、いつもの光殿ですね」

光「どういうこと？」

どうやら、俺が、賊に切れた事によって、雰囲気が変わった事に  
心配してくれた様だ、いやはやよくよく心配かけさせんな俺

星「あと、大丈夫なのですか？」

大丈夫？……………ああ

殺したことな……大丈夫ってわけでないけど。

切れてやった事の方が、ちよつとな無意識やったからな。

光「ん？大丈夫大丈夫」

星「余りそうは、感じないのですが、まあいいです」

とりあえず風と稟の所にもどる。

風「あ！おにいさん星ちゃんー、戻ってきましたねー」

光「おう、ただいまーそっちは、どうやった？」

稟「生き残りの方々が、ちょっと離れた所に、集まってきました」

そうか、全滅してなかったんか、よかった。ついでに、俺と星が、出会った賊のことも伝えといた。

すると黄色の鉢巻やら着けてるやつらは、黄巾党って言っんやて、無双で、出てきたなそういや・・・

稟「それで聞いたんですけど、さっきの盗賊は一部らしく、湖のほとりに拠点があり、ざっと数は200らしいです」

星「ならば私が、行きましょう」

え？一人で？いやいや危ないやろ、200人やで。

なに、この世界の、武将も無双できんの？  
でもここは、一人で、行かすべきではない。

光「俺も行くよ、星ひとりじゃ、心配や」

星「おや心配してくれるのですか？大丈夫ですよ、たかだが賊の200ぐらい。それに光殿は、大丈夫なのですか？」

大丈夫とは、俺が、また人を殺せるかってことやんな  
正直大丈夫じゃ無いけど武将っても女の子一人に、そんなところに、  
一人で送り込めない

光「俺は、大丈夫。こんな事言ったら怒られるかも知れんけど、  
星が、強いっても女の子やねんからそんな所に、一人で行かせられ  
ん」

星「そ、そうですか では光殿にもついて来てもらいますぞ!!」

と、満面な笑顔で答えていただきました・・・うあゝかわいい・・・

風「そうですかーでわとりあえず、もう日も落ちてきたので明日に、  
しませんかー？」

稟「そうですね、流石に今日は、もう来ないでしょう。今日は村の  
皆さんの所で、休みましょう」

まあ話は、まとまったみたいやな、村人の所に行き稟が、なんか村  
長っぽい人のところに行ってもうた

明日の事説明するみたい、俺は、やること無いので炊き出しの手伝い  
まあ炊き出しつか俺が、人間肉焼き機器になっただけだね、  
だって賊に襲われて食べ物ないんやし

生肉なら沢山あるし、ちよつとでも元気出してもらおうと頑張りました。

いちいち焼くたびに（上手に焼けました！）って叫んできるとみんな  
の目が、冷たかったのは秘密です。

村人にこんがり肉を振舞って、のんびりしてたら星が、こっちにや  
つてきて俺の横に座る。

星「光殿、あの肉を食べるとなんだかすごく体力がついた気になるのですが」

ん？そろこんがり肉だもの、体力UPしますよ〜

光「ん？そうか〜気のせいじゃない」

説明しづらいので軽く交わす〜

しかし星・・・さん？なぜそないにくつつくんですか・・・

光「星・・・あの近いんですけど」

星「気のせいではござらんか」

いやいやい近い近い・・・やばいいいにおい・・・はっ！？あかんあかん！！

光「ちよい、ち、ちかいつて、てか腕絡めんな！」

星「フッフ」

なにこれ俺からかわれてる??

星「元気でしたか？」

光「え？」

星「賊を、殺してから少し暗い感じでしたので」

まじか・・・まあ気にしてない言っても顔に出とったかな・・・



星「／／／／／」

ん？星風邪か？？顔まっかやで、それとも俺に惚れたか……。ないな……

光「てか星離れて」

星「寒いのでいいではないですか　フッフ」

からかわれてるな……。あそういえば

光「星の槍ちよい貸して」

星「龍牙をですか？なにをするのですか？」

光「ん？もつと切れ味を上げる」

SIDE　風

星ちゃんとお兄さんが、いないと思って探しに来たら  
なんかいい感じですねー

稟「光殿と星殿が……二人で……ブーッ」

りんちゃんは、相変わらずですねー

風「はーい、稟ちゃん、トントンしましうねー」「トントンッ

さてお邪魔にならないようにどこかいつてますかー

SIDE〜END〜

ハンター覚悟を決める！（後書き）

どうでした？



**駄神オンラインしました。（前書き）**

ちよつと有難いご指示が、ありまして、台詞の前に名前を書く事やめてみました。

私の力不足で、誰の台詞か、分からなかったらごめんなさい。

それでは、よろしく

駄神オンラインしました。

ふう〜疲れた〜

やっと星どつか行っただな〜

やっと離れてくれたで、しかし駄目もとで、頼んだけど良く貸してくれたな。

「光殿が、そうしてくれるなら、貸しましょう」ってな・・・  
まあ切れ味を、すぐく上げてやるって言ったら貸してくれたけど、  
信頼されてんな、俺。

さあやるか。左目を閉じ「アイテム選択」そうこれを使うのさ  
シオルダーバッグからそれをだす・・・・・・パッパパーン〜そ  
う砥石！！

多分これで砥いだらすごい事に、なるん・・・かな？

まあいいやガンバロ！！

シャーシャーシャー・・・これでいいかな？つか星のこれ龍  
牙？

すごい形してて砥ぎにくいこの上ない・・・

ま：まあ頑張るで！

シャーシャーシャー

（「地味なことしとるの」  
いきなり頭に、声が！？

「その声は！？駄神！！」

（「駄神は、ないんじゃないね・・・」）

「うつさい！色々説明省きやがって！」

（「まあそう言っな、だから説明しにきたんじゃ」）

今？おそくねー！？

「んで？なによ？っーか砥石使い方あつてる？」

（「あつとるよゝそれこつちで使うとかなり切れ味上がるぞ！」）

まじで！やっぱり俺の読み正解やなゝじゃガンバロゝ  
星に喜んでもらおう

（「楽しそうじゃの・・・まあええわい、前言つてたアレ取りあえずは用意したからの」）  
ん？アレってなんだ？？

（「アレってガンナー装備の事じゃ、ま言つても弓だけじゃがのゝ」）

「マジでセンキュゝ！！！」

（「でも弓を媒介にする武器もってないから、誰かに弓かりなよゝそれとガンナー装備無いから普通の剣士装備で使えるから」）

「おkおk分かった、あとさ・・・お願い聞いて」

（「なんじゃ、物にもよるぞ」）

正直アレを全然摂取してないからかなりキツイ！

光「タバコくれそれと酒！」

（「なんじゃそんな事か！別に構わんぞ」）

マジで！やった！正直タバコ吸わないとキツイwww

（「銘柄はお主の部屋に、あつたやつでいいのか？」）

「おう！ライターもよろしく」

（「じゃタバコとライターアイテム覧に沢山入れとくぞ、それと酒じゃなメンドイからそれも勝手に選んで、入れとくの」）

「ありがとうございます」

ここは真面目に礼する。

（「それと、言い忘れてたけど今装備してる武器じゃモンスターに、弾かれるから、ちゃんとMH装備に、切り替えなよ」）

「だからかゝただのドスランポに、弾かれたんか、でもなんでや！」

（「恋姫とMHで、分ける言つたじゃろちゃんと恋姫戦の時はどんな奴の武器より強いぞ！」）

「じゃこつちの武器も弾かれるん？たとえばこの星の槍とか」

（「んゝお主以外は、設定してないから、切れ味が高いなら刺さるじゃろうな、でもこの世界の切れ味は、MHに比べるとしれてるぞ・

・まあその砥石で砥いだらかなり、上がるから硬いモンスター以外なら刺さんじゃね・・・」

「びみよーな意見どうも」

（「でもいくら攻撃出来ても、恋姫の防具じゃ紙やから、一撃もらうとやばいぞ」死ぬぞ」）

「そうやんな」やっぱり」

最初に会った三人ぐみ、ランポに瞬殺やったしな。

「それとさ」なんで秘薬50？しかもいにしえの秘薬は5個？こんなに利くのに」

（「そんなポイポイ本来死ぬ奴を、回復されてら困るんじゃ、本来はモンスターに、やられた奴のみのつもりで使って欲しかったんじやがの・・・まあええわい。いにしえは秘薬は、流石に死んだ奴は生き返らんぞ。秘薬でも効かない怪我したとき様じゃ」）

やっぱりか・・・そんな気はしてた・・・

「わかった」

（「本来は、お主がモンスターでやられた時のためじゃぞ、余りほかの奴に使うなよ」）

「わかったわかった」

（「「んで。慣れたか？」」）

「まだ来て1日すら経ってないねんぞ、なれるか」

（「惚れたか？」）

「なにが？」

（「いや星に・・・」）

「な、なに言ってるの・・・」

（「みなまで言うな、確かに可愛い星ゲームの時もエロかった・・・」）

「な、何！」「フルフル」

（「何怒つとるのじゃエロゲーなんじゃぞこの世界」）

「忘れてた・・・」

ん？ちよつと待て

「なあ主人公つてだれや？」

（「お主みたいに、やってくる高校生の日本人じゃ名前は北郷一刀じゃこの世界じゃ通称種馬じゃ」）

おいおいマジかよ、しかも種馬って  
流石エロゲーやった事無いけど・・・

「マジか！それとここの様三国志やねんな？そいつは、なんかルー  
ト選んで行く感じが？」

（「ん？最初に選ぶの、魏、蜀、呉のどれかじゃ」）

「で、ここに来るやつのルートは？」

（「蜀じゃが・・・まさかお主・・・」）

「な…なんや？」

神（「星〓趙雲〓蜀さらに、主人公蜀ルートまあ・・・頑張れ」）

「ちょ！？まてまてなんも言うたらんやろ！！」

（「もゝ光君たら、素直じゃないぞ」）

「よし出て来い叩き斬つたる！」

（「・・・まあワシもこう見えて忙しいからじゃ、あと好きな子出来るのは、勝手じゃが、モンスターも頼んだぞ！それとそっちの文字書き出来るようにしたから、でわでわ」）

「オイ待て！この駄神が！！しかも最後にさらつと重要な事言つな  
」！」

くそ頭の繋がつてた感が消えやがった。

「あの駄神め勝手なことぬかしやがって」

そう言つて再び星の槍を砥ぐ。

~~~~~次の朝

「ハハハハ！朝一の一服さいこ〜〜！！」

しかもこの世界空気めっさ美味いから寝起きサイコー

まあ野宿じゃなかったらもつと良かったけど・・・

しかしあの駄神・・・ドンだけタバコいれてやがんだ。アイテム覧

2面99個が一杯入ってやがった。ライターも・・・

酒もかなりの種類いれてんな、ビール日本酒焼酎カクテル系全般に、どぶろくなど等ワインは俺飲めないんだけど・・・しかもかなりの名酒ぞろい・・・おいおい予約しないと買えない酒とか入ってるぞ

wwww

どんだけ〜〜

テンション上げてると

「朝から元気ですな、光殿！」

ッ！！

「お、おう星おはよー／＼／＼」

ハズかしーーーーー

「ああ、おはよう。光殿、口にくわえてるそれはなんですか？」

「ん？タバコやけど」

「たばこ？ですか？」

ん？タバコってこの時代なかったけ？

「ん〜なんていったらいいかな、説明が、難しいな」



「そうですか、まあいい。そろそろ行くと思うのだが？」

いいのかよ、もっと聞いてきてよ。

「ん。わかった行くか、守りたいものの守りに、それとこれ出来たよ」

星に龍牙を渡す

「もう出来てるのですか・・・な　なんですかこれは・・・」

あれなんかした、俺普通に刃の部分砥いだけなんだけど・・・

「す…すごい！！まるで新品同様な輝き！触れるだけで指が斬り落とされる様な刃！！」

ふるふる震えながら絶賛中の星。　なんか色々言ってるけど、刃物説明されても分からん。

まあ喜んでくれてるないいか。

よし！人を斬るのは慣れんけど、覚悟決めたしな！

「じゃ、そろそろ、行きますか」

## ゴミとハンターと大怪鳥

出発前村人や村長に見送られ、今俺ら二人川の近くの賊の溜まり場に、向かつてます。

風に凜は武術が、出来ないのので来てないで。

「ふむ、今日は、一段と晴れ渡る日ですな」

えらく緊張感も欠片も無いですな。

今から賊を討伐しに行くとは感じられん。

「星」なんかもうちよつと緊張感もとうや」

「な」にこれぐらいがちょうど良いのですよ」

まあたしかにどんより行くよりも、いいけどな  
多分そろそろ着くんじゃね？

「星」そろそろじゃないの？」

「そうですな・・・」

なんかあの辺から煙が・・・  
多分焚き火の火か

「星あれ」

指を煙の方に指す。

星は、フムとうなずき

俺らは、煙の方に、行く。

着いたら着いたで・・・なあおい      ピキッ

大勢の賊もとい黄巾党もとい塵がいたわ。

しかも隅に、ボロボロの若い女性が・・・無理やり襲ったのか・・・

ピキッピキッ

ん？塵共が、こっちに気がついた。

「ん？なんだてめーら」

「おうおう。ここ通りてーのか」

「いい女じゃねーか。ヒヒヒ」

ピキッィー

汚い目で舐めるように星を、見んな！

「兄ちゃん残念だな、金目の物置いていきな」

「女もだ！俺らがきゃんきゃん言わせてやるよ。      その女ども見  
たいな。      ヒヒヒ」

ブチーーン

俺がきゃんきゃん言わせてやんよ・・・

「きさまらっ！？え？光殿？」

俺は星の前に入り

「俺らは、お前らを討伐しに来たもんだ」

「んあああ！なめてんのか！」

「あと、女欲しかったら、口説きやがれ！！塵があああ！！！！」

「オイやっちまえ！しかし女は殺すなよ！」

ざわざわわ出てきたで・・・200やったけ？

「星いくぞ」

「ああ、趙子龍！参る！」

「駆け出しハンター光！行くぞ！」

「高々二人に、何が出来るってんだ！！」

…名乗りの時に、俺何？・・・ダ～サ～って思ったの秘密で・・・

俺は大剣で暴れ回り、星はスピードで翻弄し暴れ回る。とりあえず暴れ回った。

首が飛び、腕が切れ、胴もたった斬る。

なんか覚悟を、決めたからか知らんが、思ったより戦えてるな俺。

SIDE～星～

戦いが始まる前に着くなり光殿雰囲気、また変わった隅にいるボロボロな女子たちを、見てからだ。怒っているのであろ、それは私と一緒だ。

あと賊との会話でも、ますます雰囲気が・・・

賊の戯言が、余りに癪に障ったので文句でも言おうと思ったのだが。

光殿が、私の前に入り

「俺らは、お前らを討伐しに来たもんだ」

「あと、女欲しかったら、優しく口説きやがれ！！塵がああ！！」

つと啖呵を切ったのだった。

光殿いつかは、私も口説いてくださるかな。フフフ

それと戦いが始まり驚く事があった。

私の突きが、賊の大きな剣に塞がれそうになった時だ。

私の龍牙が、賊の剣折り、そのまま貫き殺したことだ、確かに光殿は切れ味を上げてくれるとは、言っていました。

まさかこれほどわ。

・・・光殿私の槍に、何をしたんですか？

SIDE～END～

時間も余りかからず賊も、えゝ1・2・3・・・15かあとチヨイでかい奴がボスか？

「さあ、どうする？まあ逃がさないけどな・・・」

「化け物か！」

「人の皮を被った化け物に、言われたくないですな」  
さすが星、言い返すの早いわ。

ん、なんでか違和感が・・・

「舐めるな！！こんな事もあるうかと、早く連れて来い！」  
ボスがそう言つと子分が、ボロボロで泣いている綺麗な女性を、連れてきた。  
もちろん首に、剣を突きつけて。

「まだいたのか！？」

戦いながらさつき隅っこにいた娘は、保護し全員逃がしたと、思つとつたのに。

「おうよ、お前らくるまでに、俺が可愛がつてたからな、ガハハハ」

「屑が！！」

流石にむかつくが……星が怒ってる……怖い……それと

絶対来てるって……色々やばいで、この状況……

「おう！早く武器を捨てな、さもないとこいつが、どうなってもいいのか？ああっ！」

「くっ！」

武器捨てる星

俺は、そのとき右目を閉じ、「装備選択」といい。MAP選択……

・  
ヤバイヤバイ！！来てる来てる、すごいスピードでこっち来てるって！！

「おい兄ちゃんも、さっさと武器を捨てな！」

「光……殿……？」

この速さ飛んでんのか？ここに来る

「上か!？」

空を見る

???「ギューー!!」

おいおいアレは・・・薄い赤色の体、独特のクチバシ

イヤンクツクか!!

ちょうどボスの後ろに下りてきたで。

ボスも子分も人質の彼女も、気がついたみたいやな、振り返って吃驚してる。

「な、なんだこいつは・・・」

・・・今の、うちに!

「星今のうちに女性を、そして遠くに逃げる!」

星も吃驚してたみたい。

でも星は、頷き武器を拾い、高速で、女性を人質に、している子分



を、  
吹っ飛ばし女性の手を引いてこっちに戻ってきた。相変わらずハヤッ！！

「テメー人質かえ」グ、グ、ギュー」ぐぼbあじゃsd！」

ボスが台詞を言い切る前にクツクのクチバシで突かれて、グシャグシャになった。

「ボツボスー？」

子分どもが、騒いでるで。  
おいおい、はよ逃げな

「ぼへばー！」「ぐびば」「がはわば」

クツクの回転尻尾アタックで、一気に、7人が死んだ  
クツク案外動き速いで！

「星！見てないで早く逃げろ！」

「あ、ああ、光殿死なないで下さいよ！」

「死んでたまるかよ」

そう言うと、星と人質の女性は、この場からいなくなった。

「い、いやだー死にたくない！！！」

逃げようと、残りの子分が、走ろうとした時クツクの連続火炎液で消し炭に、された・・・

おいおいおい勝てんのかこれ、

やば！「装備選択！」

レウスSが、良いのだが、違うの試すか・・・じゃギザミス！  
真つ青な西洋の甲冑とでもいいええんかな？

あと武器つと、クツクつて・・・弱点なんやったけ・・・？  
そんな事を、考えてると

「ぶほっ！」

クツクの体当たりで吹き飛ばされた。痛い

クツク「ギューー！！！」

ちよおま・・・ちよまたんたんかい！

雷や！雷弱点なら・・・腰の日本刀を抜く・・・逃げながら・・・

光「しっこい！！！」

こつちくんな！！

火炎液振り撒きながら走ってくんな！

クツク「くえくえ」

「双剣、機神双鋸！！」

この間は、大剣やったから、今回は、双剣！

これチェーンソーみたいになってて、周りの歯がちゃんと動いてる。ほんまチェーンソーみたい。

さあ逃げるの終わりや俺は振り返り

「さあ反撃開始や！！」

そう意気込んだはいいが振り返り立ち止まった俺。  
クック全力で、走って来ていた……………  
結論を言おう

「ぶはう！」

吹き飛ばされました……

しかーしそれでも武器を放さなかった俺！ハンターの鑑やなWWW  
今がチャンス！クックは、背中を見せている！

俺は立ち上がり、クックの後ろから      斬る   斬る   斬る

「オラオラオラ！！双剣乱舞くらわんかい！！！」

ブンッ！

「ぎゃ！」

また吹き飛ばされた。しっ、尻尾半端ナイ・・・

あんなに斬ったのに・・・死なないの・・・

クックこつち向いた。ん？もしかして怒ってらっしやる？

やばいジャンプしてきた！

「緊急回避！」

俺のいた場所・・・クチバシで大穴開いたよ・・・

そのままクックは、連続のクチバシ攻撃！俺も双剣で受ける！

「重いし、怖いぞー！」

「くそっ！？離れる！」

剣を振るい距離を取る！

なんかアイテムアイテム！！左目閉じ「アイテム選択」

・・・音爆弾！！・・・これや！！

鎧で見えないが鎧の隙間のショルダーバッグから音爆弾を。取り出し。

クック目掛けて投げる！

キーン！！

あまり五月蠅くないけど、クツクは、痙攣してる。

・・・今や!?

俺は、ボコボコにされたことへの怒りで鬼神化モードに勝手に突入してたみたい。

目にも止まらぬ無数の剣撃でクツクの顔を八つ裂きにしてやった。

「これで最後だああああ」

顔に双剣を突き刺すと、クツクは、力なく倒れこんだ。

「はああああああ・・・すう」

「イヤンクツク討ち取ったあああああ!!!」

俺は、そう言っとそのまま座り込んだ。

「いやー疲れたわ」

そしてクツク装備、要らんで・・・

## ゴミとハンターと大怪鳥（後書き）

光君どの　で行こう・・・

まあ次回もよろしく

## 戦いの後

クック先生を仕留めて、座って一服中です。

「ぶは〜」

いや〜連戦やったな。

ほんま疲れたわ。

装備は加除済み、クックの屍骸も消えたしね。

タバコを消していると。（ちゃんと携帯灰皿持ってるで！）

「光殿！ 無事でしたか」

「おう星、なんとか無事やったで」

まあ正直いっぱいいっぱいやったけど・・・

あと体ぼろぼろやったから、初めて回復薬飲んだけど、地味に美味かった。

んな事より。

「そうでしたか、それはよかったです」

「うん。んじゃ、とりあえず村に帰りますか」

保護した女性&少女全員で8人、半分が酷い事されとったので、星

に任せた。

こんな男の俺が出来るわけないんでな、俺は回復薬で体の傷治す  
ことしか出来んわけ。

ホント酷い事するわ……

「光殿」

「なあその殿てっの、止めてくれんか？呼び捨てていいで」

なんか気持ち悪い、慣れてないからかな？

「そうですか？では光」

……うはっ！

言わせたん俺やけど

……女の人に下の名前呼ばれたん……母親以外いなかった……orz

な、泣いてないで、いやホント……

「光！」

「うお！」

「人の話を、聞いておられるのか？」

「すまんすまん、聞いてなかった」

「まったく、光はよく話を聞かない事がありますぞ」

「氣いーつけます……」



星はさっきのイャンクックの事を、聞いてきたわ。

まだあんなのが居るのかとか、私たちでは、倒せないとかe t o .

. .

まだ、俺もどんなモンスターが、来てるか分からんからなあ . . .  
とりあえず、まだいっぱい居る、とだけしか答えられなかった。

で、俺みたいな鎧や武器無いと倒せないから、出会ったら全力で逃げろって、伝えた。

そしたら星は。

「そうですか . . .」

小さな声で、悔しそうに了承してくれた。

この子、正義感バリバリやもんな、でもこんな子には、関係ない世界のモンスターで、死んで欲しくない。

「なあ星そんな顔すんな!」

「俺が、あんな化け物ん全部倒すから、ス、スグには無理やけど、でもなるべく早くこの世界の人達も、星も、俺が守つたる!! だからそんな顔すんなよな」

興奮してもた . . . . なに力説してんねん俺 . . . . . しかもグダグダやしっ!!  
でも星は。

「では、お願いしましたぞ、フッフ」

っと笑顔で答えてくれた。

~~~~~村~~~~~

「星ちゃんおにいさん」

風凜コンビが、村の入り口でまっていた。……ふう、りん？……  
・風鈴……いやまさかな……

「思ったより遅かったですね？何かありましたか？」

クック先生のせいで、遅なっただな。

「なに、男と女揃えばやる事は、一つ」

せつ、星こらっ！腕絡めんな！

「まさか…星と光殿はも、もうそk…ブー——」

「凜ちゃん。はい、トントンをしますよ」

なんだアレは、まさか前の血の池は、凜の鼻血やったんか。  
ってか、何を勘違いしてんねん！

「あーないない」

とりあえず星を、引き離す。

流石の俺も、その胸にはそろそろヤバイ

「つれないですぞ光」

からかう気まんまんやったやんけ星。

「と、とりあえず村長に報告してきます。それと捕まってた皆さんも連れて行きます」

ふらっふらやけど大丈夫か？

星が支えていったわ、流石に…

気が利く子やね。でも原因君やからな。

「本当は、何があっただんですか？」

「ん？ああ、またモンスターが出たわ」

「大丈夫だったんですか？」

「とりあえず倒したし、人質取られたとき役立った」

「人質？」

話説明中

「そんな事が、あっただんですか？」

「ある意味役立ったってわけ」

ぼへっつと説明聞いてくれたけど、分かってんのかな？  
しかもなんか寝てたような……

「そういえば、お兄さんこのあと、どうするんですか？」

そやなどうしよ。

なんも考えて無かったな…  
そんな事考えてると

「何のはなしですか？」

稟と星が、帰ってきた。

「お兄さんは、このあとどうするのかと」

「どうしよ」かな実は、何も考えてないんよ」

「なんと光と言えば光らしいですが、私は公孫贇が治めてる幽州と  
いう所を見てみようかと」

公孫賛??誰やそれは、俺には三国志の知識そない無いぞ・・・

「私と風は、陳留に良い主君がいると聞いて向かっていた所です」

陳留って曹操か? 忘れたわ、中学で習ったような。

「では、星殿とは、ここでお別れですね」

「そうみたいだな……光、私と来ないか?」

ん? なんで? いいの?

「いや別に、気にすんな何とかするし」

「そうですか、それでは光、路銀は持っているのですか?」

「え?」

金なんて持つてるわけ無いで。  
じじい金は、くれてないし…

「風と稟は二人旅、私は一人旅、路銀なら少し多めに持っているのだがな、そうか光は一人で旅をするのだな」

ニマニマしながら言っ てきやがって…

はい、そこ二人！その笑みやめなさい！！

くそっ！ついていけば、ええんやろ。

そうさ、俺には金が無い、肉と酒は大量にあるけど、たまには違うの食べたいさ！そして宿に止まりたい！

そういうわけで…

「星、俺やっぱり星に、付いていくわ」

「そうですか〜そこまで言うなら付いて来てもいいですよ」

満面な笑みで言いやがって。

「よろしくおねがいます！」

「ああ、宜しく頼む」

俺こいつに逆らえない気がした…

「星殿と光殿が二人で旅……ブブーーーー」

「稟ちゃん。はい、トントンしますよ〜」

またやってらゝ

しかしドスランポスにイヤンクックか・・・俺ティガとかレウス出てきたら、勝てるのかな・・・

そう考えると、後ろから3人の笑い声が。  
なに弱気になつてんねん！

この笑顔守るって決めたやろ！

全部狩つたるぞ！！

そして村で風と稟と別れ（稟に回復薬Gを、鼻血出しすぎのため渡しといた）

俺と星は幽州に向けて歩き出した。

## 普通の少女（笑）（前書き）

なんか本編より、モンハンばっかりなので…進まないぜ！

しかし、ルートどうしよ……………そしてキャラの喋り方難しい・

まあごめんごめん、本編です。



## 普通の少女（笑）

今星と、幽州の公孫贄の所に、向かってる。しかも馬に2ケツで・・

なぜかって？

馬が、乗れないからや！バイクは乗れるけどさ。

こないだの、村でお礼として馬貰ったンやけどさ

「俺…馬乗れないで……」

「じゃあ私の、後ろに乗れば良いのではないか？」

それで現在に至る訳だが、断れば良かったわ。

バイクと違い持つとこ無いので、仕方が無く星の腰に手を、掛ける

……

……細っ！腰細っ！しかも近いから良い香り……

そんなこんなで、モンモンと、しながら自らの理性と戦ってたら。

「おっ！町が見えてきましたぞ！」

「まじか！やったーやっと着いたか！」

ホント良かったわ、理性もそうやけど、尻もそろそろ限界でした。それと馬に強走薬グレート飲ましたら、休まず走ってくれたわ。

町に入り思った事が、綺麗な町なのだが、所々民家が潰れてるけど  
なんでや？

それで城に着き星が、門番に話しに行き公孫賛所に、案内してくれる  
みたい。

城の廊下で

「もう馬は、乗らんで」

「おや、あんなにくっ付いていらしたのに、ご不満ですかな」

「いや、お尻が痛いって事な」

「…光は、からかいがいが、ござらんな」

やっぱりからかう気やったんかい！

そんなやり取りをやり、太守の間に着いた。

んで、ポニテ風の髪が赤い子がそこに居た…やっぱりやねんけどこ  
の子とか星とか、髪の色すごいな…

もう馴れたけどな、むしろ似合ってる。

「あんた達か？私が公孫賛だが、なんの用だ？」

「私は趙雲。字は子龍。客将という形ではあるが、ここに士官させて  
頂けないか！」

「んあ？星、士官すんの？」

あれ聞いてないで？

「本当か！人が足りないだから、来てもらうのは助かる、それに趙子龍と言えば、常山の昇り竜じゃないか！」

そんなに有名なんすか星…

まああの趙雲やもんな女の子やけど。

「私も有名になったものだな」

嬉しそうな星…まあ武人なら当たり前か。  
「つかもう採用？？試験は…？面接だけ？  
なんて器のデカイ娘や。見た目幸薄いけど…」

「星やったら武官かあ？」

「いや、私は文官、武官どちらでもこなせますぞ」

「うそっ！」

「嘘ではありませんが…どう言う意味ですか？」

ああ…これ？ちょっと怒ってないかい？

「いや、すまんすまん、戦つてるとこしか見てないから、別に悪い

意味はないで」

「まあ、いいですが、それと夜の相手もできませんぞ」

うつ腕絡めんな！

そしてその、ニヤニヤやめーい！

「はいはい、離れた離れた」

「お前ら何しに来たんだ…まあいいか文官も、出来るなら有難い、客将でも構わないよろしく頼む子龍、それとちゃんと名乗らせてもらおうか、姓が公孫、名は賛。字が伯珪だ」

「こちらこそ、宜しく頼む伯珪殿」

「でだ、お前も士官か？」

「え？俺は、別にそういう訳じゃ無いねんけど、ただここまで星に付いて来ただけやし」

「そなのか？それとお前名はなんて言うんだ？太守の私が名乗ったのに、失礼だと思わないのか？」

忘れてた訳じゃないんやけどな。

星が、喋るから名乗り出来なかったし。

「すまんすまん、俺は中村光、姓が中村、名が光だ、字は無いから」

「字が、ないのか？」

「それは、光は天の御遣だからですよ、伯珪殿」

「ちよ、星！」

「良いではないか、どうせ説明しなければならんのでしょ」

んーそうなんやけどさー天の御遣ってのは、やめてほしかった。

「？説明ってなんだ？」

はあ説明するか…

説明中~~~~

「そのもんすたあを、倒す旅をしているのか？最初は眉唾物だと思ったが、変わった服装してるしな、天の御遣ってのも頷ける」

「そう？あとモンスターな、それと聞きたいねんけど」

「ん？なんだ」

「ここに来たとき思ったンやけどな、町の所々に、壊された家あったやろ？それモンスターの仕業じゃないか？」

まあどう見ても人が、壊した感じじゃなかったしな・・・

「気がついたみたいだな、中村の説明を聞いた感じからするに、そうだろう」

「ここにも出たのか」

「みたいやな」

「あいつは化け物だ…剣も矢も効かないし…とりあえずあいつが出たら、民を城に逃がすしか手が無かった」

なんか泣きそう、やめてやめて女の子に、泣かれたらおじさん困る。

「しかもあいつ、いつも地面から出てくるんだぞ…このままだと民が、みんな逃げてしまっ、最近じゃ賊もどんどん出てくるし…」

「踏んだり蹴ったりだな、それに地面からですか、それらの様な、

モンスターは居るのですか？」

ん？地面から出現？

そして星、ちゃんとモンスターって発音できてるやん。

「なあ公孫贄そいつの、特徴教えて」

「ん、ああ、大きな青いヤドカリだ」

青いヤドカリ？・・・・・・・・・・シヨウグンギザミか！？地面から出てくんなそーいや…

「シヨウグンギザミやな、デッカイ爪を持ったモンスター」

「公孫贄、そんな顔すんな俺が来たんや、次来たら狩ったるから」

ピキーンー

ん？・・・タイミング良すぎやろ。

来たな、違和感バリバリや

「ホントか！！中村くあいつを倒してくれるのか！！」

「光は、それが使命ですから」

「使命っつーか何っつーか…」

じゃ右目を閉じ「装備選択」MAP決定とおるおるなんか、ちよつと離れてるな。

すると太守の間に、兵士が慌てて入ってきた

「公孫賛様ヤツが、出ました！！」

「またか！場所は？」

「町の外れであります！」

「分かった直に行く！」

「お、町から離れた場所ならちよつとええな」

町外れか、街中で暴れなくてちよつとええな。

しかもそんな狭い所で、戦わなくてちよつといいし。

「え？」

なに吃驚した顔してんのこの子



「いやいや倒して欲しいやろ？今から狩ってくる！」

「光、私は見に行っても構いませんか？」

「良いけど近づくなや」

「それぐらい、心得ているさ」

「公孫賛、兵は戦いの邪魔やから出すなよ」

「わかった、あと私も連れてけ」

「ご自由に、でも近づくなよ」

「わかった！」

さてさて今回も、大変やな。

普通の少女（笑）（後書き）

モンハン3予約出来ないぜ！どうしょ…

PSPの恋姫、魏買う金がwww

では！また今度で ノシ

狩り中なんですが・・・(前書き)

どうぞ続きです。

狩り中なんですが・・・

ギシギシ　ギシギシ

「でかくない？」

「いや、だから大きいって言っただろ」

「しかし、アレは確かに・・・」

「・・・す、すごく大きいです！」「・・・」

女の子の前だからって、調子乗ってショウグンギザミ直ぐに倒してやるぜって、言ったけども・・・

前言撤回させて、直ぐには無理！

いやデカイって何アレ？金冠レベルじゃないの・・・

一軒家？しかも三階建てぐらい

「たしか弱点殻の中やったけ？・・・とりあえず二人は、ここで待機で」

「判った」

「・・・光、気をけるのだぞ」

「おう」

親指を上げて答え、ショウグンギザミに、向かって走っていく。

side 一刀

俺の名前は、北郷一刀高校だ。  
気がついたらこんなパラレル三国志に、来たみたいだ・・・

「桃香、公孫賛の所ってまだか？」

「もうスグだよご主人様」

ニコツと可愛い笑顔で、答えてくれる子。  
はあ、俺ってヤツパリ違う世界に、来たんだ・・・  
この子は、劉備、そうあの劉備・・・女の子だけど。

「お兄ちゃんは、だらしないのだ」

この子は、張飛・・・そうあの・・・女の子ですけど。

「そうです、ご主人様もっとしっかりしてください」

最後に、うん。

関羽・・・女の子ですけど、なにか？

「そう、言われてもな、愛紗」

そうそうこの世界に、来たとき真名？を教えてもらった。

劉備が桃香、関羽が愛紗、張飛が鈴々

なぜか俺が、天の御遣と呼ばれ、ご主人様と言われてる。

三人の為、天の御遣として御輿の役割引き受けたから、そう呼ばれてるけど。

「仕方ないだろ、こんなに歩いたの久々だし」

「はあゝそれが、だらしないと言ってるのですよ」

「まあまあ愛紗ちゃん」

たしかにだらしないよな、俺・・・  
でも最近までただの高校生なんだぜ！

「うおおおお」

ん？

「なんかさ、声聞こえなかった？」

「え？そうかな？」

「聞こえたのだ」

「ええ、聞こえましたね、何でしょう賊ですかね？」

桃香以外聞こえたみたい、どんまい・・・  
俺達は、声の方に走る。

「おいマジかよ・・・」

「あのデッカイのは、何なのだ！」

「待つてよゝみんなゝえッ！何アレ？」

「誰か、戦っている見たいですね」

ここは、三国志のパラレルワールドじゃないのか？  
俺は知っている、あの大きなモンスター  
ゲームで知ってるモンスター

「なんで・・・シウウグンギザミがいるんだよ」

しかも戦っている人、どう見てもハンターだ。  
あんな鎧、剣、この世界には、無い！

「ご主人様、何か知っているのですか？」

「え？ああ、知っている、でもなんて説明したらいいか分からない」

「そうですか」

「あ、あのゝ愛紗ちゃん、あの戦ってる人・・・」

「押されてるのだ！」

「そのようですね」

「鈴々！桃香さまとご主人さまを頼む」

「えゝ鈴々も戦いたいのだ！」

「私が、離れたら誰が二人を守るんだ！」

「ブー分かったのだ」

「それでは、頼んだぞ」

そう言い愛紗は、走り去った

「なんでモンスターハンターなんだよ・・・じゃさつき空を飛んでた龍って・・・」

side～END～

よしゃー行くでー！！

「装備選択！」装備は、タロスSにするか。

武器は：双剣、機神双鋸。

そう前と一緒に 雷属性ゝゝ

ハンマーにしようか、迷ったけど属性剣やし、いけるやろ



「うおおおお」

俺は剣を振り斬りかかる！

キンッ！！

・・・剣を振るう！振るう！

「セイ、オラッ！」

キン！キャンッ！

またかーーーーー！！

硬い！ 硬すぎる！！

やっぱり双剣駄目かーーーーー！！

予想以上に硬い。

そんなこんなでテンパッテルと。

ギザミの爪の攻撃！

ブーーーーー

「今のあぶい！」

爪の攻撃！

「待て待て」

爪の攻撃、爪の攻撃！

「今カスツた！」

ハンマーに変えてる余裕がねえ。

避けるの精一杯。

隙を見て懐に入り斬る！

・・・「おお、お腹は斬れた！」

しかしこの位置、正面は非常に非常に不味い。

怒涛の猛攻にさらされてしつかり踏み込めてない。

目の前に、あの大鎌みたいな爪が迫ってくる恐怖パネー

ヒットアンドアウェイで、攻めてるが、全然ダメージが与えられて  
気がしない。

最初ッからハンマーで、行きゃよかった！

ギシギシ ギシギシ

「チヨイ離れろ！そんなグイグイ来ないで！」

四苦八苦してると

「そのの！助太刀いたそう！」

・

・

・

・

・

・

う、うそー！

誰だ！公孫贄でもなく星でもない

黒い髪の長い娘が、槍を構え立っていた。なんで・・・？

「うおーい！」

「な、なんでしよう？」

「すまんけど・・・邪魔あああ！（ブーン）うわっ」

あぶな！今は紙一重や！

「押されているではないですか！なんとわれよと助太刀します！」

「いやいや、話きけー！」

槍構えて走ってくんな！

これじゃヤバイ、ターゲットあの子に、変わる！  
ギザミの攻撃を、かいくぐりその子に、向かい。

「はい！失礼！」

「え？きゃ！」

剣をしまい、女の子を肩に抱きかかえ、とりあえずギザミから離れる。

この子も、腰細っ！

言ってる、場合じゃねー！

ギシギシ　ギシギシギシ　ギシ

「星いいいい！この娘何とかして！」

「は、離せ！」

「無理です、死にたいんか！」

「やって見ないと分からないではないか！」

「やらなくても無理！無理なモンは無理や！」

ギシッギシッ

ヤバイ！ギザミ来てる来てる！

ん？なんか正面に、女の子2人と野郎が1人居るぞ！  
うつそー！

えええ！邪魔や！ギザミとぶち当たる！  
次から次と~~~~。

「光！」

星が、その子らの所に来てる。

「ちよい悪いけど我慢せいよ」

離せ離せと、騒いでる所悪いけど。

あんなに、人居る所まで行けないので、

そのままこの子を星に向かって……投げた

「きゃー！」

「星！説明たのんだ、そして離れてホントたのんます！」

この距離なら、武器変えられる！

今度は、大剣を抜き「装備変更」

ハンマー　スーパーノヴァ！

「行くぞ！反撃じゃああ！」

side～星～

光の戦いを見ていると伯珪殿が、聞いてきた。

「なあ」

「なんですか？伯珪殿」

「いやさ、あれ中村の防具、何処から出てきたんだ？しかも剣変わったぞ」

「天の御遣ですから」

「なんか適当だな・・・」

「正直私も、知らないんですよ」

私も全部は全部聞いてない。

しかし光が、一人で戦っているのがもどかしい…

私が、入っても邪魔になるだけ、それは分かっている。賊との戦いでは、二人で倒せるでも。

モンスターの場合、私は見ているだけ、それが少し辛い。私も光の横で戦いたい、でも邪魔になるのは嫌だ。

「なあ子龍、中村のヤツ押されてないか？」

「そのようだな…」

「ん？なんだ？向こうに人が」

人がいる、しかも四人…

このままでは、光の邪魔になる。

「伯珪殿！」

「な、なんだ？」

「あの四人、光の邪魔になるかもしれませんが、近づくなと伝えてきます」

「わかった」

私は、四人の場所まで走る。  
すると一人が、光の所に走っていった。  
これでは光の邪魔になるな。  
とりあえず三人の所に向かうとしましょう

「おい、その！」

「な、なんだ？」

「今行ったヤツを、連れ戻せ！」

「何言ってるのだ？愛紗が助けに行ったのだ、負けるハズがないのだ！」

「絶対に勝てない！」

「でも本当に愛紗ちゃんは、強いよ」

「私たちの武器防具ではヤツには、勝てないのですよ」

「・・・そういう事が・・・」

この御仁は、わかったのか・・・？

この説明で・・・！？

コイツ服装が・・・光に似ている・・・

「星いいいい！この娘何とかして！」

振り向くと女子を肩に、抱きかかえこちらに向かっているではないか！！

「光！」

呼び返すと、抱きかかえている女子を、投げてきた！  
何とか受け止めると

「星！説明たのんだ、そして離れてホントたのんます！」

説明？めんどろは、余り私に押し付けなくてもらいたいのですが  
しかし、そうは言ってられないな

「とりあえずそういう事なので、ここから離れて貰えないか？」

side～END～



「行くぞ！反撃じゃああ！」

しかーし！同じ鉄は二度踏まん！  
ハハハ相手は走って来てるんだぜ！  
毎度毎度吹っ飛ばされてたまるか！

「ええ！よけれん・・・ぶはっ！」

吹っ飛ばされたさ…サイズデカイの忘れてた…

「痛い・・・回復薬・・・」

回復薬を取り出し飲む！

ゴクゴク・・・シャーキン！

「よしや回復」

ブン！

「あぶつ！」

すかさず避ける！  
調子のんな！

「オオオオオオオオオオッ！」

ハンマーで、思いっきり叩く！

バツコッン！！

・・・よっしゃ！こいつぁいいわーーーーッ！  
どこを攻撃してもダメージを与えられる！  
ハンマーの前では自慢の装甲も形無しや。  
最初ッからハンマーにしとくべきやったわ。

「オラオラオラ！」

しかし弱点は殻の中、殻を割らないと

背後に回れない、デカイ！くそ！  
相手の攻撃かわしながらやから・・・ジリ貧やんけ！

・・・ガンッ！

ギザミの動きが止まった・・・？  
なんでや？

「こつちだ化け物！この趙子龍が相手だ！」

！？セイサン・・・ヤリカマエテ・・・ナニヤッテンノ？

「せ、星！なにしてんねん！」

ギザミが星に、振り向く。  
不味いけど！今や！

「お前の相手は俺やろが！背中ガラ空きじゃ！」

殻に思いつき叩く。

バツコンッ！！

殻が粉々に碎け散った。

するとギザミは、星の方に行かず逃げようとする。

「わはははは！ どこへ行くとういうのかね？」

ハンマーを放し二本の刀を抜く！

双剣、機神双鋸。

逃げるギザミの背中にジャンプし

「星い！あとで説教じゃあああ！」

双剣を刺す！

するとあっさりと絶命

「おら！シヨウグンギザミ討ち取った！」

「そ・れ・と・星い！危ないやろ！」

「いや・・・隙を作ろうかと・・・すまん」

シュンってすんなよ

でも星が、引き付けてくれたから殻割れたしな・・・

「でも、まあ…助かった有難う」

したら笑顔で

「いえいえ」

やっぱりこいつには、逆らえない気がした・・・

狩り中なんですが・・・（後書き）

とりあえず一刀君たち出したけど・・・どうしょ・・・

武器説明・ハンマー、スーパーノヴァ （攻：1352 雷：450）

なんかゴツゴツした氷見たいなのが、着いたハンマー

タロスS：基本防御260 龍属性しか+なし。見た目説明難しいので、簡単に凄い肩当が着いた鎧です（てきとだ〜）

とりあえず光君は、Sシリーズの4つしか、まだ持ってません。

また次回！

## 緑色の人達（前書き）

凄く

グダグダ感が…

先に、誤っておきます。

とりあえず本編へ！

## 緑色の人達

はあゝ今回の狩りは、なんか色々疲れた  
なんか助太刀とかホント、カンベンこうむりたい  
さてさて

「星さっきの人らは？」

「ああ向こうで待ってもらっているが」

おうおう了解

髪長い子には、謝らないとな  
折角善意で、助けに来て邪魔って言うて投げ飛ばすとか、失礼すぎるし。

とりま行きますか。

お！いたいた

四名発見！

すると、ほんわかしている子が

「あ、あのゝ大丈夫ですか？」

またコレは可愛い子やな

「大丈夫どうもないで」

別にコレっと言って何も無いしな。  
そだそださっきの子に、あやまらないと。  
あれ？こっち来た



「先程は、本当に申し訳ない」

いきなり頭下げてきた。

は？

なぜ？

「え？何が？謝るのコツやろ？折角助けに来てくれたのに、必死やったツーても酷い言い方したしな」

「いえ先ほど趙雲殿に、説明してもらいました、ですので知らなかったいえ、本当に申し訳ない」

そっぴや説明頼んだ、とか言つたな。

「いや、ホントもういいからさ、頭上げて」

「しかし、もう一人の天の御遣殿の戦いを邪魔したのですよ」

そっぴいまた頭を下げる。

「いやいやいやホントもういいから、なんか俺が悪者みたいやん！」

ほんともうカンベンしてこんなに、綺麗な女の子に頭下げられても困る！

ん？ちょいまって

「星いいい！またか！天の御遣って！」

「光が、説明頼むっと、おしゃったではないですか」

「そうやけどさ」

えゝなんだかなゝ

それ言われるのなゝ好きじゃないねん

「お兄ちゃんも天の御遣様だったんだな」

そう言つて駆け寄ってくる小さい子。

てか、も？

「ホントビックリしちゃったゝあ、ごめんなさい私は姓は劉、名は備、字は玄德って言います」

「鈴々は、姓は張、名は飛、字は益徳なのだ」

「私は姓は関、名は羽、字は雲長です」

「俺は、北郷一刀つていいいます、俺も一樣天の御遣やらせてもらつてます」

・・・え？・・・いやいや・・・え？  
マジで！

「うそーーーーん！」

「ええええ、あの劉備関羽張飛！つてお前だれやーーーーー」

俺の発狂に、四人とも吃驚してるし  
いくら女になった三国志でもコレは・・・

「えーと皆気にするな光はたまに、こうなるのでな」

いやー星何気に酷くない・・・

「はあはあはあ・・・取り乱してごめんなさい・・・そして星・・・  
酷くね」

星はフッフと笑うだけ、ニヤロ

「あ、それと俺は、中村光って言うからよろしく、字はないから」

「私は挨拶は先ほど終わらせたので」

どうりで名前知ってたんか

「字が無いんですね、ご主人様と一緒にだ」

「中村さん！」

いきなり北郷君が、俺を呼ぶ

中村さんって言われるとパチンコ思い出すな

「なんや？」

「貴方は、日本人ですよな？」

「せや、日本生まれの関西育ちやで」

「そうですか俺は東京、浅草です、それにしても何で、そんな格好なんですか？」

格好？あ！解除し忘れた。

しかしなんか凄い期待の、まなざししてくんなコイツ・・・

「ん？ああ、ここ来る時に・・・正確には拉致られたかな・・・まあいいやとりあえず、そのときにモンスター狩って来いって言われてな、装備やら何やら渡された」

「だからモンハン装備着てるんですね」

「先ほど趙雲殿に聞きましたが、アレは私たちでは、本当に倒せないんですか？」

今度は、関羽が聞いてきた。

「みたいやね・・・俺の使ってる武器じゃないと殆どが無理みたい」

「そうなのか？」

「それに俺が、今着てる防具じゃないと殆どが潰される」

「ご主人様と、違う天の御遣様なんですね」

劉備ちゃんそれヤメテなんか重たいの凄く

「天の御遣・・・まあそれでもいいか、もう・・・」

「だから出来れば出会ったら、全力で逃げてくれ」

「でも民は、危険な化け物に苦しめられるんですね・・・」

劉備ちゃん・・・はあゝ

「スグには無理やけど、何とか早く全て倒すからさ」

「お願いしますね、光さん」

ものつすごい笑顔で答えてくれた。

グハッ！

劉備もかわいい・・・

ゾクッ！

なんか今殺気が・・・

「中村さん聞きたいんですけど、帰り方とか解らないですよね？」

期待のまなざしの理由それが・・・

「俺はこの世界に来てるモンスターを、倒せば帰れるって言われたけどな北郷君は、違うのか？」

「一刀でいいですよ、俺は、気がついたらココに、居ましたから何も聞いてないです・・・」

それはそれでキツイな。

俺はまだ駄神に、説明受けて来たからな。

「そうかすまん、それに俺も光でいいよ」

そういやコイツ主人公か、駄神がなんか言ってたな。

「え？ご主人様帰っちゃうの？」

「お兄ちゃん嫌なのだ！」

「ご主人様まだ帰られると困ります」

モテモテやな一刀君・・・  
うらやまし過ぎ・・・

「い、いやまだ帰らないよ、ただ帰り方あるか聞いたただけだから」

四人のやり取りを見てると不意に

「光！」

星がいきなり呼んできた

「なに？」

「先ほどの話は、本当か？」

なにが？なんかいったか俺？

「？」

「モンスターを全部倒したら帰ると、言うのはホントか？」

ああ、そういや、星には言ってなかったけ。

「すまん、言っでなかったけ、そういう事になってるけどな」

すると星は

「そうですか・・・」

あれ？それだけ？

「子龍、中村〜！」

公孫賛さん・・・わすれてた。

「終わったのか？」

「ああ「白蓮ちゃん！」うわっ」

なになに？

「桃香！ひっさしぶりだなー！」

キヤツキヤツしだしたよ。

向こうは向こうで

「貴公が、あの美髪公殿でしたか」

「私も常山の昇り竜殿に、会えるとは光栄です」

「おねちゃんも強いのか？」

あれ？ハブられてる・・・

「一刀」

「なんですか？」

「こつ言つ時辛いな・・・」

「そうですね・・・」



男友達って重要。

なんかハブられてるし  
一服しよ。

タバコとライターを取り出し  
一本取り火を点けて吸う。

「ぷは〜〜」

戦いの後の一服、生きてる実感MAX！

「ぷは〜」

「光さんって・・・不良ですか？」

不意に何言ってたんだ一刀よ

「なに言ってるねん」

「いやタバコ吸ってるし…」

ん？コイツは、何を勘違いしてるんや？

「いやいや俺もう二十歳過ぎてるし」

「『ええええええええええ』」

っ！！

なになに今まで会話してた女の子たちが、コッチ見て吃驚してるし。

「光は私達と、同年ぐらいでは、ないのか？」

「え？俺・・・25やで・・・」

「そうなんですか！」

「お兄ちゃん凄く若く見えるのだ！」

「私も同年くらいだと思ってた」

「流石、天の国出身だな！」

「いや天の国でも滅多に、居ないよ・・・」

なんか・・・俺ってそんなに若く見えんの？

この世界の住人じゃない一刀にまで言われてるし。

「んな事いいねん！公孫賛話どうなってん？」

「どうでも良くないけどな、まあ桃香達には、私の所で客将として働いてもらうことになった」

そんな事に、なつとたのね

「光は、どうするのですか？」

どうしよ、なんも考えてなかったわ  
ずっと星にくっ付いて来ただけやしな

「んっぷは」

タバコ吸いながらと考えると

ガシッ

一刀に腕を掴まれた

「なに？」

「あの俺をこんな女の子ばかりの所に、一人にしないで」

ええええ！

「いやいや何言ってるの？俺そっちの気ないで！」

「俺も無いですよ！ホント無理なんですって！俺今までモテたことも無かったし、女の子と喋るのだって」

こ、コイツも切ない青春してたんだな。  
しかし、ホント放して、軽く引くから。

女の子達も、引いてるから！

「わーっ た判った取り合えず公孫釐とこ居るから、放せ！」

そう言つと放してくれた。

「はあゝそういう事なんでよろしく」

「そう言つてくれると助かる、ホント人手足りなくて困つてたんだ  
ほんと苦勞してるなこの子・・・幸薄いなヤツパリ、可愛い顔して  
るねんけど。」

「光さんも、白蓮ちゃん所に来るんですね。じゃあ一時の仲間です  
ね」

すっごいニコニコ顔・・・可愛い

ビクッ！

また、殺氣が・・・

「じゃ私の真名、光さんと趙雲さんにも預けますね」

「桃香さま！」



「よろしく俺は、一刀つてよんでください」

真名って大事じゃなんのか？

まあ本人が、いいならいいけど。

「それじゃ帰りますか」

じゃさっさ城に、帰るか

「待てー！！」

・・・ん？

「私を忘れてないか？」

なんか泣きそうな公孫賛

「何が？」

忘れてるも何もねえ

ちよつと空気だったけど

「私も真名を預けるよ！私は白蓮と言っ」

もしかして混ざりたかったとか・・・？

「いいのか？」

「中村にはあの化け物を、倒してもらった恩義が有るから別に構わない」

「そうかい、じゃ預かった、それと中村じゃなくて光でいい」

なんか嬉しそうにしちゃって

「つか暑い、忘れてた・・・装備解除」

武器も元の形状に戻り、鎧は普段着に変わる。

「ふう」

普段着に変わり一息吐いてたら新入り4人が

「光おにいちちゃんも、お兄ちゃん見たいな服に変わったのだ！」

「ホントだ！光さんも変わった服なんですね」

そうかモンハン装備が、普段着と思ってたのね。

「あいつらと戦って無いときは、コレが普段着やから」

なんか聞きたい事みたいやけど  
正直疲れたので

「白蓮、疲れたから城で休ませて」

「ああ、判ったそれじゃ、みんな私の城にもどるぞ」

とりえず布団で寝れそう。



## 狩り友

「なんじゃー！！ここはー！！」

はい、最初ッから叫んでおります。  
なんかさゝまた真っ白い空間に居た…

「うおゝいなぜだゝ！」

まてまて落ち着け  
確か、白蓮とこ帰ってきてみんなは、まだ話し合いがどっのどっの  
有るって言うてたから  
先にに休ませてもらって。  
久々の布団で寝れるゝって。  
で、寝たはずだが…  
それでここ？

「やあ来たわね」

！？

「お前か駄神よ…何のようじゃ」

まあ叫んでたけど大体こいつのせいって判ってたけどね。

「いやな光君に、サポートでも就けようかと思ったわけ」

まじか！サポート！

正直一人で狩りは辛い

でもなんか胡散臭い

「マジですか？」

「マジじゃマジ」

しかし何故今？

出来れば最初の方が良かった。

「なんでそんな事してくれるン？」

「ん？なんかモンスター全部G級なんでの、光君一人じゃ今後しんどいと思ってサービス」

…なんか無性に帰りたくなった  
クソッ

だったらせめて

「可愛い子がええな」

だって男の子だもん

…キモイ

「ん？凄く可愛いぞ、忠誠心も高く、料理も出来、しかもかなりの強者じゃ」

きた~~~~~~~~可愛く料理も出来て強いとか!!  
願ったり叶ったりや~で

「で肝心なその子は？」

早くお目に掛かりたいもので

「先に送ったから、もう帰っていいよ」

え？するとまた、また足元に穴が…

「この糞ボケエエエエエ！！」

最後に駄神を見たときアイツ笑ってやがった  
こ、殺す

「あああああああ」

ゴンッ！

「イタッ！」

俺はベッド？から落ちて目が覚めた

「つーかこんだけなら、いつも見たいに頭に通信しろッ！」

とりあえず起き上がり周りを見る

もう日が昇ってるわ…

ちゃんと疲れは取れてるみたい

で、サポートちゃんは？

先に、送ったとか言うと思ったハズやねんけど？  
しかしどんな娘なんやろ

オラ、ドキドキが止まらねえ  
一人興奮してると

ゴトツ、ゴトツ!!

ん？

「何コレ？」

なんか小さいタルが、部屋の入り口付近に置いてある。  
しかもなんか揺れてるんですけど…  
やだ怖い。

恐る恐るタルに、触れてみると…

ドツカツ!!                      「ニヤニヤ」!!

イキナリ破裂した！？  
なんか生物が…

え？  
な！ななななななななな

「えええええ！？」

「あなたが、新しいご主人様かニヤ？」

目の前に、猫…いやコレってもしかして。

アイルーか!?

(モンスターハンターシリーズに登場しているネコ型獣人族で、人の言葉を理解することができる)

説明どうも…

「もしかして駄神の言ってたサポートってチミ?」

「駄神じゃ無いニャ、神様ニャ!」

ものすごく愛くるしい表情で喋ってくる。  
め、めっちゃモフモフしたい…

「それじゃ、あなたが中村光さんかニャ?」

「そうやけど…」

「それじゃ今日から僕のご主人様ニャ〜よろしくニャ〜」

…そう言う事が

確かに可愛いな…

人じゃないのかよ!!

まあ確かにアイルーなら心強い。

「イキナリでビックリしたけど、そういう事ならよろしくな!」

「ニャニャ〜 しっかりサポートするニャ〜 それと僕の名前はモ

モニャ」

「モモよろしく」

自己紹介は終わり、色々話を聞くことに。

モモは、元は伝説のハンターのお供で、その辺のアイルーより強く知識もかなり有り料理も出来るってよ。

駄神め確かに、可愛く料理も出来て強い…う、嘘は言っていないけど今度出会ったら絶対殴る。

んでモモは、MH世界で死んだらしい、目が覚めると神が居て、

俺のサポートして来いって言われて、来てくれた見たい。

なんて有りがたい。

それでみんなにモモを、紹介しないとあかんって思い、太守の間に連れて行ったら

星、桃香、愛紗、鈴々、白蓮に

「な、なんと愛くるしい」「キヤー可愛い!!」「言葉を喋るのか!」「モフモフするのだ!」「わ、私にも触らせろ!」などなど

メツチャモフモフされてた

「や、やめてニャ~~~~~!」

とモモ、羨ましくなんて無いんだからね…

一刀は、とりあえず吃驚してたな。

俺にお供アイルーが仲間になっZE

狩り友（後書き）

アイルー出してみたっす。

## ハンターの休息

アイルールのモモを、紹介し終わり。  
仕事をもらうことにした。

客将という形で雇って貰うわけやし。  
何か仕事しないと。

「白蓮く俺何したらいい？」

「ん、それじゃ私の仕事手伝ってくれないか？」

「了解」

「僕も手伝うニヤ」

「モモも手伝ってくれるのか？」

「ニヤ？僕は何でも出来るニヤく任せるニヤ」

そう言い俺とモモは、白蓮に着いて行く  
白蓮の部屋に着き見たものは…

「何この書類の山…」

コレを手伝えと…

「あの…これ？」

「ああ、そつだぞ」



「そう…」

「頑張るニヤ」

まあ金ももらってるし、やるか！

カリカリ…

これでいいのか？

道がどうのこうのって有るけど…

カリカリカリカリ…

ん？

モモよ凄いペースだな

「この案件は、こうすればいいニヤ」

と言い、ものごっついペースで終わらせてるで…

ま、負けてられん

カリカリカリッ

五時間後

「お、おわた~~~~~！」

はあはあ終わったわ！

昼時過ぎてるし

モモに至っては、白蓮のまでやってるし  
ドンだけ有能なんだお供アイルー  
一家に一匹お供アイルー…

「お？終わったのか？」

「ああ、何とかコレどうすればいい？」

「最後に私が見ておくよ、昼過ぎてるけど、昼ご飯でも食べてきな  
よ」

「そうさせてもらっわ、モモ行くぞ」

「ニヤ？僕は別にいいニヤ、それより白蓮さんのお手伝い、もう少ししてるニヤ」

すると白蓮は泣きそうになりながら

「モモ…ありがとう」

って言いながらモフモフしてた

「は、放すニヤ…！」

「じゃ俺は飯いってくるわ」

そついい部屋を出る

なんかニヤ…って声聞こえるけど、気にしない  
頑張れモモ

町に出て外で食うことに、現地の中華食べてみたいし  
町をうろろしてたら

ん？あれって桃香と愛紗か？一刀もいるな  
子供に囲まれてるな

「なにやってるんや？」

少し離れて見物している愛紗に、声を掛けた。

「？…光殿ですか、どうされました？」

「いや、仕事片付いたから昼飯でも食べよーっと思って、っーかッ  
レどっという状況？」

桃香と一刀が、子供に囲まれ遊ばれていた。

「あ！光さ〜ん助けて〜」

「光さん何とかしてください〜！イタッ！？だれだ今足蹴ったヤッ  
〜！」

「よっ！ 大人気やかな桃香に一刀」

とりあえず挨拶

「警邏中だったのですが……子供達に、捕まってしまう」

「で、この状況ね……」

そうだと、頷く愛紗  
しゃくないか

「助けますか……じゃ愛紗も行くぞ！」

すると愛紗は

「私みたいな無骨な者だと子供達が怖がり逃げてしまいます」

「はあ……何いつてんねん」

どこが無骨やねん！まあ……真面目で有るのは認めるけど  
怖いかな？可愛いやろ……

「いや……大丈夫やろ、桃香も一刀見たいに信頼されてるって」

「であればこそです、信頼を裏切るのが……恐ろしいと申しますか……」

そういい俯く

そんな愛紗に俺は

「ほあちゃー」

「イタッ……！」

チョップした

「なにを、するんですか！」

「そんなショーも無いこと言った罰や！やりもせんと裏切るとか訳も判らん事いな！」

「で、ですが…」

「オメーはそんなに簡単に信頼を裏切る事するんか？」

「そ、そんな事はありません！」

はあゝホントメンドクサイ性格ですな…

「じゃ、いいやん遊んだれよ子供らも愛紗と遊んだほうが喜ぶからな」

そついい愛紗の手を握り子供達の所に行く

「えっ？ちよつと光殿！」

「よっしゃー俺らも相手したるぞ、ガキ共！」

すると子供達は

「あ！もう一人の御使い様だ！」

「一緒にあそぼ〜」

「関羽さまもあそぼ〜」

「よし！鬼ごっこすんど！俺が鬼な！そら逃げろ〜」

そこから約2時間位遊び倒したぜ

「はあはあなんで子供ってあんなに元気やねん…」

「はあはあ子供だからだと、思う」

「一刀それ説明になってない」

「ご苦労様ご主人様光さん」

案外元気ですな桃香さん…

「桃香もご苦労様」

「ほんまにお疲れ〜」

「そんな事ないよ〜子供達は将来を担う大切な人材だからね〜大事にしないと」

ホント優しい子やね流石劉備と言ったところか  
それと愛紗はつと、案外疲れてますな。

そんな愛紗に近寄る。

「遊んでよかったやろ？」

「そうですね」

微笑んで答えてくれた

「こうやって子供らと、遊んで笑顔もらったら明日の力になるしな」

「……はい、有難うございます」

頭を下げてきた

「気にすんな、楽に行こうや」

そついい俺は愛紗の頭を撫でた。

失礼かと思ったけど嬉しそうなので、そのまま撫で続けた。

「うふふ、愛紗ちゃん子猫みたい」

「俺もあんな愛紗初めてみるな」

そう言われて恥ずかしいのか  
頭を上げ、撫でるのを拒んだ

「桃香さま！ご主人様まで！！」

なんかワイワイしだしたよ。

・・・腹へった・・・忘れてた飯喰いにいかな！

「まあ用事終わったし飯いくわ」

すると三人は

「スイマセン手間を取らせてしまって」

「あれ光さんご飯まだだったんだ、ごめんなさい巻き込んだじゃって」

あれ？なんかまだ愛紗恥ずかしそう。

「んやゝ、気にすんな、なあこの辺で美味しい飯屋しらん？」

すると一刀が

「あの角曲がった所に、あるお店美味しかったですよ」

「まじか一刀、んじゃそこに行ってくるかな」

「それでは、私達は警邏に戻ります」

「わかった、じゃゝなゝ頑張つて」

「はい、光さんありがとうございました」

そついい警邏に、三人は戻っていった。

俺は、一刀お勧めの飯屋にいきますか。



飯屋に着いた…なんか老舗って感じやな。  
さて入りますか

「いらつしゃい！」

おおなんかいい雰囲気や！  
ギョーザの大 思い出すな  
故郷を思い出してると

「おやゝ光ではありませんか」

星がいた

「星も昼か？遅いけど」

「ええ、先ほどまで兵の調練していたので」

俺は、白蓮に兵はいらんからって言うてあるから事務職です。

「大変そうやな……ん？」

な…なんだアレは…

俺は不思議な物を見た

…アレは…俺の理解を超えていたのだが…  
ありのまま、今見たことを話すぜ！

星はラーメンとチャーハンを食べていたんだが…

ラーメンの方が問題だ…ラーメンの用でそうじゃない…

な…何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何を喰ってるのか判らなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

麺が違うとか、スープの色が違うとか、そんなチャチなもんじゃねえもつと恐ろしい物の片鱗を、味わったぜ…

なんだその大量のメンマは！？

え？それラーメンじゃないやろ！！

もう、それただのメンマやん！もう茶色い塊やで！  
麺どこいてん…

「星何それ？」

俺はそのラーメンマに指を指す。

「ラーメンメンマ大盛りに、メンマチャーハンですよ」

な、何だと…チャーハンにもメンマが、入っているだと…

「コリコリして美味しいですぞ！しかしココのメンマは最高だな」

な、なんて幸せそうな顔してんだ…

そっぴや前に、こんがり肉とメンマ比較してたな…  
そんなに好きなの？

「光も今昼なのか？」

「んん！？そ、そうやけど…」

我ながらかなりドモツた

「？…そうか、なら座ったらどうだ？」

星に相席を進められる。

他の席もチラホラ空いてるのだが  
流石に他の席に座るのは悪いよな  
か、覚悟決めた方がええな、なんとなく

「さ、さて何を頼も…かな…」

すると星が

「ココのメンマは、最高ですよ」

はい、直球できたわ

しかし俺は、女の子には優しい男  
ココで頼まないわけにはいかない。

「ん、そうなん？じゃ～メンマ単品に、チャーハン大盛りに、水餃子で」

へいつ！と親父が答える

そして俺は、気になってしゃーないので聞く

「星メンマ多くない？」っと

地雷踏みました…

星は良くぞ聞いてくれましたと、言わんばかりに力説してくれた。

そう、俺の料理が運ばれて来ても、メンマメンマ…

俺が食べていても、メンマメンマ…

星よ、どれだけ好きか判ったから、もうカンベンしてえええええ！

開放してくれたのは、日が沈んでからだった…

今日一番の収穫は、星の前ではメンマは禁句や。

## ハンター狩場を変える

ココに来て約一月経ち始めた

最近じゃ白蓮の仕事を手伝い、黄巾党どもの討伐も手伝い、桃香達ともより仲良くなってきていた。

そろそろ行動を開始しないといけないとも感じてきていた。

今俺は自分の部屋でモモと今後の事を、話し合っていた。

「この先どうしょ」

そう、俺はモンスターを狩らなきゃあかん…  
いくらこの状況が、居心地よくてもだ。

「そつだニヤ、僕らの使命でもあるニヤ」

「だよな…そろそろココを出るか」

最近町の商人に話を聞くと、化け物を見たと言つ話を、よく聞く事が多くなってきたからだ。

「んじゃ、今日発つか…それじゃ白蓮に説明しに行くか」

「うニヤ」

太守の間に向かう

するとそこには武将全員揃っていた。

「どないしたん？」

モノモノしい雰囲気なのだが聞いてみた

「あ、光さんにモモちゃん、今呼びに行く所だったんですよ」

桃香いわく俺らにも重要そうな話っぽいな

「あ、そうなん？」

「それでどうしたんだニヤ？」

すると白蓮

「光はこの城に朝廷から黄巾党討伐の命令を携えた使者がきたことは知ってるよな？私はもう参戦することを決めているのだが・・・」

…そうなん？知らなかった

そついやこないだ、偉そうな奴ら来てたな…

「私は、これを機に桃香達が独立する好機じゃないかって、話していたんだ」

なるほどな、ちょっと前ぐらいから思ってたけど、白蓮は恐らく、桃香たちの扱いに困ってるっぽいな。

さらに最近、名をあげてきた桃香たちが幕下にいると太守としてはキツイしな。

上が下より劣ってたなら、色々面倒おきそうやしそれが当然…か

名を上げるチャンスなら、それを生かさせて…独立か…無難やな

まあ白蓮の事やし…そこまで意地悪な事考えてないやろーけどな

「んで一刀や桃香は、どないすんの？」

「俺も独立には、賛成だ」

「ここで手柄を立てて偉くなれば、もつとたくさんの人たちを救えると思うの…だから」

考えは決まった見たいやな

「でも、鈴々たちだけで大丈夫かなあ？」

「・・・確かにそうですね。私たちには手勢がありませんし」

俺からしたら鈴々と愛紗が、居るだけでも十分な気がするけど…すると星が

「手勢なら町で集めれば良い、な、伯珪殿」

「ま、まあ…それぐらいなら…」

しぶしぶの白蓮…あんたホントいい子やな、普通自分の町からとかイヤやろ

「有難う白蓮ちゃん」

話もまとまった見たいやし

さて

俺の話もするかな…  
話そうと思ったら一刀が

「なあ光さん…出来れば俺たちと着いてきてくれませんか？」

ん？…一刀よ、まさかの勧誘かいっ…  
しかし俺はやる事が、あるんでな。

「すまん…俺は着いていけないわ」

一刀は残念そうに頷く

「そ、そうですか…」

「おや、やはり光は私と一緒にがよろしいのか？」

フフフって笑ってる所わるいけどね星

「星いゝ悪いけど、俺もここ出るわ…」

「「「「「えっ！？」」「」「」」

みんな吃驚してるわ

星にいったっては、凄い睨んできたし…

「なんでだ光？」

「白蓮には悪いけど俺もそろそろ、本気でモンスター狩りをしない



と駄目みたい」

後はモモが説明してくれた

「そうですか商人からそんな情報が…」

「そういう訳で今日から発つから、今まで有難うな、白蓮、星、みんな」

「急ですね…」

「まあな思い立ったが即行動派やから俺」

そしてこの場合は、解散となり準備のため部屋に戻る  
俺は準備をして、城門に向かうとみんなが見送りの為に、集まってくれた。

一人一人と別れの挨拶をした…

「お前ら頑張れよ」

「はい！がんばります！」

「そちらの手伝いは我々には出来ないが、この世界のため頑張ってくれ！」

「こっちの事は、鈴々達に任せるのだ！」

「おう、まかせろ！」

この三人娘は、ホント可愛いな

ビクッ!!

久々に殺気が

そして一刀にはなんとなくこう伝えた

「避妊はしろよ……」

「ええ！？なんで！別れの挨拶おかしくない？」

白蓮には

「ホントに行くのか？なあ？お前見たいな人材が居なくなるのか……」

つてやたらに引き止められたわ……………モモが……………  
うん…なんか…ねえ…

「白蓮さんは、やれば出来る子ニヤ、僕が居なくても大丈夫ニヤ！」

「モ、モモ……！」

「ニヤ……ヤメルニヤ……！」

モモよそんな事言ったらモフモフされるわ。

最後に星、なんやかんやで、付き合い長いなコイツとは

「星今までありがとな」

「今生の別れでもないのですし、そのような台詞はよしてください」

「ん？まあそうやな、じゃあまたな・・・」

「・・・フツ、そうですね、また・・・着いて来て欲しいですか？」

イキナリ何をおっしゃる。

「いや、星には、星のやる事があるやろ、だから大丈夫や」

「フフフ・・・それでは私は私のなす事を頑張ります・・・」

そっくい握手をする。

するとイキナリ耳元で

「次合うとき更にいい男になってたら・・・フフフ」

なんか怖い事言われたんやけど...

と、とりあえず俺とモモは狩りの旅に出たのだった

そっくいや町を出るときに軽いイベントが発生したわ

歩いていたら声を掛けられた

「しゅ、しゅみましえん！あう噛んじやった・・・」

ん？声がすつけど何処？

「ご主人下ニヤ・・・」

ん？下？

ペレー帽の女の子と、とんがり帽子女の子が吃驚した面持ちで立ち尽くしていた。

このサイズじゃ…モモじゃないと気がつかんわ。

「・・・猫が・・・喋った・・・」

まあその世界の人間じゃ…二足歩行の喋る猫見たら

「はわーーーーー！！」

「あわあわあわあわ」

こうなるわな・・・

「おいおい取り合えず落ち着きな」

とりあえず落ち着かせる俺。

「はわ・・・は、はいでしゅ・・・」

「あわあわ・・・しゅいません・・・」

「・・・二人ともカミカミすぎニヤ」

それを言つてやるなモモ…

「まあコイツは・・・」…なんて説明したらええねん

「ひ、東の…凄く…東の海を渡った島に生息する生物で、見るの初めてと思うけど害は、無いから」

スゲー適当な嘘やな、我ながら

「そうなんですか・・・」

あわせろモモ・・・

「ニヤ・・・そ、そうニヤ、よろしくニヤ!」

「あう・・・かわいい・・・」

「ひ、雛里ちゃん!?!しっかりして!」

モモの営業スマイルにやられたな。

「そんな事より、どうしたん?」

「あ、あのこの幽州にですね、天の御遣いが来ているって噂を聞いたんです!」

ギクッ!!

「そ、それで?」

「そのこの幽州に本当にいるのかをですね」

「聞きたかったのです・・・」

「おるにはおるで」一刀が・・・

「ほんとうですか？」

「本当ニヤ、でも何しに会いに来たニヤ？」

「それは私達を、仲間に入れてもらおうかと・・・」

「こんな小さいのに？」

「まあ鈴々しかりこの世界の女の子は、強い見たいやしな」

「今なら義勇軍の募集してるから、城に行ったらいいんちゃうかな」

「わ、判りましたお城に行ってみましゅ・・・」

「ありがとうございましゅ・・・」

「そっついパタパタと城に向かって行った。」

「最後までカミカミやな・・・」

「さて俺らも行くか」

「ニヤッ！」

「さて何処に向かうかな。」

## ハンター狩場を変える（後書き）

うわゝゝなんかグダグダしてるゝゝゝ

次 魏か呉どっちにしようあえて 董卓 にするかな・・・  
あゝモンスター何しよゝ

とりあえず文才の無い私のを、読んでいただいて本当に有難うございます。

## ハンター海を目指して

星達と別れて約一月くらいか？

…聞くなつて？

うん…正直俺もわからん…エヘッ！

一様商人達に、モンスター情報集めてるんだが、なんか海に出るらしい。

海に出るって…ガノトトスか？まさかラギアクルスじゃないよな…  
駄神、2Gとだけは言っていないから3（トライ）からも来てたりして…

ま、まあ揚州？だったか…

忘れたが…海に出るらしいので、海を目指している。

馬が乗れると、ちょっと楽なのだが乗れないので、時間が掛かるのがネックやわ。

食料などは肉は大量に、あるのだが流石に肉ばかり食ってたら嫌なので

村なんかで食料を賊退治する代わりに、調達などして繋いでた訳。

それと村の中では、モモには猫になりきって貰ってます。

まあ俺の肩に乗ってるだけだが、喋ったり二足歩行は見られると色々大変って前に分かったから。

あッ！それと最近じゃ、俺の噂が立ってるみたい…

（大剣を持つ天の御遣）や（猫を連れた英雄）や（化け物を狩る物）  
などなど…

まあいいのだが最後ヤツは、何故じゃ？俺まだ三回しか狩ってない



で…恐るべし商人の情報網！

あと結構モモが、容赦ないって事が判明した…賊に…

前に一つの村が襲われてて、俺達は賊を倒す為に戦ったんだが

モモのヤツ賊が泣こうが命乞いしようが、斬り伏せてたで。

俺でも命乞いするヤツ斬る時は、躊躇するんだが…

モモは

「お前らはその台詞を何回聞いてきた！」

と言い斬ってた…

気持ちは分かるんだが…モモがやるとちよつと色々怖い。

あの時俺は思ってたで…語尾のニヤは？…

多分モモは、キレるとニヤ…って言わない事が分かった

そんなこんなで村に着いたんだが

「なあモモ」

「何ニヤ？」

「あれって…」

「襲われてるニヤ」

黄色いゴミが居た…

しかし、襲われてるだけじゃないな

応戦してるな、ん？御旗…か孫って書いてるって事は

誰やったけ…？

言ってる場合じゃねー！

「俺らも行くぞ！」

「ニヤ！」

既に村の中じゃ、どえらい事に  
クソッ！

俺はバスターを抜く

モモは背中のだスランピッケルを抜く

孫の軍勢は、俺らの反対側だから黄巾党は、俺らに気がついてない  
まあ後ろから、仕掛けたわけで…

「後ろがガラ空きじゃ！」

流石大剣振り回すだけで五人は、天寿を全うしてやった  
モモはこう見えなくても分かるが…スゲー速いのよ  
一瞬で、八人仕留めてやがったぜ…

「ざま〜ニヤ！」

黄巾の奴らが気づいたか

「おらっ行くぞ！塵度もが！」

さて覚悟しろ！

SIDE↳孫策↳

巴が黄巾党に、襲われてると聞いて隊を率いて来たのだが、酷いものだった。

私の呉の民を、傷つけた責任は取ってもらわよ。

戦いが始まり、少し経った時黄巾党の奴らが乱れだした。

あれ？なんか面白い事が起こる気がする

理由？勘よカン〜

すると私の仲間の祭が

「はあはあ、策殿！勝手に一人で行かないで、もらいたいんじやが…」

あはは…またいつもの癖で、突っ走っちゃった〜

「祭ごめーんでも私がこんな黄巾党に、やられるわけ無いじゃない」

しかし敵の後ろがざわめいているけど、ホント何かしら？

「何か様子がおかしいのう」

やっぱり祭も、気がついたみたいね〜  
すると祭は

「なにかあそこに、暴れてるやつがおるぞ！」

目の前の敵を斬りながら、祭の言われた方に目をやる。  
私は目を奪われた。

大きな剣を振り回し敵を殲滅している姿に…

S I D E ｝ E N D ｝

## お供アイルー モモ 紹介

モモ

性別： 男

年齢：不明

LV：20

なつき度：5

毛並み：茶トラ

性格（戦闘時）：勇敢で慎重

性格（生活時）：面倒見が良く、優しい

見た目：とりあえず可愛い

武器：ドスランピックル

角笛の術      オトモアイルーがモンスターから狙われやすくなる

鬼人笛の術      攻撃力を一時的に上げる

硬化笛の術      防御力を一時的に上げる

解毒笛の術      毒状態のとき、毒状態を直す

真・回復笛の術      体力を大きく回復させる      回復量

は回復薬よりやや多い

モンスターハンターシリーズに登場しているネコ型獣人族で、人の言葉を理解することができる

元は伝説のハンターのお供、そのせいで大分強い

料理が得意で書類仕事も得意、伝説のハンターに出会う前は、ハンターギルドで事務みたいな事を、やってたかららしい。

実はMH世界で死んだのだが、駄神によって黄泉がえらされて、光の手伝いをしてくれと頼まれるが「わかったニヤ」の一言で了承した。

人を殺さないといけないとも言われてるが、そこは大丈夫らしい。

## 守るため

「おっしゃーコレで最後！」

最後の一人の首を飛ばす

ふう終わった〜

うわっ…服がますます血だらけに…

ミリタリージャンパーはカーキ色やからマシちゃマシやけど…

洗濯せなあかな〜

と考えてるとモモが

「ご主人誰か来たから肩に、乗せるニヤ」

そう言うつと肩に乗り猫になりきる

「あなた誰？」

目の前にスゲーセクシィーな女性がいた……まあ剣を突きつけてね…

「ただの旅人や、あと村が襲われてたから、後ろから加勢しただけ  
っすよ…」

そう言うつと剣を収めてくれた

「ごめんなさいね、形だけでも聞く必要があつたから」

まあいくら賊を倒してたって言っても、怪しいわな

「いや、気にすんな！」

「そう言ってもらえると助かるわ」

「策殿ー！また勝手に、まったくお主は…ん？だれじゃその小僧？」

また、凄く美人さんが現れたでしかかなり爆乳ですね…この子もやけど

つか！？小僧って…

まあこの世界じゃ、若く見えるみたいやけど。

「この子が、さっき暴れ回ってた子よ」

「ふむ、こやつがか？」

「暴れ回ってた訳じゃ無いけど…賊を潰すのにちょっと手伝っただけや」

「そうか、すまん」

「いや、気にすんな！」

今日二回目ですこの台詞

さていつまでも構ってられんし行くか。

「悪いけど俺、急ぐんで」

さっさ海に出て狩りを、しないといけないのさ

俺は先に行こうとしたんだが

セクシーな子が、俺の手を掴み

「ちょっと、待ちなさい」



捕まっただぜ！

「なに？」

「もしかして、近隣の村で賊退治をしていたのは貴方？」

え・・・なんか嫌な予感・・・

「さ、さあゝ俺じゃないよゝ」

「うそじゃな……」

「嘘ね……」

えー即バレかい  
しかし諦めない

「なんで俺なんだ？」

「だって最近商人に、聞いたんだけど（大剣を持つ天の御遣）や（猫を連れた英雄）や（化け物を狩る物）って呼ばれる、旅人が賊退治してるってね」

「まあなんじゃ、お主の背中の武器、大剣じゃ、それに……」

「……肩に猫が、乗っていたら説得力無いわよ」

肩に乗ってるモモを指す二人

「ニャゝ」

あゝ納得…

ニヤゝって納得したみたいに、泣くなモモよ…  
ふうゝ

「はあゝあぁ、多分それ俺だよ…しかしそれが何よ」

ニコツと笑みでセクシーガールが

「別にコレって事は、無いんだけどね、お礼よ！お礼！お礼をさせて」

「いや別にいいよ、俺急いでるし」

すると今度は

「王の誘いを断るか…小僧」

ん？王？why？誰が？

「あら？ごめんなさい紹介まだだったわね」

「私は孫策、字は伯符よ」

マジかゝ来たよもう一人の王さま  
孫さん来ましたゝ

「で、貴方は？」

「あ、ああ俺は、姓は中村、名は光、それで字はないよ」

フッフ流石の俺も名乗り方分かってきたぜ！

「へへ珍しい名前ね」

「変わつとるの、それと儂は黄蓋、字は公覆と言う。以後見知りおけ」

なんだよもへ何処が黄蓋なんだよ  
かなりのベツピンさんだがやへへ！

「そういう事で、私についてきなさい」

シレつと言いなさつたよ孫さん

「何故そうなる？」

「だからお礼よ、お・れ・い」

「いやいやいや理由おかしいって！」

「あら、本当に急ぎ旅？なにかあるのかしら？」

別に急いでは無いけど、ゆっくりもしてもらえんのよね。

はあへ軽く理由言わないと開放してくれんなへコレ……

「俺は、モン……じゃね、化け物を探して狩らなあかんから、誘って  
もらって悪いけど」

すると黄蓋さん

「ならちようどいい、着いて来い！」

なあまさか…ねえ」

「ねえ…もしかして化け物出るとか？」

「ええ…出るわ…でも、倒せないわよ…」

孫策が、沈んだ顔をする

「じゃな、あんな化け物見た事も無い、剣も槍も効かんのじゃぞ…」

なるほどじゃ、行かない訳は無い…

なんかコレ前にも見たようなデジャブ？

まあいいや。

「それ俺なら倒せるで、つーか倒すけどな！」

「で、出来わけないじゃない、あなた死ぬわよ！」

孫策さんそんな怒って言わないで、怖いっす。

まあ心配されるのは、いいけど言ってる場合じゃね！

「俺の通り名三つ目な〜んだ？」

さて問題やで、まあ正直こんな言つのハズイねんけど

「……化け物を狩る物……ッ!？」

「正解、まあそういう訳やから案内よろしく」

まあそれで納得されたのも疑問やけど  
そう言つて荊州つて所に帰るから着いてきてつてさ。

ああ、荊州？つて思つて聞いたんやけど  
揚州じゃ無いのつてね…  
全然俺、内陸歩いてたみたい  
揚州つてかなり離れてるつてさ

ハハハ

結果オーライ・・・か？次の予定が立つたわ・・・  
それにモンスターどんなの？つて聞いたら

「ん？そうじゃの、目が無く大きな口での、体中に雷を発生さとする」

はい！

フルフルやね。

頑張るか…

あとモモを紹介しないとあかな。



## 守るため（後書き）

これ、恋姫って言うより・・・完全にモンハンですね。

が、頑張ります！

荊州に走る稲妻（前書き）

今回ガッツリモンハンです。

フルフル戦です。

どうぞ！



## 荊州に走る稲妻

「と、言う事やわ・・・」

俺は孫策さんの所に、向かう道中軽く、ホント軽く説明した。

あと馬は乗れないので孫策さんと、タンデムしてます・・・しかしこの子も、腰細ッ~~~~

しかも、いい匂いだー~~~~~！&可愛い！！！！！！！！

つと心の中で発狂してたら、なんかまた強い殺気を感じました、ホント何やコレ？？

S I D E ~ 星 ~

なにか今凄い嫌な感じがしたのだが・・・気のせいでしょうな・・・

S I D E ~ E N D ~

「光があのかけ物、もんすた〜？を退治するのが、天の御遣としての天命でいいのね？」

そうやで、孫策さん。

正直、天の御遣って使いたく無いのだが、ココじゃコレ混ぜて説明したほうが、よく伝わるわけで・・・

しかしメツチャ聞いてくるから・・・モモの紹介のタイミングがあ〜

（「ご主人…僕はいつまでこうしてたらいいニヤ・・・」）

モモが皆に聞こえないように訴える。  
モモは、相変わらず俺の肩にいます。

（「す、すまんもう少しまってや…」）

あと、呉の事も教えてくれた  
孫策さんの前の王様？お母さん？が、やられて国奪われたらしい、  
んでいつか独立する為に  
袁術って所の客将嫌々だがやってるんだってさ。  
そんな話をしていると…

おっ！違和感が・・・  
久しぶり…この感じ・・・  
するとモモが

（「ご主人・・・モンスターが、この先に居るニヤ」）  
（「ああ、俺も気がついたわ」）

多分聞こえてはいないだろうが…  
傍から見たら猫と喋ってる人やもんな

そげん事は、今はいい。  
さてさて皆さんには、離れてもらいますか！

「孫策さんッ！止まって！」

どうしたの？と、答え馬の歩を止める

「おるよ、この先！」

「なんじゃと！？それはまことか！」

後ろから着いた来てた黄蓋さんが、驚愕した表情で聞いてくる。  
あれ？言わなかったけ？

「ああ、おるで、俺には分かんねん」

「だから孫策さん達は、ここで待つつて！」

するとモモが…

「……ッ！やばいニヤ！ご主人！早く行かないと逃げそうニヤ！  
！……あ！ニヤ……」

「！？」

フフフ、モモよ………やっちまったなッ！！

「猫が喋った！！」

しかしそんな事説明してる場合じゃね！  
逃げられたら面倒だ。

「孫策さん！こいつの事は、後で紹介するから！」

そついい俺等は、モンスターの場所まで走った。

「ギエエエエエエ！！」 バチバチッ

「居たニヤ！」

・ ・ ・ ・ 居たな、しかし ・ ・ ・  
ツキモ ー ー ー ー ー イ! ?

何アレ、ゲームでも気持ち悪いけど、生はもつとキモイもの。凄い泣き声、放電、あの口、でも確かにフルフルやな。

右目を閉じ「装備選択！」

雷に強い装備はつと…

バルサsかレウスsか、よしレウスにしよ。  
 やっぱりカツコエエもん。

弱点は火やつたな！

武器は、  
双剣

コウリュウノツガイ！！

モモも装備変わってら。

あれ確かあれ、ネコ武者鎧やったかな？

「それじゃあ、ご主人！」

「おう！行くで！！」

フルフルには目が無い、こちらには気づいてない  
今が、チャ～ンス

俺は左横から、モモは右から攻撃を仕掛けた

「うらあああああ」

「ニヤアアアア」

怒涛のラツシュ……のハズだった

フルフルの尻尾が、吸盤の様に広がり地面に吸い付いた

「ニヤ！？ご主人離れるニヤ！」モモは、バックステップで、距離を取ったが

俺は？………うん！無理でした。

「ギエエエエエエ！！」 バチバチバチツ

フルフル放電！

「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

電撃喰らった！尋常じゃないダメージを受けた！

死ぬかと思った！少しチビッタ！

「ご主人！」

モモが笛を、ポーチから取り出し吹く！

（真・回復笛の術）

ん？気持ちのいい音色が聞こえて来たわ。

うおおお、き、気持ちいいいいいい

全回復したわ！

「ご主人避けるニヤ！」

モモからのいきなりの、怒号！

「やばっ！」

フルフルの電撃プレス！避けようと思ったら・・・バインドボイス

【大】

「グギエエエエエ！！」

耳がヤバイ！むしろ痛い！

動けない！マズイ！

「シマツt・・・ぎゃあああああ！！」

電撃プレス直撃・・・

ヤバイヤバイ

かるうじて踏みとどまり、そのままフルフルを見据える  
ジャンププレスしてきた・・・

「・・・ヘッ？こ、これって何てハメ技・・・」

俺は体が痺れて動けなかった。

SIDE↳孫策↳

光の猫が喋った・・・

光は後で、説明すると言って行ってしまった。

あと待っててとか、こんな楽しそうなのに、見ない訳がいかないわ。そうと決まれば

「祭！私見にいつてくるわね、兵達よろしく」

そっいい光の、後を追う。

「ま、まで雪蓮危険じゃ！・・・ええい、全く。人の言っ事を聞かんお人じゃ！お前たちは、ココから動くなよ！」

「ギエエエエエエエエ！！」

あの叫び声・・・居る、間違いないあいつだわ。

私は光達に、追いついた。  
距離を取る、戦いの邪魔にならないように。

光を見て、私は目を疑った

「・・・なにあの鎧、そして剣」

あの装備は、見た事無い  
しかも光が、なにか喋ったと思ったら、いつの間にか赤い鎧を着ていた。

「天の御遣と言っのは変わった能力じゃな・・・」

私の隣にいつの間にか、祭が来ていた。

「あら？祭も来てたの？」

「全く策殿は、困ったものじゃ・・・」

「あはは、ごめんなさいでも、天の御遣の力見て見たいじゃない」

「まあ儂も、そうだがのう」

そんな話をしていると戦いは始まった。

「あれ・・・光押されてない？」

S I D E ｝ E N D ｝

俺はモモに弾き飛ばされて何とか無事だった

「すまんモモ！」

「気にしないでいいニヤ」

ホントに助かった、あんなのに上から乗っかられたら絶対無事じゃねえ。

「しかしクソッ！あの放電じゃ近づけんやんけッ！」



「ご主人ガンナー武器は無いのかニヤ？」

「あるちゃーあるが、媒介にする弓がねえ・・・うわっ！」

電撃プレスが飛んでくる

緊急回避！

「今の危ない！」

回避した正面に、目をやると、孫策さん黄蓋さんが居た。

「うつそーん、なんで居るんねーン！」

ん？黄蓋さん弓もってね？

黄蓋ってそーいや弓の名手か！！

この世界でもそーうなのか！  
なら・・・

「モモッ！！」

「何ニヤ？」

「あそこに弓持った黄蓋さんが、おるから借りてくる！！だからちよつとの間任せた！」

「分かったニヤ！でも早くしてニヤ！」

双剣を抜刀し、黄蓋さんの所に

走る・走る・走る・走る・・・着いたあああ！！

「黄蓋さん！！！」

「光どうしたの？戦いの途中よ！あの猫じゃヤバそうよ」

「つーか何でいるのッ！？そ、そんな事今どうでも言いねんッ！黄蓋さん！」

俺は黄蓋さんに、詰め寄る。

「な、なんじゃ？」

「その弓と矢、貸して！」

「多幻双弓をか？別にかまわんが、効かんぞ」

「別にいいから貸してッ！」

ほらつと黄蓋さんから多幻双弓と矢を、借りる。

右目閉じ「装備選択！」

火の弓火の弓

コレに決めた！！

青鳥幣弓？！

弓の形状が変わる

黄蓋さん驚愕の表情

「わ、儂の弓が・・・」

「それじゃ借ります」

フルフルの射程に近づき弓を構える  
人生初弓や！俺。

「モモ離れる！」

モモが、離れたの確認し、限界までパワーを込めた弓矢を放つ  
矢が、フルフルを貫いた！

「ギョアアアッアア！」

「おしゃッ！！効いてる！」

オラオラオラオラオラオラー！！ッ！！

強いぞ！弓！

安全な場所から怒涛のラッシュ！

ちよくちよくジャンププレスや電撃プレス、等してくるが、一定の  
距離を取るのに怖くないわ！ボケハゲカス！！

まさに狩り！これぞ狩り！

「ハハハ、フルフルが、ゴミのようだ！」

しかしココで、ちょっと問題が二つ・・・  
孫策さんが応援してくれてたのだが

「やつちやえゝ光ゝゝゝ！」みたいな

女の子って声高いよね・・・

フルフルって目が見えないの、耳で方向決めてるみたいなのだから・・・

孫策さん、タゲを取ったみたい

んで二つ目・・・うん矢が無くなった・・・orz  
ゲーム見たいに無限じゃなかった・・・

あ、やべ・・・

## 荊州に走る稲妻（後書き）

モンハン武器紹介

双剣    コウリユウノツガイ：攻撃力350    火    400

弓    青鳥幣弓？    攻撃力276    火    200

作者は、明命と亞莎が好きなのだがまだまだ会えなさそうです。  
あと魏と董卓軍どうやって会おう・・・

とりあえず次回よろしくです。

狩人と帯電飛竜（前書き）

フルフル戦最後です。

でわどつぞ。

## 狩人と帯電飛竜

あ、やべ・・・

フルフルが、孫策さんに振り向き、走り出す！

フルフルって走れたの？

って言ってる場合じゃねー！！！！

持ってる弓を投げ捨て、孫策さんの下に走る俺。

「逃げるッ！！！」

そう言い放つ！

逃げようとする二人

すると孫策さん・・・コケたよ・・・

「ちよつ、えええええッ！！！」

マジでかッ！！

ここでコケるとか、ベタ過ぎるだろオオオオ！！

そんな展開少年誌だけにしろ！！

ヤバイ、肺が痛い！！横腹が痛い！！スタミナが、ヤバイ！！フルフル思ったより速い！！挫けそう！！頑張れ俺！！！！

フルフルが、一瞬動きを止める。

その間に、フルフルを抜き孫策さんのもとに、たどり着く。

なんや？ジャンププレスか？

バチツバチツ

え？

チゲエーアレは・・・放電しながらのジャンププレスや！！

「早く逃げるッ！」

孫策さんに慌てて言い放つが…

「う、ごめんなさい、足をやっちゃった」

ゲエエエ！？ナニヤッテンノ・・・

「私の事はいいから、逃げて！」

よくない！守るって決めたんや！

でも俺が担いで運んでも間に合わない。

「雪蓮！儂に？まるんじゃ！！」

黄蓋さんが、孫策さんを連れて行くこうとする間に合わない。

ヤバッ！！フルフル飛んできたああああ



絶対に間に合わん。

「クソツタレ！」

武器ッ 武器ッ

・・・あああやバイこのままじゃ、後ろの二人も巻き込まれる！  
何がいい？大剣、太刀、双剣、ハンマー・・・あああああ

「ご主人！！ガンランスニヤー！！」

そうか！忘れてた！！

右目を閉じ、刀を抜刀し「装備選択！」  
もう目と鼻の先・・・間に合え

「ガンランス 真・黒龍銃槍！！」

放電しながら空を滑空して突っ込んできたフルフルとぶつかる。  
だが・・・

ガンッ！！

「ハハハハ！鉄壁の盾なめんなよ・・・」

右手の大きな盾でフルフルの体当たりを、止める！

「雷も通さんぞ！ハゲボケカスー！！」

「今のうちに逃げろ！」

逃げる二人

しかしフルフルは首伸ばし、二人に噛みつくようとするが

「させるか！」

左手のガンランスの砲撃を首に撃つ！

ドンッ！

「ギョアアアッアア！」

そのまま槍の部分で足を突きまくる。

「オラオラオラオラッ！！」

フルフルが横倒しになった。

「ご主人もう弱ってるニヤ！とどめニヤ！」

簡単に言うね、モモよ。

これメチャメチャ重いねんぞ!!

でも今がチャンス。

しかと見よ!

ガンランス最大の奥義!

俺はトリガーを力一杯引く。

「喰らいやがれ!!!」

ガンの先からバーナーみたいな炎を噴出させる。  
フルフルに放たれた最強の一撃

りゅうげきほう  
竜撃砲

ドッガアーーーーーッ!!!

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

耳が割れんばかりの咆哮上げフルフルは、力なく倒れこんだ。

シューー

ガンランスから煙が上がる

熱いそして痛い・・・

「・・・どんな威力やねん腕もげるかと思った」

止めを刺した事を、確認したモモが近づいてきた。  
あれ…意識が・・・

「ご主人ご苦労様ニヤ！！」

「・・・」

ドサッ

「ご主人ッ!!」「ひ、光!!」

ココから記憶がねえー

でもフルフル狩ったぞー——————!!

「・・・寝とるのう」

「グウゝグウゝ」

「ホントだニヤ」

「ホントね、かわいい寝顔しちゃって」

「損傷受けすぎじゃな、コレは」

「とりあえず城に、運びましょ。そこの猫ちゃんも一緒に来てね」

「わかったニヤ」

SIDEゝ神ゝ

「フムフム結構手こずったのう」

「全く面白いのう光君よ、次はどう倒すか見ものじゃな・・・」

こんな事光君の前で言ったらシバキ回されそうじゃな

「そろそろモンスターもキツなってきたそうじゃな、あと何匹やったけ？ティガにラオシャンロンに火龍に・・・まあエエかのう」

・・・可哀想になって来た、新たな防具送るかの

最初から送れとか言われそうなの・・・だってワシのミスでも楽しみたいし。

「・・・そろそろXシリーズとZシリーズ送ってやるか、でも見せ場で送るのが、楽しそうじゃ、フフフ」

「でも恋姫達と、仲良くするの羨ましい・・・送るのやめっかな」

## 狩人と帯電飛竜（後書き）

武器紹介

ガンランス 真・黒龍銃槍：攻撃力621 龍380 砲撃 拡散4

作るのが大変だけに強いです。

次回は恋姫メイン・・・のハズです。  
でわまた

## ハンター酔っ払う

おはようございます。

気がついたらなんかベットで、寝てました。

???

えーっとフルフル倒してモモが、近づいてきて……

あッ！そっから気絶したんや。

しかし体に包帯みたいなモンが、巻いてるな……。治療跡かこれ？  
体も痛いな。モモ、真・回復笛の術使ってくれなかったのか？

しかも服も変わってるし。

だ、誰が着替えさせたんだ！

「しかし邪魔やな包帯」

ショルダーバッグは、どこだ？

あったあった机の上に発見！ 武器なども一緒にあるわ。

左目閉じ「アイテム選択」回復薬G選ぶ。

バックから回復薬Gを取り出し飲む

ゴクゴク シャキン！！

傷も消え全回復だぜ！

……包帯取る。

服を着替え部屋を出る。

「モモは、何処行った？腹も減ったな」



とりあえずウロウロする。

広い

何処に向かっているんだ俺は。

ひたすら歩いてると、なんか大きな扉が、見えてきた。

「入ってみるか・・・」

ノックして扉を開ける。

コンコン 「失礼しますよつと」

俺に視線が沢山刺さる。

武将さん達か？黄蓋さんも居るし。  
すると俺を呼ぶ声が。

「ご主人！！」

モモか？

近づいてくるモモ

「もう大丈夫ニヤ？」

「おう！全快や！」

「なあ？コレはどういう状態？」

「僕達の事を、説明してたニヤ」

「マジ・・・？」

「でも、神様とかの事は、言っていないニヤ」

ほっそれならいいや。

ひゃあ！

イキナリ右手に絡みついてくる孫策さん

「光起きたのね？大丈夫なのもう起きても？」

「お、おう全快やわ、てか離れて孫策さん」

「良いじゃない」それと私の事は、雪蓮つてよんでね」

「良くない良くない……！？良いの？」

「いいわよ、だってあの化け物を、倒してくれたんだもん」

「そう言うなら……雪蓮離れて」

なんかメツチャ見られてるから……

「貴方が、あの化け物を倒してくれたのだな。ああ失礼私は、周公瑾、冥琳で構わない」

眼鏡をかけたクールそうなおねーさんが自己紹介してくれた。

胸がスゲー

ハッ！

駄目だ落ち着け、中村光ココは俺の第一印象にかかわる。  
冷静に冷静に。

胸は見るな目を見る！！

「いえいえ別にいいですよ。それと俺、中村光って言うからよろしく」

よし、完璧だ！

実は内心ドキドキ

「わたしは〜陸遜です〜穏と呼んで下さいね〜」

グハッ！！

なんだココはー！！発育良すぎだろ！！

落ち着け落ち着け！！！！

目、目を見る！！

つてか！雪蓮離れる！！胸が当ってんだよ〜〜！！

「よろしくな〜」

「儂も真名を預ける、祭だ。よろしく頼むぞ若いの！」

「どうも〜よろしく〜」

もう諦めた・・・

「さて、これで自己紹介も済んだわね」

自己紹介終わりました。

あと俺の情報収集で、集まってるのって聞いたら

別の事でも集まってたみたい。

なんか袁術の命令で、

黄巾党いいかげに調子のんなよ、シバキ回すぞコラッ！

て事で完全討伐しに行く為に集まってたみたい・・・

んで現場で、更に他の武将さんと合流するって

「光達はどうする?」

「んゝ行っても良いけど…」

「ホント!」

嬉しそうですね雪蓮

「そうだ光殿に、いい情報をやろつ、貴方にとっては役に立つはずよ」

冥琳さんが情報くれたわ  
なんか各自の斥候の、情報みたいなんだが

洛陽に、凄くデカイトカゲ

曹操の所に、火を吐く龍

南蛮に、風を纏う龍

蜀に、毒を撒き散らす大きな鳥

揚州には、雷を纏う水龍

今言った場所には、たまに現れて暴れて帰るらしい。

コレは、商人情報。

ランドムに現れるらしい。

旅人を襲う暴れ龍

平原に現れる角を生やした化け物

空から降ってくる金色の大猿

めっちゃめっちゃ出てるやん。

最後に麒麟様が出ただって・・・

神様が暴れてるってさ、中国じゃ神様だったっけ?

あと揚州確實ラギアやんけーーーー！！！！

Triから来ちゃってる。

とりまこんなの、聞いたらねえ

「雪蓮ごめん、こんな情報聞いたら一緒に行けない」

「ごめんなさいニヤ」

残念がる雪蓮

「そうよね・・・」

今度はふつと笑い

「それじゃ、光達にお礼を込めた酒宴よ〜」

この宴会が、後悔するわけでした・・・

中庭で酒宴・・・宴会やな・・・が行われた

飲めや騒げの兵も混じっての大宴会！

ドンだけ飲むんだよ・・・みんな

向こうでモモと冥琳と穂が、難しい話しながら飲んでるし・・・

俺の相手は、雪蓮と祭さん

メチャ飲むんねんこの人ら・・・

「どうじゃ、美味しいじゃろ」

白酒美味しいのだが、キツイ

それを、どんどん注いでくる祭さん

ゴクゴク　プハッー

「フッフ、いい飲みっぷりね」

そういい自分の盃の中身を飲み干す。

「・・・ね、光。あなたの国にもお酒はあるの？」  
「そりゃーあるよ」

突然な質問

「へーどんなの？」  
「それは儂も気になるのう」

二人は興味津々な表情で身を乗り出す。

ドンだけ酒好きやねん！

「近い近い」

「ね、早く天の国には、どんなのがあるの？こっちに似てるの？種類は？」

「いろいろ有るで、日本酒　焼酎　ワイン　カクテル　ビール・・・かなりあるな」

「にほんしゅ？しょうちゅう？？」

「なんか種類が、多いのう」

「ん？軽く説明しようか、まず日本酒、俺の国の酒やね、米を発酵させて作る醸造酒ってとこかな、んで焼酎は、麦など米を原料として、蒸留して造るのが焼酎。日本酒よりキツイで。簡潔に説明して

るけど、ちゃんと説明するとややこしいから、他は果物を使って作るお酒やね」

そんなマニアック事は、実はしらんよ

俺は飲むのが専門

「へー米や麦や果物で作るお酒ね。ジュル……ね、どうやって作るの？」

「……知らん」

知るわけが無い、日本酒は作ってる所、見学はしたこと有るけど。

「なんじゃ、つまらん」

「えー折角城で、作って飲みたかったのにーつまんないー！」

飲みたいんやね。

「飲みたい？」

「「え!？」」

ハモるなよ……

「あるのか？」

「あるよ」

しゃーねー出すか

左目閉じて「アイテム選択」

ショルダーバッグから秘蔵の日本酒を出す。

「これやわ」

二人の眼つきが、変わったで。  
俺は二人の盃に注ぐ

「……おいしい」「……うまい！」

そら結構な事で

そこからが大変でした。

もつと無いのかと、せがまれ

日本酒、焼酎、ビールにワインetc

うん、コレだけチャンポンしたらねえ

俺いつの間にか、落ちてた……

もちろん次の日、二日酔い。出発は次の日にしようかな。

「頭いてえーーーー！！！」



## ハンター酔っ払う（後書き）

ぎゃーーーーー25話で、まだ黄巾の乱すら、終わってない。  
多分淒く、ゆっくり進むと思います・・・モンスター調子乗って前  
フリしすぎたかも・・・・・・・・・・

## 海竜

あの大宴会の次の日、二日酔いでした・・・

ハハハ、次の日出発しよって案出したら。

モモに、却下されました。

そこからハンターの心得はって、永遠説教1時間くらいまして・・・  
お供に、説教って・・・

んで頭痛いけど、揚州に向けて旅立ちました。

最後に、雪蓮からまだ、黄巾党討伐のため、準備まだ掛かるから妹  
によるしくって手紙預かった。

とりあえずモモに渡しときました、なんか失くしそうなので。

雪蓮と祭さんに、日本酒の一升瓶10本要求されたのは、別の話。

大分進んでもうスグ揚州って所で、事件発生！

「お腹痛い・・・」

「・・・ニヤゝもうスグ着くニヤ、我慢するニヤ！」

「ホントマジ無理・・・出るから出るッ！！」

（物を食べている人ごめんなさい）

「ちよつと行って来るからー！まっとなつて！」

「にゃゝ分かったニヤ、早く言ってくるニヤ！」

森に入りちようどいい茂みで、用を足す・・・

何がいけなかった、もしや朝食ったこんがり肉かあ？

今日は、モモが作ってくれたんだけど

生っぱかった・・・しかし折角作ってくれたのに文句は言えなかったわけで・・・

でもモモが、ちゃんと焼けてるって言うってたんだが

うぉー腹が~~~~~

10分後

ふうー毒素は全て出し切ったわ。  
さてと。

「・・・・・・・・」

「・・・紙が・・・無い・・・」

あああ忘れてた~~~~

ティシュが無い!!

むしろティシュ的なもの、この世界無い。

何か吹くもん、あるはずねえ~~~~~!!

葉っぱ・・・嫌だ~~~~!!

そうだ!モモに何か取って来て貰おう。

「モモオ~~~~!」 しん

あれ?

もう一回

「モモオオ~~~~!!」 しん

えっ？ ちょ！ ええええ！ マジで！？

待て待て待て、え？ええええ！！

まさか置いてかれた??

まさか、モモに限ってそんな事有る訳が無い……

「モオオオオオオオオオ——！！助けて——拭くもの拭くもの持ってきて——！！」

$$\begin{array}{c} \mathcal{L} \\ \sim \\ \mathcal{H} \\ \sim \end{array}$$

．．．あのくそ猫おおおおおつおお！．．．俺を置いて、先行きやがったー！ー！！マズイよマズイこんな所で、ケツ丸出しとか！！

「だ、誰か―――助けてください―――！！紙を！俺に紙を―――！！」

あれ？まさか・・・この感じ・・・

SIDE〜モモ〜

「ちょっと行って来るからー！まっとうて！」

「にゃ〜分かったニヤ、早く言ってくるニヤ！」

まったくご主人にも困ったものニヤ

仕方ないニヤ、のんびり待ってるニヤ

すると何処からか焼けるような匂いがただよってきた。

「なんか燃えてるニヤ？」

遠くに村が見えるニヤ

襲われてるのかニヤ？

「行ってみるニヤ！」

本来アイルーは、主人の命令が無いと勝手な行動は、しないのだがモモは前のハンターに、自分で決めて行動しろと、言われてたので前の癖で、勝手に動いたわけである。

「ニヤニヤー！」

ニヤ？コレはモンスター反応だニヤ！

最近気がつたニヤ、僕のモンスター反応ご主人より広範囲ニヤ。

「モンスターに襲われてるニャ!!」

モモは全力で走る。

町に入り、そこで見たモンスターは。

「ニャニャ!!アレはラギアクルスニャ!!」

「ボウツ!ボウウオオオ!!!」 バチバチツ

海流ラギアクルス

モンスターハンター3を象徴する大型モンスターで、水の世界を支配する巨大海竜ニャ。

水中を自由に動きまわるラギアクルスだが、陸上でも行動可能で行動パターンには大きな変化があるニャ。

あと雷を発生させるニャ・・・僕誰に言ってるニャ?まあいいニャ。

「ご主人行くニャ!!」

しゅん

・・・あにゃ?

ニャー!!!

ご主人う こ中だつたニャー!!!  
忘れてたニャ・・・

「キャッ!!!」

逃げ遅れた人かニヤツ？  
ラギアに襲われてるニヤ！

「早く逃げてくださいッ！」

「おねーちゃんッ！！血が出てるよ！」

「私の事はいいから早くッ！！」

やばいニヤ助けるニヤ！

S I D E 〱 周泰 〱

私たちは黄巾党討伐のため、準備をしていましたが。

また、あの化け物が出ました。最近よく現れる化け物

私達の武器じゃ歯が立ちません・・・

蓮華様の命令で、町の人たちの非難をすることになりました。

思春殿も行こうとされたのですが、この間化け物と戦って怪我をされてしまいましたので、蓮華様に止められていました。

私は町に出て兵達と手分けして、住民の非難をしました。

あの化け物の雷のせいで、町が燃えています。

もう残ってる人が居ないか、確認しに行きました。

すると一人の男の子が、あの化け物に狙われていたので、私が助けに向かったのです。

「ボウッ！ボウウオオオ！！！」

「うつつ・・・誰か助けて・・・」

男の子の所にたどり着きましたが。

化け物とは、あまり距離がありません。

「は、早く逃げますよ!」

「お、おねーちゃん?」

油断してた訳では無かったのですが

「ぼおおおおー!」 バチバチッ!

化け物が口から雷を出して、私達を襲いました。  
何とか男の子を担いで避けたのですが。

「キャッ!」

少し当たってしまいました。  
せめてこの子だけでも。

「早く逃げてくださいッ!」

「おねーちゃんッ! 血が出てるよ!」

「私の事はいいから早くッ!」

男の子は、走って逃げてくれました。

これで安心です。

化け物が私に、向かってきます。

逃げようと思ったのですが、先ほどの雷で痺れて動けません。

「ああ、私はココで死ぬんですね」

もっと、お猫様モフモフしたかったです・・・



諦めかけた時、遠くから笛の音が・・・  
するとあの化け物が、笛の音の方に振り向きそちらに、行ってしまった。

何がおきたのですか？

笛の音が聞こえた方を、見ると驚きました。

「エッ？」

鎧を着たお猫様が、二本足で立ち、笛を吹いていました。  
私は、夢でも見ているのでしょうか？

SIDE～モモ～

危なかったニヤ！

角笛の術使って正解だニヤ。

もうちょっとで、女の子が食べられそうだったニヤ。  
でもヤバイニヤ、ラギアのヤツこっちに来てるニヤ。

「今のうちに逃げるニヤ！」

「え？」

「早くニヤ！！」

「ええッ！！お猫様が・・・喋った・・・」

「ニヤー！！」

「わ、わかりました！でも」

にやにか、言いかけてたけど僕は、ラギアに突っ込んだニヤ！  
喰らえニヤ！

ドスランピッケルでラギアを叩く！

カンッ！

ニャ・・・硬いニャ・・・

しかしモモが、諦めるはずがない  
すかさず、別の所を、叩く

「ニャ！胸の部分は、いけるニャ！なら」

高速で胸を叩く

「ギヤアアアアー！！」

い、行けそうニャ！

だがラギアも、モモのスピードに、慣れてきたのか反撃してくる。

「ニヤツニユ！！」

「お猫様！！」

物凄い突進ニャ・・・

あれニャ？まだ逃げて無かったのかニャ。

「負けられないニャ・・・」

ふらふらに、なりながらも立ち上がる

「ニャーーーー！！！」

ジャンプ攻撃仕掛けるが。

正面から仕掛けたのが、失敗だった。

ラギアが、雷球ブレスを放つ。

空中にいるから、避けれない

「ビニャー!!」

正面からブレスを喰らい、動けなくなる。

そこからはラギアの猛攻、避けれずに、やられていく。

いくら元伝説のハンターの、お供と言っても所詮アイルー1匹。

大型モンスターは、無理がある。

そして最後に吹き飛ばされる、モモ。

「も、も駄目ニャ・・・」

「お猫様!!」

近づいて来る周泰

「何で、逃げないニャ？」

「逃げられません!!」

「何でニャ？」

「大好きなお猫様が、戦ってるのに私だけなんて逃げられません」

「先ほどの攻撃で痺れて体が、いつもの様に動きませんが・・・何とかしてみせます」

そう言い、モモを抱き上げ、逃げようとすが

ラギアクルスの方が、少し動くのが速かった

「ボウツ！ボウウオオオ!!!」

バチバチツ

「僕を置いて、逃げたらよかったニヤ・・・」

「ま、間に合いません!!」

覚悟を決め目を閉じる周泰

しかし、モモは何かに気づき笑っていた

「来るの遅いニヤ」

「させるかー!!ボケーー!!」

「ギヤヤヤヤヤヤヤー!!」

レイヤ装備の光が、太刀でラギアを斬りつけた。

「待たせたな!!」

「来るの遅いニヤ、ご主人」

「勝手に先行くからや!」

「ニヤニヤ ウン して遅れたヤツに、言われたくニヤイ」

「う、うるせーこっちはこっちで、大変やってんぞ!!」

「ボウウウオオオ!!」 バチバチッ

流石に、待つてはくれないニヤ。

余り効いてなさそうニヤ。

しかも怒らせたニヤ。

「おい、そのキミ、モモ連れて離れてて」

「え?しかし!」

「大丈夫ニヤ、僕のご主人様ニヤ、負けないニヤ!」

「わ、わかりました」

ご主人、後は任せたニヤ

S I D E } E N D }

「さてさて、やりますか・・・あんまり効いてなさげやけど」

勇ましく立ち向かう光！

なになに？ん？ケツは拭いたかつて？

そんなの聞くのは、野暮ってもんよ！！

## 水中戦

太刀 飛竜刀【椿】

太刀を構え、ラギアクルスと戦闘中  
モモの、仕返しと意気込んで挑んでるのだが・・・

「ちょ待て！ギャ！」

ただいまボコボコにされています。

ハハハなんだコイツ・・・

海の生き物なのに陸地でもはええええ！！

突進速すぎる！何よりも突進しながらの帯電半端ない・・・

離れたら離れたで、雷球ブレス・・・これフルフルより、凄く痛い・・・  
だが

「調子乗るな！！」

腹部めがけてひたすら斬る  
ココが一番刃がとおる！

斬る 斬る 斬る 斬る

「オラオラオラオラオラオラアッ！！！！！！」

おお効いてる効いてる！  
・・・このままいk

「ボウウウオオオ！！！」

ブンッ

「ヒデブツ！！」

回転攻撃で、吹き飛ばされた。

調子乗りすぎたか・・・斬るの精一杯で、避けられなかった。  
だが効いてたみたい、そのまま海？川？へ逃げやがった。  
水中戦かよ・・・

光は、覚悟を決め飛び込む！

冷たッ！！

しかも何処行っただ？

バチバチ

お！放電場所発見！  
ハハハ逃がすと、おもてか！  
しかし水の中で放電ってかなり危ないな



放電していたラギアが突如こちらに、顔を向け光と目を合わせてきた。

？

なんだ？

ぎゃあああああああ！！！！

口を開け凄まじい勢いの雷球ブレスが、直撃！！

油断した、真っ直ぐ進みすぎた。

ヤバイ息が・・・

でも浮上している場合じゃね。

そのままラギアに突っ込む！

ガチンコの戦いにもつれこんだのだ。

太刀を何度も、ラギアの体に叩き込む。

光もラギアの、攻撃を受け続けるが、なんとか耐える。

苦しいが、効いてる！

よし、行ける！ 行けるぞ！！  
今なら出せる！

そう太刀には、奥義がある。

敵を斬り続けると、剣に練気ゲージが溜まる。

そしてそれを、一気に開放する事が出来る奥義。

気刃斬り

オラアアアアアアアアッ！！

最高の連撃を決める。

「ぎやううううううううううううううう！！！」

ラギアは雄叫びを上げ、そのまま力なく沈んでいった。

・・・やった・・・やばい息が

なんとか水面から顔を出し。

「ラギアクルスとったどーーーー！！！」

最後に光は、一言こつ言った

「二度と水中戦はやらん!!」

## 水中戦（後書き）

飛竜刀【椿】 攻撃力1248 火 450

ヤバイネタが・・・ない。

でも頑張ります！

## 狩りのあと

「装備解除」

何とかラギアを狩り、装備を解除する。

「うゝ、服がビチャビチャや・・・はよ上がる」

海？川？

どっちでもええわ！！

とりあえず上がったら、モモとさっきの女の子が、こっちに来た。  
ウハッ、よう見たら、めっちゃ忍者見たい。

「あ、あ、あの大丈夫ですか？」

「・・・ん？ああ、何とかね」

「流石ご主人ニヤ！」

「モモは、大丈夫か？」

「ニヤンとか、無事ニヤ」

「そっか無事でよかった」

「それで、先ほどの化け物は？」

「倒したよ。だからもう心配ないでええで」

するとニパ〜と笑顔になり

「ほ、ホントですか！あ、有難う御座います。・・・私たちでは、  
どうする事も出来なかったので・・・あ！？す、スイマセン。  
私は周泰です！どうぞ、明命とお呼び下さい！」

マシンガントークやね・・・ってか

「真名いいんか？」

「はい！この町を、救ってもらい私も助けただいたので、構いません！」

ニコニコ顔可愛い・・・

あ！しまっ・・・

ビクッ！！

来たぞ~~~~殺気が・・・なんだ？俺が可愛いと思うと、この症状が起きるンやけど・・・  
とりあえず、俺も自己紹介。

「じゃーあり難く頂戴するな。・・・で俺は、中村光って言うから、あと字は無いから」

「僕はモモニヤ！」

すると明命

「何故このお猫様は、言葉を・・・」

ああ・・・コレね・・・説明メンドイ・・・

（ご主人どうするニヤ？）

アイコンタクトしてくるモモ  
光も悩む・・・

「何か聞いては、いけない事でした？」

と顔が暗くなる明命

「いやいやいや別に、大した事無いよ、別に」

前みたいな説明をする光とモモ

「そうなんですかゝ東の島国には、お猫様は言葉を喋り二本足で歩くのですね！」

「まあそうやけど、周りに言わないでね」

「はい！わかりました！！」

すげゝ嬉しそうに納得してるけど嘘ですから・・・あゝ、なんか罪悪感。

それと気になってたけど、腕怪我してるな。

「怪我してるやん腕」

「あ！？いえ大丈夫です！」

すると慌てて腕を隠す明命

全然大丈夫に見えんけど・・・結構出てるで血  
こんな時には、回復薬でええな

いつもの用を選び、バックから取り出す。

「明命ちゃん、コレ飲み」

さり気に渡す俺

「何ですか？コレは？」

「ん？薬や！その怪我に効くから」

「え！いいですよ、気にしないでください。・・・そ、それにこんな高そうなお薬・・・」

光は明命の頭に手を置き説得する。

「薬の事は、気にすんなそれに（大量にあるし）、女の子が怪我してんの嫌やしな」

イキナリ頭に手を、置いたので、ワタワタしてる。

可愛い・・・案の定殺気を、感じたがもう気にしない。

「で、ですが・・・」

モモにアイコンタクトをする。

気がついたのかモモも

「そうニヤ。気にしないでいいニヤ〜早く飲むニヤ〜」

「モモ様が、言うなら・・・へ？これ飲み薬なんですか？」

この子、猫大好きっ子やな。モモの言う事は、聞きやがるぜ！！  
ってか、またメンドイ事聞いてきたな。



「そうニヤ」

「怪我してるのに、飲み薬なのですか？」

「気にするな！」

「はっ、はい。スイマセン折角頂いてるのに私。では、あり難く頂戴します」

やっとな飲んでくれたわ。

「ごちそうさまです」

すると明命の体が光だす。

・・・ハイ！傷も癒えて全回復です！

「す、凄いです！」

やっとな吃驚しますわな。

あと正直、回復薬と回復薬Gの、違いがわからん！

「光様！す、凄いお薬です！！え、あ、有難う御座います！！」

「気にすんな、楽に行こう」

「ニヤニヤ、ニヤ」

すると何かに気づいたように、明命

「あっ！？私報告しないと行けないので、先に行きますね。それとお城に来てください。町を救った英雄様ですから、蓮華様達にも会って行ってください。門番にお伝えしておきますので。でわ！！」

まさに忍びの用に、飛んでいく明命

・・・ハヤッ！！

つーか、また偉い人と会わなあかんの

「なんか凄い子ニヤ・・・で、どうするニヤ？」

「どうするも何も、行かなあかんやろ」

はあーメンドイ・・・気つかうな

取りあえず行くか

く城く

まあデカイな、見えてたけど。

なんか人メツチャ出てくるやん。

「非難してた人かニヤ？」

「そうか非難してたんやな・・・」

モモには猫になりきってもらい、また肩に乗ってます。

とりま門番を、見つけ話を、すると案内されたわ、王の間みたいなところまで。

お！明命ちゃん発見！

あとお二人さんは、初見ですな。

てか、真ん中絶対、雪蓮の妹やろ。

めっさ似てるやん。

もう一人髪を団子にしてる子

ガン見やん！！

ヤメテ、もはや睨んでますやん。ビームでそうやん。

あと腕折れてんのか？折れた時みたいに腕固定してるけど。

すると雪蓮似の子が

「明命から聞いた、貴方があの化け物を、倒してくれたのだな」

うはゝなんかこの子も、オーラ半端無いんですけど。

「え。ま、まあゝ」

すると

「ありがとう」

いきなり頭下げられた

「蓮華さま！？」

団子の子が、やめさせようとする。

まあ雪蓮が、王ならこの子も、王の妹やもんな。

いくら俺が、ラギア倒したからって言ってもな、流石に頭下げんのはなあゝ

「いいのよ思春、私達の呉の民を守ってもらい、それに明命も助けてくれたのだ」

そげな大層な事言わなくていいよ。ムズカユイっす。

「すまない、挨拶がまだだったな。私は孫仲謀、真名は蓮華、そして……」

「甘寧だ」

チリーンと鈴の音が響く

「俺・・・私は中村光。字は無いので、適当に呼んでください、あとおねーさんから、手紙預かってるので渡します」

「姉様から!?!」

モモのポーチから手紙を取り出しわたす。

一通り読んだのか光に、話し出す。

「まさか貴方が最近噂の、化け物を狩る天の御遣だったのか・・・  
・それにその猫喋るのだな」

全部書いてやがった!!

はぁ取りあえず説明しましたわ。

めんどくせ〜〜〜〜!!!!

「化け物を、狩るために旅をしているのか」

「光様凄いです!!」

明命そのキラキラした瞳で、見ないで〜

それと、色々聞いた。

この町実は揚州から少し離れた町みたい  
揚州には袁術居るんだってよ、しかもラギアが、出て頼んでも無視  
らしい。

何とかしろってさ・・・

黄巾党討伐しにいかなあかんのに、町の人どうしよか悩んでたら、  
俺が倒して万々歳って訳らしい。

そんなこんなで、説明が終わり。

今日は、泊まってくれってさ。

宿代浮いたぜ！！

最後に、甘寧さんから・・・

「蓮華様に、何かしたら斬るッ！」

・・・って言われたんですけど

取りあえず媚売りでは無いが、秘薬のプレゼントときました。  
怪我を治してください。

怖いッ！！

## 狩人と鈴の音（前書き）

SIDEシステムやめてみました  
読みにくかったらごめんなさい。

## 狩人と鈴の音

「ぷはあ~~~~」

タバコ吸いながらブラブラ庭を散策中

昨日話が終わり飯食って、スグ寝たみたいやわ。

ラギアと戦ったて、疲れとったんやわ。

あ！この間の、う　こ事件ちゃんと拭いたからね！！

バックの中に、なんかポツケケットなど色々も入ってたから。

流石に、主人公が、ウ　筋付けてるとか、洒落にならないからね。

「ぷは~~~~」

ギンツカキンツ！！

「なんぞ？」

何処からか、金属ぶつかる音が聞こえてきた。

暇だったので音のする方へ向かう。

そこには、蓮華と甘寧さんが居た。

甘寧さん怪我治ったんですね。骨折まで治す秘薬って・・・ホンマなんでもアリやな。

「はあっ、は、はっ・・・・・・・・・・はあ！」

ギンツカキンツ

「闇雲に切り込めばいいというものではありません蓮華様」

修行中??

しかし・・・すげゝはえゝこえゝかつけゝ

取りあえず邪魔に、ならない様に隠れとこ。

ギンツカキンツ

「熱くなるのは蓮華様の悪い癖です、剣が単調になっております」

「はあっ…はあ…、言わせておけば!!はあああ!」

この感じ、そろそろ終わるかな?

ガギギンツキインツ

ヒュンヒュンザクツ!!

「にやつ!?!」

蓮華の剣が、弾かれて地面に刺さる・・・しかも俺の真横・・・  
死ぬわ!!!!

「ここまでに致しましょう」

「思春待って!まだやれるわ!」

「いえ・・・おい!見えているなら声くらいかける」

バシてたんか・・・

タバコを消し二人に近づく。



「えっ？あつ光？」

「おつかれさん、しかしスゲーな二人とも」

「そんな事は、無い。」

「いやいやマジスゲーんだけど」

「あの化け物を、倒したヤツの台詞とは思えないな」

ああそれね。あんなMHの鎧と武器が、あればこの世界の人なら倒せるよ。

所詮神から貰った力やしな。実力じゃ無いし。

「中村」

甘寧が短く呼び何故か、剣を構えてくる。

「な、なんやの??」

なんとなく嫌な予感が、するねんけど。

「私の怪我を、治してくれたのは感謝する。・・・だが、あの化け物を、お前が倒したとはどうしても思えない、だから私と戦え」

うそーん、いやや

「いー」たしかに、私達は、あなたの戦ってるのを、見た事ないし」  
うえええ」

「あの化け物を、倒した力、見せてくれないか？」

蓮華に、助け船をと見たのだが、無理みたい。

クソッ断れない状況やんけ~~~~!!

「はぁ~~~~わかったわ」

諦めた、ははは

「ではこのまま行くぞ!」

正直くんな!!

場合じゃねー!

甘寧が、地面を蹴り光との距離を詰め、真っ直ぐ剣を振るう。  
それを、とっさに避ける光。

「あぶなッ!」

いやいや本気でしたやん、今の!

この子俺を、殺す気や・・・

俺まだ、剣すら抜いてないのに・・・

「今のを避けるか・・・名は伊達では無いようだな」

「いきなりかいッ!!」

そう言い背中ของバスターを外し、腰の剣を一本抜く。

「その大剣は、使わないのか?」

「いや、あんた見たいなのは、こつちじゃなきゃ、当たりもしないやろ?」

「ほう・・・だがそんな細い剣一本で、私の剣を防げとは思うな」

甘寧は、そう言い一気に攻め立てる……が。  
光は、全て防ぐ。

ギンツカキンツ

なめんな！

こちらとて伊達にモンスター相手してへんねん！！

「……すごい、あの思春の斬撃全て、防ぐなんて」

蓮華さんそんな感動の目で見ないで、照れる。

しかし案外一撃が重い。そんな細い体にどんなパワー秘めてんねん！！

「私の攻撃を防ぐとはやるな、だが防いでばかりでは、勝負はきまらんぞ」

はあゝ本気出さなあかな、コレは。  
かと言って、今案外マジですよ。

剣を弾き距離をとる光。

そしてもう一本抜く

「じゃ、本気でいくで」

「本気で来い……うッ！！！」

光の一言で、場の雰囲気が変わる。

そう、ただの威圧、または殺気。

光はただモンスターを、相手してると思って、戦う気になったただけ

なのだが。

その殺気は、常人を超えている。

伊達に、今までクツク、蟹、フルフル、昨日はラギアクルスを、相手してきたわけじゃない。

モンスター達の殺気を浴びてきたら、光も対抗するため威圧する。

向こうは殺す気、コツチは狩る気

光はなんやかんやで、もう立派なハンターなのだ。

本人は自覚ゼロですけど・・・

「ほな、行くで・・・」

剣を構え走り出す。

ギーン！カキン！

再び打ち合いが始まる。避け、弾き、捌く。

双剣乱舞・・・MH装備の時の、使い方体が覚えてるな  
さて、どう終わらすかな。

なんか技名言った方が、かっこいいんかな？

なんて威圧感だ、私が臆するとは、流石と言っべきか・・・  
自分の力を、試したく挑んだのだが。

剣が一本の時は、防いでばかりだったのだが、二本になってから隙が無い。

私の剣を、防ぎすぐに、もう一本が私を襲う。そして何より速く重い。

強い、そうだろうあの化け物を、倒すほどなのだから。

攻防が続いていると中村が、叫んだ

「虎牙破斬ッ！！」

カキン！ガンッ！！

ヒュンヒュンザクッ！！

ただの上下の剣技なのだが、速すぎてとらえきれず、私の剣が飛ばされた。

やっちまった〜

カッコつけようって適当に技考えたけど・・・

冷静になったら25にもなつて虎牙破斬つて。ああああ恥ずかしい調子乗つてもた〜しかもパクリはアカン。

本気出すとか言つて結構やばかった、向こうも本気やったな。でも勝てた！！

「はあはあ俺の勝ち・・・やね」

「そのようだな・・・」

「驚いたわ。光、やはりものすごく強いよね。思春に勝つなんて、流石化け物を狩る者」

「そんな事ないよ、正直いっぱいいっぱいやし」

マジです、ただ力任せで押し込んだ感じやし。

なんやろモンスターと人は違うしな。動きもそうやけど的が小さい

し速い

星の時も何とかって感じやったし。

「さて、行くわ。飯も食ってないし」  
「待て」

この場を去ろうとしたら  
甘寧が呼び止める。

「まだなんかあんの？」  
「思春だ」  
「はッ？」

少し恥ずかしそうな思春に、対して呆ける光。  
蓮華は、嬉しそうに微笑んでいた。

「真名だ」  
「・・・いいんか？」  
「ああ」  
「了解あり難く頂戴いたします。思春さん」

光は礼をして、真名を受ける。  
でもやはりさん付けは、デフォルトだった。

・・・だってなんかなあ？こ、怖いしなこの子。

## アイルーと猫好き（前書き）

あ~~~~連ちゃんです。

なんか無駄に話数だけ多いな俺・・・

と、取りあえずどうぞ~~~~

## アイルーと猫好き

ニヤニヤ今僕は、ご主人を探してるニヤ。  
ご主人起こしに行ったら、いなかったニヤ。

「まったくご主人は、お供を置いて何処行ったニヤ？」

ココなら居そうニヤ。

モモは城壁を登る。

するとそこには、先客が居た。

「ニヤ？誰ニヤ……」

その人影は、微動だにせず、ただ外を見ているだけだった。  
モモは、気になりその人影に近づく。

「……アレは、明命さんだニヤ」

モモは、小走りで、明命さんに近づく。

本当、何してるニヤ??

「ニヤニヤ〽明命さん〽何してるニヤ？」

「はうッ!!これはモモ様、何か御用でしょうか？」

突然大好きなお猫様に、声をかけられ驚く明命

「別に、用は無いニヤ。……あッ!そうニヤ、ご主人見なかつ



たニヤ？」

「光さまですか？・・・すみません私は、見てないです。」

「そうかニヤゝ・・・それと明命さんは、ココで何してるニヤ？」

モモは、とりあえずの疑問を聞いてみた。

「監視ですッ」

「監視ニヤ？」

「ハイ」

「大変だニヤ」

「いえ、それが私の任務なのでッ」

「そうかニヤゝ暇じゃにやいか？」

「そんな事は、ありません。監視は重要な任務なのです！少しの油断が命取りなのですッ！」

ニヤニヤ立派ニヤゝ

僕の生まれ故郷も、監視は重要ニヤ！

いつ何時大型モンスターが、来るか分からないからニヤ。

でも、いつも監視役は、誰も自分からしなかったニヤ・・・まあ暇だからニヤ。

でも明命さんは・・・

「偉いニヤ！！」

感心するモモ。

モモの世界じゃ、監視は本当に重要だ。

昔、別の村で監視する人が、サボって一匹のモンスターの進入を許し壊滅に追い込まれた。

そう、戦うにしろ逃げるにしろ準備が、遅れたからだ。

「ニヤニヤゝ偉いニヤゝ」

「い、いえ、そんな褒められるようなことでは、ありませんよ」  
「でも、偉いニヤゝ」

いかんせんモモが、褒めるので、少し恥ずかしそうな明命。  
すると突然何処から音が。

ぐうううう

「謙遜しなくていいニヤ・・・・ニヤ?・・・・」

「いえ、謙遜なんてしてません。当たり前的事ですから」

ぐうううう

「ニヤニヤッ・・・・」

そう、明命の腹の音。

お、お腹すいてるニヤ?

「どうされましたか?」

「まさか、気がついてないのかニヤ?」

「なにがですか?」

ぐうううう

「・・・・」

「?」

本当に、気がついてない明命。

「えっとニャ・・・」

「??」

にゃ~~~~明命さんコレはコレで、どうしたものかニャ・・・

「お腹すいてるニャ？」

「え？お腹ですか？」

ぐううう

「・・・」

「・・・」

！？

「・・・はうわ！」

明命はモモに言われ腹の音が耳に入り、一度ポカーンとしてから、驚いて大きな声をあげた。

「さつきからなつてたニャ・・・」

「お腹が減ってる事に、気が付いていませんでした・・・」

ある意味凄いニャ・・・

「本当に、真剣に監視ご苦労様ですニャ」

「あうあう・・・そんなことないです・・・」

「そうニャー！」

モモは、ある事を思い出した。

「僕が、ごはんを作つてあげるニヤ!!」

「ええッ!?!いいです、気にしないでください!」

驚く明命、だがモモは引く気は無い。

「作るニヤ!!」

と言に残しこの場から去るモモ

「も、モモ様!!」

にやにを、作るかにやゝゝ

自分で言うのにもやんだが、僕はキッチンアイルーのレベルも高いニヤ!

厨房に向かうモモ。

偶然にも、厨房には誰もいない。

「ニヤニヤ、ちょうどいいニヤ」

勝手に食材を選ぶモモ・・・いいのか?

「豚肉と白菜ニンジンが、あるニヤ・・・」

「ニヤ?塩と砂糖しかにやいニヤ・・・でも僕は、神様に、調味料を貰つてゐるニヤ、ご都合主義万歳ニヤゝゝさて作るニヤゝゝ」

モモの料理作りが、始まった。

白菜とニンジンの水で洗って食べやすい大きさに切り  
豚肉は一口大に切り、酒と塩コショウを少々なじませておく。

中華なべにお湯を沸かし、野菜を下茹でする。片栗粉を少々まぶした肉も同様に下茹でする。

中華なべに油を少量ひき、野菜を炒める。油がまわったら豚肉も加えさらに炒める。

鶏がらスープの素 酒 醤油 オイスターソース 砂糖を入れて最後に、塩コショウをして味を調えて、水溶き片栗粉でとろみをつける。

「出来たニャ・・・八宝菜ニャゝ作りすぎたニャ・・・」

中華鍋から一人前皿に盛りおぼんに乗せてお箸も持って、明命の下に向かう。

「明命さゝん出来たニャゝゝ」

「本当に作ってきたのですか!？」

心底驚いた表情の明命

「さっ、食べるニャ」

「で、でも・・・」

「ニャ?にゃゝそうニャ!?!お仕事だったニャ」

「はい」

「じゃ僕が、見てるから食べるニャ!」

「えええでも、良いのでしょうか？」

「いいニヤ、それにお腹がすいたら戦えないニヤ！温かいうちに食べるニヤ」

「はい、そうおっしゃるのでしたら」

モモからお皿と箸を受け取り。

「それではいただきますツ・・・モグモグ」

「モグモグ・・・美味しいですっ！！」

「そう言ってもらえたらありがたいニヤ」

「はうわ！？」

「！？にやに！？」

いきなり驚く明命

「モモ様は、大事なお客さんなのに、私のためにこんな・・・」

「そんな事にしなくていいニヤ」

「で、ですが・・・」

「僕はただ、お腹が空いてる子に、ご飯を作っただけニヤ」

「モモ様・・・私もう我慢できません！」

「・・・ニヤ？」

「モフモフさせて下さい！！」

明命実は、モモをモフモフしたくて、たまらなかったみたいだった。

「そ、それぐらいにやら別に・・・・・・構わないニヤ」

結構考えて考えて、許可を認めるモモだったのだが  
その台詞を、聞いて明命が、モモに飛び掛る。

「ニャーーーーー!!!」

後悔するモモであった。

でも、幸せそうな明命を、見てると

別にいいかと思ってしまうモモだった。

それにしても余程お腹がすいてた見たいニャ

た、食べるの早いニャ・・・もうからニャ・・・

明命 スタミナが上がった、ネコの防御術【大】ネコの蹴脚術  
ネコのKO術発動

最後に厨房で・・・

「だれだ！こんなこんな凄い八宝菜を作ったのはーーーーー!!!」

と叫ぶ料理長が、いたとかいないとか。

## アイルーと猫好き（後書き）

モモのみでした〜どうでした？

まあ相変わらず文才は、無いけどね。

最近モンハン3に、GT5に、テイルズGに、PSP恋姫買いました・・・ドンだけ金が掛かったか・・・

しかも、いっぺんに、出すから何からやろうか・・・でもちゃんと、小説は書くからよろしくお願いします。

ではまた ノシ



## 新たな旅立ち

朝出発しようと、準備を整える光とモモ。

「次何処に向かう・・・」

「ニヤ、僕はご主人に、着いて行くだけニヤ」

行き当たりバッタリな旅なので、予定を立ててない光であつた。

いやいやいやまで、予定も何も、この世界の土地勘無いだけやからね！！

勘違いすんなッ！！

「たしか冥琳さんが言うには、曹操の所に火を吐く龍、洛陽に、凄くデカイトカゲ、南蛮に風を纏う龍、蜀に毒を撒き散らす大きな鳥旅人を襲う暴れ龍、平原に現れる角を生やした化け物、空から降ってくる金色の大猿、最後にキリンだったけな？」

「そうニヤ！リオレウスに、ラオシャンロン、クシャルダオラ、ゲリヨス、ティガレックス、ディアブロス、ラージャン、キリンだニヤッ！でもコレだけじゃなさそうニヤ」

はあ、先が思いやれる・・・だがラギアを倒したんや。  
全部やつたるで！！

気合を入れる光・・・出来んのか？

やつたるでええええッ！！！！

うっさいわッ！！

ええええ！？

「それじゃあ、本当にお世話になりました」

「出来れば一緒に来てほしいが。しかたがないな」

気がついたんやけど、蓮華王様口調と、普通の時があんな。  
出来れば最後は、普通が良かったな〜

思春さんは、相変わらず蓮華の後ろに控えているだけだが

「思春さんも元気だな」

「ああ」

流石だぜ・・・クールってか・・・怒ってる??  
気を取り直し

「明命ちゃんも、元気でね」

「はいっ!!」

元気でよろしい、あ〜妹にしたい。

「みなさん元気で〜ニヤ〜」

「も、モモ様・・・最後にもう一度だけ」

「ええよ!」

光の発言に驚くモモ

良いとは、言っただけど何が?

「光様が、良いというのであれば。で、では・・・」  
「ま 待つニャ・・・僕の意見は・・・？」

モモに飛びつく明命

「ニャアアアア~~~~~」

この時だけ心底悪いと思う光

（すまんモモなんか、面白そうだったから・・・テヘッ）

出発の前、光は蓮華に馬をもらった。

流石に、いつまでも乗れないのはマズイと思い、もらったのだ。

「練習もしてないけど、案外乗れるな」

「楽ニャ〜！」

馬に乗り、少しだけ香る潮風を感じ、モンスターを倒すため荒野を走る。次は、何処に向かうのか。

場所が変わり

「ご主人様〜」

「どうした桃香？」

「化け物また、出るかな・・・」

「それは・・・わからない。でも今回は、こっちに被害がなくて良かったよ」

桃香達、義勇軍は黄巾党を殲滅するため曹操との共同戦線を、張っていたのだが。

戦の途中、黄巾党の部隊の後ろからモンスターが出現したのだ。それに、一刀が気づき隊を一旦引いたので、劉備曹操ともに、モンスターの被害はゼロで済んだのだ。

かといって黄巾党部隊は、大半やられても、まだ健在だ。すぐにでも戦を始めて、終わらせたいのだが。いつまたモンスターが来るか分からない状態では、隊を出せないであった。

（しかしあれは、リオレイアだよな〜）

「ご主人様どうしますか？いつまでも互いに見合っているのも限界がありますよ」

「鈴々も、そろそろ戦いたいのだ！」

一刀の横にいた愛紗と鈴々が、聞いてくる。

「だよな〜朱里、雛里どうしたらいい？」

「そうですね。もう少し様子を見たほうが良いとおもいます」

「また戻ってくる可能性も考えられますし」

「あと曹操さんは、どうするかもあるしな」

「はい」

さてどうするかな。

光さんが、居てくれたらなんとかなったんだろうけど、今は、何処に居るか分からないし。

「はあゝ光さんが、居てくれたらなゝ」

ため息をついて言う桃香

「光さん？だれですか？」

「そうか朱里と雛里は、出会ってなかったな」

「凄いいんだなゝ」

誰かわからない二人のために、説明をする四人。

「俺と同じ世界から来た、あの化け物を倒せる人だよ」

「はわわ・・・ホントですか！！」

「あわわ・・・凄いです！」

「ホント凄い人だよ」

「最近では、賊に襲われてる村を、救っているせいかな（大剣を持つ天の御遣）や（猫を連れた英雄）や（化け物を狩る物）と呼ばれてるみたいですな」

「光おにいちゃん凄いのだ！」

（ホント光さんスゲーな、俺とは全然だ）

愛紗の、説明で気になった二人

「猫？なんで猫を、連れてるんですか？」

「一緒に戦ってくれる喋る猫を、連れてるんだよ」

「じゃ、喋るんですかッ！！」

「そつだよゝモモちゃんも、元気かなゝ」

「また、モフモフしたいのだ」

朱里と雛里は、ふっと思ひ出す。

喋る猫・・・大きな剣・・・ご主人様と似た服装・・・・・・  
あつー！

「あつー！私達出会つた事ありますー！」

「マジで？」

「はい、幽州に着いたばかりの時に、一度だけ」

「私達と別れてスグだな」

わいわいしてると

「本当にあの化け物を、倒せるヤツなんて居るのかしら」

！？

「曹操さん！！居たんですね気がつかかった」

「邪魔してるわよ劉備。それでさっきの話だけど」

「光さんの事ですか？」

「誰だか知らないけど、本当にあの化け物を倒せるのかしら？」

曹操の半信半疑な言葉に、一刀が答える。

「本当ですよ。前にもしょうぐん・・・巨大なヤドカリも倒してたし」

「本当ですよゝ」

「ああ」

「本当なのだ」

曹操は四人の目を見る。

嘘は言ってなさそうね。

しかし眉唾物とおもってただけ。

「わかったわあなた達が、言うなら本当でしょうね」

「そう言えば曹操さんは、何しに此処へ？」

「劉備。・・・明日の明朝に、再び仕掛けるわ」

そのころ・・・

「だ、だれか――止めて――！！！！！！」

「ニヤニヤ――！！！！！！」

馬が暴走し、制御出来ずにいた・・・

「ご、ご主人が強走薬グレートなんて飲ませるからニヤッ！！」

「モモもずっと走っていていられるから賛成」とか言ってたやんけ  
「！！！！！！」

「ってか馬ッ！！マジ止まれ！！！！！！あああああ」「ニヤ――！！！！！！」

## ハンター初めての戦

光達は今森の中を駆けていた。

「……………もういい加減にし……………て……………」  
「……………二……………ヤ」

しかし二人は、馬の上でうな垂れていた。

なぜかと言うと、馬に強走薬グレートを飲ませ、暴走して三日三晩走り続けているからだ。

ちゃんと乗れもしないのにそんな事したのだから、自業自得だ。

最初は、「マジで止まれー！ー！！」「ギヤアアア！ー！」等々叫んでいたのだが。

流石三日三晩走りぱっとなしだったら、叫ぶ気も失せる。

「腹が減った……………ケツが麻痺してる……………トイレ行きたい……………ちゃんと寝たい……………降りれない……………」

「元気の内に飛び降りればよかったニヤ……………」

「それは、怖い……………」

馬は強走薬グレート飲んでいるから、疲れない腹減らない眠くならない。

「……………いつたいココ何処よ……………しがみ付いてるのそろそろ限界……………」

「……………ご主人あきらめたら、そこで試合終了ニヤ……………」

「あ、安西先生……………何故モモが、そのネタを？」

「気にしたら負けニヤ」



気になるんっすけど。

すると声が聞こえる。

「うおおおおおおおー！」

「にゃにか叫び声聞こえにゃいか？」

「・・・聞こえたなってさ、この先じゃない？」

そのまま森を抜ける。

場所は変わり一刀達

「今回は、来なさそうだな」

「そうだね、ご主人様」

モンスターの襲来は無いと見て、黄巾党に攻めているのだ。

劉備軍は横隊を組み正面からの突破、後方から曹操の援護という形。劉備たちを囲にして、曹操の別動隊で兵糧を狙う作戦だ。

「愛紗達大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも」

信用してるんだな・・・だよな何ウジウジしてんだ、俺は。あいつ等が、やられる筈なんて無いよな！

すると桃香が、何かに気づき一刀に知らせる。

「ご主人様、何か森から出てきたよ？」

桃香が指を指すほうに目をやる。

「馬か？なんだ？曹操さんの作戦が何か？でもこのまま行けば、突っ込むぞ！！」

「そ、そんな報告は受けてませんよ？」  
と朱里が答える。

「うそーーーーー 戦場やんけ！！！！」  
「ニヤニヤ！！」

まあこいつらですよ。

「いやいやいや、このアホ馬マジで止まれ！！」  
「ニヤニヤ馬さん止まってニヤーーーー！！」

突っ込むかと思われたが、目の前に大群を見て馬は驚き、急に止まったのだ。

光は、急に止まると思っていなかったのだ

「うそーーーー！！」「ニヤーーーー！！」

真っ直ぐに放物線を描き、吹っ飛ばされたのだった。

「皆の者耐えろ！もうすぐ流れは変わる！その時まで耐え凌ぐのだ！」

そのころ愛紗は、前線で戦いながら、兵たちを鼓舞する。曹操の別働隊が、兵糧を狙うのを待っていた。

だが、待ってた物とは違う物が、来た・・・飛んできたのだ。

「うああああああ」「にやああああああ」

ドサッ！！バキッ！！「ゲハッ！！」

ズzzaザザーー！！

見事に黄巾党の兵を5～6人巻き込み着地した顔面から・・・

「光殿ッ！！！」

「んが~~~~痛い痛い痛い~~~~顔が痛い~~~~ん？愛紗ちゃんけ！？」

「ニヤ・・・？」

ココは戦場、ゆっくり話している場所じゃない。

「よくもッ！！同士を！！！」

一人の黄巾の兵が、光に攻撃を仕掛けるが。ギリギリかわす

「あぶな！」

「させるかッ！！！」

すかさず愛紗が、自慢の槍で吹き飛ばす。

「早く立ってください！」

「お、おお」

スグに立ち上がる光とモモ。

「どうして飛んできたかはわかりませんが、後で聞きます。今はこの状況です、戦ってください！」

「だな！……正直腹が減って眠くて体ダルイケド……」

最後だけ小声で言う。

「何か言いましたか？……はあああ！！」

愛紗は敵をなぎ払いながら、聞いてくる。

「なんもないよ～さてやりますか～モモは休んどいて良いで～」

「気にしないでいいニヤ、僕もやるニヤ～」

大剣を抜刀する。

「さてこいつら、黄巾党か……なら遠慮はいらんか……」

光は大剣を、横になぎ払う

その一撃で、敵兵が吹き飛ぶ。

「ブハッ！」「ギャー！」「ヒデブッ！」

「さて、次に死にたい奴は誰や!!」

「す、凄い・・・」

愛紗は、光の一閃に、目を奪われていた。

「モモ」

「にゃんニャ？」

「暴れるぞ」

「わかったニャ！」

不敵な笑みを浮かべ一人と一匹が、敵のど真ん中に向け駆けたのだ。  
った。

俺この戦い終わったら、ご飯いっぱい食べて、布団で寝るんだ。  
・・・あれこれ、死亡フラグじゃね？

凄い・・・人が紙屑のように吹き飛ぶなんて・・・流石ですね。

敵陣を切り裂く男に、愛紗は、見ほれていた。

まあ本人は、先ほどまでの苦行に開放され、飯を食べ寝たいと思っ  
ているから早く終わらしたくて、必死だったりする。

これは好機だ！

「皆聞けッ!!我らにもう一人の天の御使い、化け物を狩る物が味

方に付いた！恐れるものは何も無い、さあ存分に戦え！！！」

「うおおおおおおおおおっ！！！」

「なあ桃香、馬から吹き飛んだ人光さんじゃないか？」

「え？本当ご主人様」

「え、なんとなくだけど」

兵が吹き飛ぶのが、此処からでも見えていた。

あんな事できそうな人、モンスター相手している光さんしか居ないような気がするし。

すると愛紗の声が聞こえた。

「皆聞けッ！！我らにもう一人の天の御使い、化け物を狩る物が味方に付いた！恐れるものは何も無い、さあ存分に戦え！！！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「光さんだね」

「だな、化け物を狩る物って聞こえたしな」

光さん来てくれたんだ、コレなら絶対負けない！

すると敵陣内から火の手が上がった。

「曹操さんも成功したみたいだね！」

「ああ、これで敵が動揺するはずだ」

光の介入、兵糧庫の襲撃、敵が動揺するには十分だった。

そして程なくして戦闘は終結した・・・

おわった~~~~~!!!

腹へった~~~~~!!!

ねみい~~~~~!!!

感無量です・・・・・・なるかつ!!!

「しかしまあ・・・成り行きで戦デビューしちまったな」

「仕方が無いニヤ」

まあそうやけど・・・一度にこんなに斬ったのも初めてやな  
大剣が血でベトベトや。

すると愛紗が、寄って来て頭を下げる。

「光殿、感謝します」

「へっ??そんなに畏まれても」

何が?と表情の光

「そんな事は、ありません。・・・光殿が現れてから兵の士気も上がりそのお陰で、我が軍は被害が最小ですみました」

照れる光、だから無理やり話を変える。

「そ、そういえばみんなは？」

「え、ええ 桃香様達は、皆本陣にいます。会われるなら案内します」

「もちろん会っ会っ」

そっつい案内してもらっ。

曹操軍陣内

化け物を狩る物が、現れたとの報告が上がっていた。

「まさか現れるなんてね・・・」

「華琳さま、我が軍が、仕掛ける前に劉備軍に加勢し、敵を追い込んでいたとのことす」

夏侯淵が、曹操に報告のまま伝える。

「面白いわね。で、その者は？」

「今は、劉備の陣内に居るみたいです」

そばに居た荀イクが、答える。

「・・・なら会いに行くわよ」

さあ光はどうなるやら・・・



一段落？

「よ！一刀〜」

「光さん！」「光お兄ちゃん！」

光は、劉備軍の天幕まで来ていた。

久しぶりに会う一刀や桃香達を見て、先ほどまでの疲れが飛ぶ。

「桃香も鈴々も、久しぶり〜」

「久しぶりニヤ〜」

「光さんもモモちゃんも、お久しぶりです〜」

「久しぶりなのだ〜」

いいね〜ココは、なんか落ち着くわ〜

久しぶりに、緩い空気っていいわ〜

劉備軍の面々と挨拶をした光。

だが誰かを探すように、キョロキョロと周りを見回す。

「どうかされたんですか？」

不審な動きの光に愛紗が聞く。

「いや、べつになんm……」

「星ちゃんなら居ないですよ。……まだ白蓮ちゃんの所だと思うけど」

ニヤニヤ顔の桃香

「ん？別につて何言ってるの？桃香さん……」

「え？大好きな星ちゃんを探してるのかと。……あれ私の勘違いでしたか？」

なにを言ってるのこの子べ、べつにな、なんも、ハハハ。

何テンパってんだ俺……

「いや別に星を探してた訳じゃないで」

「またまたくだったら何で？キヨロキヨロしてたんですか？」

「ソナコトナイデスヨ」

「光さん片言になってますよ……」

「一刀くん何をいつてるのかな？」

正直いっぱいっぱいな光だった。

そのやり取りを見ていた愛紗が、我慢できなかったのか唐突に疑問を投げかける。

「光殿は、星が……す、好きなのですか？」

「！？」

おいおい、何聞いてきてんねん！

んゝ好き？好きだとも……そらゝあんなベッピンさん嫌いなわけない。

むしろドストライクです。

でも、そんな事言えない。

光の中では、この世界で恋愛は、避けているのだ。

なぜかって？全てが終わると帰るからだ。

いくら神が、何をしても良いと言っても。

帰るときに辛くなるからだ。

まあ俺が、モテルわけないのだが……

それでも、最善の言葉を選ぶ。

「ん〜何っーか好きやけど、仲間としてやで〜」

でもその台詞に嬉しそうな愛紗。

気が付かないのもデフォルトな光。

それを見ていた桃香が愛紗の耳元で

（頑張れ愛紗ちゃん）

「と、桃香様!!!」

付いていけない一刀でした。

「はあ〜なんか高校に戻った気分……あつ……」

俺、男子校……フツ……うわあああん

勝手に落ち込む光に、モジモジしてる二つの小動物が目に入った。

「おっ！自分らもおったんか〜幽州で会った以来かな？」

「はわわ……覚えてくれたんですね」

まあアレだけ噛み倒してくれたらな〜

嫌でも記憶に残るし。

「ニヤニヤ、カミカミだったニヤ」

コラ、モモよ それは言うてやるなよ・・・

「はう」

「そ、そういえば、自分らとは、自己紹介まだやったな。俺は、中村光や、んでこっちが」

「モモニヤ」

「わ、私は姓は諸葛、名は亮、字は孔明、皆さんが真名を許しているなら、私達も教えますね。・・・朱里です」

「姓は鳳、名は統、字は士元、真名は雛里です。よろしく願います、光様」

・・・ん？

一刀に、目をやると、うんうんと頷いていた。だが叫ばずにはいらなかった。

「ええええ、マジか！！ええええ！！嘘ッ、エッ！！」

モモは地球の歴史は、知らないので吃驚してた二人に、フオローする。

「ご主人は、たまにおかしくにやるから、気にしないでいいニヤ、取りあえずよろしくニヤ」

モモよもつとマシな言い方無かったのか？

それより、腹が減った、んで眠いわやっぱり。

まあそのはずだ、いくら体のスペックが上がったと言っても三日間飲まず喰わず寝れずだったのだ、それにいきなりの戦闘体の限界を超えていた。

「まあいいや。なあ、それより何かたべm……」

「邪魔するわよ」

「おうう……」

誰だよこの金髪ツインテールっ子……

「曹操さん!!」

桃香の台詞に、再び

「ええええ、マジか!!えええ!!嘘ツ、エツ!!」

一刀に、目をやると、うんうんと頷いていた。  
何コレ?何かムカツクんですけど。

殴って良いかな?

「一刀おおおおお」

「え?なになに?うわっ!止めて……光さん!!」

とりあえず一刀に、絡むのだった。  
結構元気な光……んゝ馬鹿とも言つ。

「相変わらず、にぎやかな、劉備」

それを見ていた曹操が、呆れながら言う。  
良いでしょ。っと笑顔の桃香。  
いいのか？そこ怒るところじゃ……

「先の戦では、良くやったわね」  
「いいえ、曹操さんの、作戦のおかげですよ」

不適な笑みを浮かべる曹操。

「それだけでは無いでしょう？聞けば、前言っていた化け物を狩る物が、助太刀に入ってたって言うじゃない」  
「情報早いですね」

「フツ……それでどんなヤツが見に来たわ」  
「光さんですか……あ、あの……あの人です……」

桃香が指を指す。

しかし、光は一刀とじゃれていた。  
締めまりもない、ただ学校の休み時間に馬鹿やっている男子の用に。

「あ、あれがそうなの……？」

頷く劉備の将達。

あれがそうだと言っの？

なんだか私の思っていたのとは、違うわね。

あれじゃただの、馬鹿な男にしか見えないのだけど。

一緒に来ていた荀イクも同じ感想だった。

あながち馬鹿は、当たっている。

25ならもつと落ち着くべきだろう。

「光さんそ、そこは・・・アアーーーーー！やめ~~~~~」

俺は、曹操など気にせず、一刀とじゃれていた時。

ピキーン

「ご主人！？」

「わーってる！桃香ッ！みんなっ！ココにいる兵を早く遠くへ逃がして！」

何故かって？

メツチャ凄いスピードでココに、向かってる反応があるからだ。  
このまま行けば、かなりの数が巻き込まれる可能性がある。

光の発言に皆固まる。

だが一刀は、気が付き皆に指示をだす。

「アイツ戻ってきたのか?!・・・桃香みんなッ!頼むッ!それと曹操さんの所も!」

「いったい何を慌てているの?」

光の能力を知らない、朱里、雛里、曹操達は、困している。

「光さんは、あの化け物が近づいてくるとわかるみたいなんです」

「ほ、本当なの?」

まあ、本当だからな

ん?待てよ・・・戻ってきた??

光は一刀の台詞に、疑問に思う。

「一刀ッ!戻ってきたって?・・・俺が来る前にも来たのか?」

「は、ハイ、光さんが来る前日です」

・・・なら一刀なら。

「なあ、モンスター何かわかるか?」

「あ、はい!リオレイアです!」

その名前を聞いて肩を落とす。



マジか……

「とうとう強いのが出てきたニヤ」

「いや、ラギアでも十分やったやろ……でも」

火龍情報ってコレか？

正直雌か雄なんてこの世界の人は、見分けがわからない。

「まあ、嘆いてもしゃーないか。……装備選択」

何しよ……レイヤSでええか。

武器は、

大剣、ブリュンヒルデ

さて、雌火龍クエいきますか。

私が呆れていたなら、彼の目が変わった。

先ほどもでの、ふざけた目ではない。

すると彼は、ココに集まる全ての兵を逃がせと言っ

私達は、何を言っているのかわからなかった。

すると劉備が、彼はあの化け物が、近くに来るとわかると言ってきた。

その事に、驚いていたら。

彼がぶつぶつ喋ったら、赤い鎧を纏っていた。

「あれが、彼有能力……」

私を二回も驚かすなんて……面白い。

化け物を狩る物の力見せて貰いましょうか。

「じゃ！行くで〜」

「にゃ〜！」

気合を入れ、天幕が出る光とモモ

「流石に皆慌ててるな」

「仕方が無いニヤ〜」

桃香達が、必死に兵達を森のほうへ逃がしている。  
あと曹操の方も、自分達の兵も逃がしている。

「やっぱり曹操の方も、将は女やったか。まだ曹操以外、誰が誰とかわからんけど」

髪の長い子と水色の子は、将だよな？先陣切って兵を誘導してるし。しかし、さっきの曹操の、熱い目線ちよつと怖かった

「流石曹操女の子になっても覇気すごいな……」

「どうしたニヤ？」

「いいや、別に」

「ぼーっとしてたら駄目ニヤ」

「大丈夫大丈夫」

そろそろ来るな……ってまだ皆さん逃げてないけど……  
やばくね？

手伝うほうがいいかな？

考えてたら鳴き声が聞こえてきた。

ギアアアアアアア

「……勝てるんか？」

レイアの大きさに、ちよつと絶望した。

久遠の女王VS新米狩人（前書き）

あけおめです。

久しぶりっす。

どうぞ

## 久遠の女王VS新米狩人

でっけええええええええええ！！  
なんじゃあああああああ！！

空を飛ばたく雌火龍を見て驚きの光

あのサイズは・・・卑怯・・・

「クソッ！！」

「ニヤニヤ！やばいニヤ！！」

ヤバイな・・・うん・・・あれ絶対金冠レベル・・・

「それじゃにゃいニヤ！まだ撤退出来てにゃいニヤ！！」

周りを見回してもわかる、全員逃げ切れてない

「ヤバッ！！何とかしたいけど・・・どないしょ！！」

「とりあえずレイアを、こっちにひきつけるニヤ！！」

・・・ってどうやって？

「これニヤ！！」

モモが、掲げて見せてくれたのは角笛ですね。

まさか・・・それを・・・までまで

「ちよっっ」 「吹くニヤ！！」

ぴろりろん〜ぴろりろん〜

とめれなかつたさ。

まだ心の準備が出来てないのに

あああ、こっち見たあ

光達に向かって真っ直ぐに滑空してきた。

「ヤバイッ！！」

そのまま体当たりしてくるが、辛うじてかわす。

あぶなッ！！

ああ、あれは死ぬ・・・。

ん？・・・ヤバッ、向こう行きよった。

レイアは、そのまま光達をスルーしてまだ逃げている兵に目掛けて飛んでいった。

「させるかあああああ」

それを必死に追いかける光。

ヤバイヤバイ

なんか俺さっきからヤバイしか言っていない？

場合じゃねえええ」

追いかける光を尻目にレイアは、一人の兵を足で捕らえていた。

「逃げる気ニヤ!？」

鷹が獲物を捕らえそのまま飛び立つ用に、レイアも飛び立とうとしていた、てか飛んだ……

「マジか……」

「華琳様ツ!!」

曹操軍の将たちが、大声をあげる。

あれさ、あの金髪っ子……曹操さんやん……

何やってんの!!

せやっ!

光は、左目を閉じてアイテム選択し、道具を取り出す。

せんごうだま  
閃光玉

「逃がすかつ!く・ら・い・やがれ!!」

飛んでるレイアの正面に投げる。

すると眩い光が、辺りを覆う。

その光で、怯んだレイヤが、曹操を放したのだった

「きゃあああ」

あ、やべ。

落ちてくる曹操を、何とかキャッチする光

「大丈夫か？」「え、ええ」

「ご主人、上上、危ないニヤー!!」

ん？なにが？上？

疑問に思い上を見る。

「エッ!？」

レイヤも落ちてきた。

モンハンやってる人なら知っているはずですね。

飛んでるレイヤに、閃光玉を、喰らわすとどうなります？

ハイ、正解！落ちてきますね。

「やば・・・」

曹操を抱きながら何とか緊急回避をする。

「ハアハア、し、死ぬかと思った」

「ぐ・・・ぐむ・・・」



「ん？」

「ぶはっ！はっ、はっ、はっ」

「・・・大丈夫？」

「いつまで抱きついてる気よ！貴方の胸に圧迫しすぎて息が出来ないじゃない！」

「・・・ごめんなさい」

何この子怖い。

そんなことやっているとなレイヤが、こちらに向き、炎ブレスを吐いた。

「「え？」」

ブレスが光達に直撃。

土煙が巻き上がる。

周りの兵達や将は、あまりの事に静かになった。

グアアアアアア！！

レイアの咆哮が、響き渡る  
それにより我にかえる将達

「華琳様ッ！！」「ご主人！！」「光さん！！」

「華琳様が、華琳様が！！」

「姉者！危険だ！」

暴れる夏侯惇を夏侯淵が止める。

近づきたいのだが、レイアがいるので、近づけない。

「そんな光さんが・・・」

「光殿に限ってそんな・・・」

「にゃ〜カッコ付けてないで、さっさと出てくるニャ・・・」

心配する皆を他所に、ため息交じりで喋るモモ

「『『『え？』『』『』」

「あほか！！別にカッコなんて付けてないわ！」

土煙が晴れると大剣、ブリュンヒルデでガードしていた光が現れる。

「モモよ、心配ぐらいしてくれても良くない？地味に危なかったんやぞ」

「にゃにゃ、ガードしてたの見えてたニャ〜！」

「たくっ！大丈夫か？」

後ろにいる曹操に、声をかける。

「ええ、大丈夫よ」

そかっと返事をする。

そして正面を見据える

いつまでも話など出来る状況じゃない。

「曹操ちゃん、俺がアイツに向かったら、仲間の所までに走れ」

「ちゃんって……あなた……まあいいわ。でも勝てるの？」

「誰に言ってるの？俺は化k」「化け物を狩る物でしょ？」「おう」

グアアアアアアア！！

さてそろそろ向こうも限界かな？

「じゃまた……行くぞ、くらあああああ」

レイアに向かって走り頭を斬る

カンッ

「硬いなクソッ！」

レイヤはそのままブレスを吐くが、辛うじてかわす。

「当たるか！」

が

「ガハッ」

メキメキ

レイヤの回転尻尾アタックに、吹っ飛ばされる。  
口から血を吐く

「ヒューヒュー」

待て……。鎧が全然意味が無いぞコレ……。  
アバラが、折れた……。立てない

そのままレイヤが突進してきた。  
それを転がりながら避ける。

「足に力入らん……」

「ご主人！」

モモが近づいてくる。

「モモやばい、ハアハア、鎧が全然意味を成してないぞ」

それを聞いてモモは、驚いた表情をする。

「ニャー多分そのレイア装備が、あのレイアの攻撃に耐えれて無いニャ。・・・その装備が、この狩猟のレベルにあってないニャ」  
「マジかよ・・・」

「そんなことより早く薬を飲んで戦うニャー!!」

そういわれてスグに回復薬Gを取り出し飲む。

「よし大体治った」

再びレイアの連続プレス！  
それを大剣でガードする。

あ、アバラは、治ってない・・・痛い、ガードしてる剣からの振動が響く。

「ご主人、他に装備は無いニャ？」

「基本全部Sシリーズしかないけど？」

「ニャニャー！XかZはにゃいのかニャ？」

「無い！」

レイアは、今度は空を飛ぶ。

今回は、本当にヤバイな

もう、一発喰らうと・・・死

「ご主人避けるニヤ!!」

いきなりの急降下で、一瞬避けるのが遅れる。

「ガッ、尻尾にカスツた」

さらにそこから着地してからの突進  
レイヤの猛攻

ああ、くそ攻撃出来ん。  
しかも何か、眩暈がする。

「ご主人!! 毒ニヤ!!」

レイヤって尻尾に毒あつたな、でも

「今、薬飲んでる暇が無い!」

毒のままレイヤの猛攻を避ける。

このまま、このままじゃ・・・やられる・・・  
手が痺れてきた、瞼が重い、腹が減った、眠い。  
俺なんでこんな事してるンヤ?

誰のせい? 駄神のせい・・・

こんな、こんな所で死んでたまるか・・・

プチン

「調子のんなボケエエエエ!!」

レイヤの隙を見て大剣を、叩き込む。

ギヤアアアアア

「ご、ご主人？」

今の光には、モモの声が聞こえてない。

「毎度毎度毎度毎度手が掛かりすぎじゃ!!!!」

怯んだレイヤの後ろに周り尻尾を叩ききる

ギヤアア

尻尾を切られて前に倒れる。

「サツサくたばれや」

「じゃまた・・・行くぞ、くらあああああ」

そう言うとは、あの化け物に向けて走り去った。  
私はそのまま仲間の下に向かった。

「華琳様ツ!!」

春蘭秋蘭桂花が、安堵の笑みで迎えてくれた。

「華琳様お怪我はありませんか？」

「ええ、大丈夫よ、彼に助けてもらったわ」

「彼は、大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫でしょ、私に大丈夫って言ってたわ」

「ですが華琳様・・・押されてますよ、あいつ」  
「・・・」

本当に大丈夫なの？

「桂花、兵は？」

「我軍劉備軍共に、森の奥に撤退は完了しています」

「そう、わかったわ。コレで彼の邪魔にはならないでしょう」



取りあえずは兵は、無事ね。

「曹操さん」

桃香達もこつちに來たのね。

「大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ」

「それと感謝するわ。・・・貴方達のお陰で、兵に損害が無くて」  
「そんな事無いですよ」みんな無事で何よりです」

「桃香様、私達じゃ無くて光殿お陰です」

愛紗に注意され、そうだったと、えへへと笑う桃香

「そうね、彼のお陰だったわね」

「ガハッ」

メキメキ

凄い音がしたのでそちらを、見ると飛ばされていたのか  
彼が血を、吐いて倒れていた。

「光さん!!」

本当に彼大丈夫なの？

私は、桃香達に、聞いてみる事にした。

「ねえ劉備彼本当に、勝てるのかしら？」

すると

「勝ちますッ！光殿が負けるハズがありません」

「貴方に聞いているのでは、無いのよ関羽」

「でも光さんに勝ってもらわないと、俺達は、あいつ等に、捕食されるだけです」

北郷だつたかしら？

確かにそうね、私達にはアレは相手できない。

私の所にも、居るからわかる。

あの化け物には、武器が効かない、ただの自然現象として過ぎ去るのを、待つしかない。

でも、彼の鎧剣見た事無い物だった、アレなら勝てるハズ。気になってたけど、あの猫・・・喋ってる。

私たちが口論していると

「調子のんなボケエエエエ！」

彼の怒号が聞こえた。

そこからが凄い、一撃を与え尾切ったのだから。

「あの光さん、怖い」「光お兄ちゃん怒ってるのだ」  
「あれが光さん？キレてる」

劉備の、言葉に疑問に思う。

「あんな感じの彼は見た事無いの？」

「え？はい、だって普段は、優しいお兄さんなんですよ」

って事は、あれが彼の本気？なのかしら。

起き上がるレイヤに、更に一撃を加えようとするが。

火炎炸裂ブレス

辺りが火の海になる。

何とか大剣でガードするが  
衝撃で大剣が、飛ばされる。  
すかさず刀二本抜き

双龍剣【太極】

懐に潜り、鬼人化双剣乱舞

「ご主人サポートニヤ！」

鬼人笛の術      硬化笛の術      真・回復笛の術      解毒笛の術

各角笛を吹き援助する。

目の前をぶつとい腕や切れているが、尻尾がかすめていく。

こんな間近でレベルのあつてない鎧着て、今までとは数段上の竜相手に双剣で挑むとか・・・流石に無謀すぎたか。  
だが

「コレでトドメや」

レイヤの頭に二本の剣を突き刺す

案の定物、凄く硬かったが全身全霊を込めて突き刺した。

グアアアアアアアアアアア

最後に大声を上げてついに・・・倒れた！

「はあはあはあはあ・・・ッ・・・」

そのまま座り込み小さくガッツポーズ

「勝てた・・・でも、もうげ、限界・・・お休み」

仰向けに倒れ、今まで疲労によりそのまま寝たのだった。

「やったニヤ〜ご主人〜・・・また寝てるニヤ」

やれやれといった表情のモモ

「でも今回は、仕方が無いかニヤ」

## 久遠の女王VS新米狩人（後書き）

大剣   ブリュンヒルデ   攻撃1296   龍   250   防+10

双剣   双龍剣【太極】   攻撃336   龍   320

そろそろ新しい防具入ります。BY、神

## 防具Get(前書き)

黄巾の乱やつと終わった〜

今回は曹操達に、お世話になります〜

## 防具Get

「おつす」

「ぬあゝ」

またココか・・・  
とりあえず

バシッ！！

「イタツ！！いきなりグーで殴る事無くない？」

「ん？なんかとてつもなく殴りたかったから・・・」

今真っ白い空間に、また来てた。  
目覚めるとココとか気分が悪い。

「神を殴るとかホントは地獄行きですけど」

「知らん！お前のせいで本当に今回は、マジで死に掛けた」

防具が、全然合っていないとか考えられへん。

「まあええわい、確かに今回は、やばかったみたいだな」

「いや、ヤバイとかのレベル超えてたわ」

「いやゝわしもあそこまで、強いやつが、行ってるとかおもったらんかったわ、すまんすまん（笑）」

いやいやいや、すまんだけかい！（笑）って・・・もう一発殴ろうかな。

はあ、もういいや



「んで何のよう?」

「そうじゃそうじゃ、新たな防具を渡そうとおもっての」

まじか!

「流石にこのまま行けばお主確実に死ぬとおもってな」

「うん、死ぬな」

「だから今から頭の装備欄に転送するから」

「転送開始!」

ギザミZ

フルフルZ

レイアX

ジンオウZ

く転送完了しましたく

「おつ来た来た」

あれ?これって・・・

「俺が倒したヤツか?もしかして・・・」

「うん、そう」

なんでさ・・・もうS・ソルZとかくれたらいいやん。

「んゝなんていうか、却下!」

「はっ?」

「質問には答えません」

「・・・・・・・・・・」

いや、ホント死んでくれんなかな？  
イライラする。

「わかったでも、ジンオウツてなんや？知らんぞこんな防具」

「ああ、それモンハン3rdに出てくるジンオウガの防具まあ、Z  
なんて本当は無いからサービスじゃ」

へ？3rd??MH3triじゃなくて？3rd？

「ん？お主がそっち行つてから出たんじゃPSPで3rdが・・・」  
「え、ええええええええええ」

色々言いたい事があつたのに、いきなり  
足元に穴が空いた・・・

「じゃ、続きガンバツ」

「いや・・・ホントに死ねえええええあああああああああ」

目が覚めると、布団の中だった。

駄神め・・・今度は、2発殴る。

てか3rdでたんかゝや、やりてええええ

ジンオウガって言つてたな、どんなモンスターなんやろ？

装備だけ送るとか、まあいいけどな。

取り合えず起きるか。

起きようとしたのだが。

「いたあああ・・・痛い」

体中がメツサ痛い。

良く見ると包帯だらけですやん。

まだ、アバラ折れてるなコレ。

息吸うだけで痛い。

こんな時は、秘薬！

あれ？シヨルダーバックがねえ！

辺りを見回す。

つかココ何処や？

桃香ん所か？

モモは？

グウウウウ

腹減った

あつ！机の上にバックあった。

もぞもぞと、痛いのを我慢し机まで向かう。

左目を閉じて「アイテム選択」

え〜つと秘薬秘薬・・・決定

ゴクゴク

〜シャキン〜

復々々活！！

「あゝ痛かった」

着替えをし、そこから部屋を出て散策する。

武器が無かったが、まあどっかに保管してくれてるやろ的な考えで  
余り気にしていなかった。

「これ城の中？」

広いなもう

誰もいないし

「お兄さん久しぶりです」

「ん？」

誰かに呼ばれ振るかえる

「おお、風やんけゝ久しぶり」

そこには程イクこと風が居たのだ。

「そう言えば、お兄さん大怪我をしていると、聞いたのですが・・・  
・大丈夫そうですね」

案外大丈夫じゃなかったけどな。

さて風が、居るって事は、ココまさか・・・

「ねえココ何処？」

「ここは陳留、華琳様のお城ですよ」

・・・桃香とこじゃなかったのか・・・

「起きたなら華琳さまに、会いますか？」

まあココの主に挨拶はせなあかんしな

でもあの子怖いんだよね

オーラつつか覇気っていうか

考えてもしゃくないしな。

「じゃく会いたいから会わせてくれる？」

そついうと、付いて来いってさ。

スタスタ

・・・広くない？

スタスタ

・・・広いね。

スタスタ

・・・まだ？

ひたすら歩いたら大きな扉の所までできましたわ。

「ココですよ」

それじゃと言い扉を開ける。

「コレはまた・・・」

扉を開けるとそこは、白銀の世界・・・な訳はネエ  
やばいメツサガン見やんけ  
多分全員武将かなんかやろうな、

特にあの猫耳フードの子、人を射殺すかの様な睨みですやん。  
あのガンのくれかた、竹 力の兄貴みたいやわゝミナミの帝の、  
まあ、全然可愛いけど。

あつ稟もいるなナツイ。

やっぱり女の子ばかりやね、泣きそうになってきた。

あああ、タバコ吸ってきたらよかったゝゝゝ

「ご主人！」

モモが寄ってきた。

この感じは、説明した後って感じかな？

「よっ」

「あら気が付いたのね、怪我は大丈夫なの？」

「どうも、なんか迷惑かけたみたいやね、怪我は……なんつーか……ん〜」

「別にいいわよ、色々モモから聞いたから」

「ああ、聞いたのね曹操ちゃん」

やっちまった。

俺の発言に黒髪ロングの子が

「貴様ツ！華琳さまに向かってちゃん付けとは」

と言って剣を向けられたわけで……向けられたと言っより全力で振りかぶってきた。

「あぶなっ！！」

何とかわしたけど。

「春蘭別に構わないわ」

「ですが」

「私の言う事が聞けないの？」

「も、もし訳ございません」

……怖い

俺流石に、ちゃん付けは不味かったかな……  
しかしアレは、覇気ですね、気絶しかけたわ……

多分霸王色だろうと勝手に納得した光。

まあそんな事は、どうでもいいか

「でさ、なんで俺を連れてきたん？まあ言わなくても大体分かるけどさ」

「なら、話は早いわね」

「前がリオレイヤならココに出る火龍はリオレウスか」

「りおれいや？れいす？？」

ああ、そかそか名前なんか知らんか。

それとやっぱり横文字は、苦手みたいやね。

「ああ、すまんすまん、この前のもんす、じゃね？わ、化け物の名前がリオレイアで、ここに出るのがリオレウスって名前ね」

そつなのつと言って・・・興味はなさそうですね。  
いいやもう

「で、それを狩ってくれって訳ね」

「ええ、お願いできるかしら？化け物を狩る者」

断るつもりも無いしそれが俺がココに居る理由やしね、それと

「中村 光や」

「え？」

「その猫、モモから聞いてなかったのか？名前や名前、字は無いから、狩る間まで宜しくな」

なんか猫じゃにゃいニャーって言うてるけど気にしない。



「色々は聞いてたけど名前は聞いてなかったわ、劉備達が、騒いでいて知ってはいたけどね、でもあっさり受けてくれるのね」

「ん？それが俺の使命やしな」

「そう、なら客将としてお願いするわね」

そこまで話が進んでいきなり猫耳フードが

「華琳さまこんなヤツに、お願いするのですか！？」

「桂花、何か不満？」

「こんなヤツに頼まなくても！」

「あなたもモモの話先ほど聞いていたでしょ、あの化け物は彼にしか、倒せないのよ？」

なぜか自慢げな顔の光

「ご主人気持ち悪いニヤ・・・」

そして落ち込む・・・馬鹿です。

「・・・ッ」

悔しそうやね猫耳

まあ気持ちは分からんでもない、いきなり来たやつに頼むとか嫌やろうしな（全然違うけどね）

「コレは私が決めた事よ」

「わ、わかりました」

「でわ宜しくね光、それと私は曹操 字は孟徳 真名は華琳よ」

真名発言に一同驚き。

「か、華琳さま！！真名をお許しになるのですか？」

正直俺も驚いたけど。

流石になあゝ

「いいんか？」

するとどうでもいいかのように。

「ええ」

「・・・・・・・・」

でもやっぱり猫耳ちゃんが。

「し、しかし！！」

「私が良いと言っているの」

やべッ 覇気ハンパない、今まで戦ってきたモンスターより上じゃね？  
そんな下らんことより。

「なら華琳ちゃんどうもありがとな」

この発言でまた、追い掛け回されるのであった。

「ご主人ってやっぱり馬鹿ニヤ・・・」



一服（前書き）

ぬあ~~~~グダグダしてる~~~~

すまないです~~~~~

ネタ~~~~~がああつあああああ

まあ取り合えずどうぞ。

## 一服

「ぷはあ~~~~」

タバコうめえ~~~~ああ、未成年は駄目やぞ。

「ぷはあ~~~~」

ん？何してるかって？

曹操・・・いや華琳ちゃん所の中庭で、ただいま一服中（ちゃん付け意地でも認めさせた）

正直仕事抜け出して来まして・・・

まあ客将の身やから働かなアカンのは分かるんだけど、ココ毎日、書類仕事、戦闘訓練、書類仕事、戦闘訓練、戦闘訓練、訓練訓練・・・死ぬ！！

つーか客将って書類仕事とかしていいの？普通機密事項が、あつて駄目じゃないの？

あと、何故戦いの素人の俺が、戦闘訓練なんてしてるかって？ああ、聞いてない・・・でも聞いて、最初ここの連中との出会の時、俺が春蘭追い掛け回されたの覚えてる？

その時俺、武器無かったやん。それで仕方が無く素手で、春蘭を押さえ込んだら凄いという事で、そうなった。

ハハハ、最近気が付いた、駄神のやろう俺に、能力UPしただけじゃ無かったみたいや。

でもモンスター相手の場合は、意味無いみたいやね。・・・だっていつも死に掛けるもん。

モモは、スペックが高いから、今でも書類関係してんじゃ無いか？何か風と稟に、かなり気にいられてたし。

せや！！レウスな・・・実はアレから2ヶ月出てきてない、ある

え~~~~ホント出るの？

それと、ココの娘達とは、真名交換終わってるよ。正直もう真名でしか覚えてない。

ちゃんと仲良くもなったしな。

真桜は、関西弁繋がりで、沙和とは普通に喋ってた。仲良くなった。春蘭は武術、秋蘭とは文学か？多分・・・ハハハ

風と稟は、もともと知ってたしな。流流は、料理か？

で、あと凧ちゃんに、なんかめっさ尊敬されてるんやけど。

理由が良くわからんねんけど、一回手合わせした、時位かな？。そこからやな・・・なぜ？

もういいかな・・・取り合えず一人除いては仲良くなったさ~~~~

ん？一人？・・・桂花な・・・

ん？なんか男が、全部嫌いみたいやな。まああんまり気には、してないけど俺もアレぐらいで怒るほどガキじゃないで。

「この変態！」「名前を呼ばないで！孕むじゃない！！」などなど言われるけど・・・

うん、なんか泣きそう・・・

ハハハ何だこれ。

そんなこんなで、ボーっとしてたら声をかけられた。

「何をしているの？」

「んあ~~~~！！？華琳ちゃんやん」

「・・・ちゃんは、やめてほしいのだけど、まあいいわ。で、何しているの？」

なにをしていると聞かれてもなあゝ

「んゝ一服中ゝプハアゝ」

「そ、そう・・・」

呆れたように答える華琳

「全く、あの龍を倒した男とは思えないわね」

「ハハハ、良く言われる？」

「私に聞かないでよ!!」

「ごもつともです」

「貴方見てると、なんか頑張ってる私たちが馬鹿に見えるわね」

「ヒドッ!!こんな俺でも頑張ってるんやでゝでもまあゝ人それぞれって事で」

ふふつと笑顔を見せる華琳

こいつ笑うと可愛い顔してるなゝヤッパリ・・・

そんな華琳を見て照れくさくなったのか不意に、華琳に聞いた。

「しかしいつになったらレウスは来るンヤ？」

「知らないわよ、どこか行ったのかもね」

まあ、それは俺も思ってたけど。

サッサ先いかな、まだまだモンスターは、おるからなゝ

でも、俺がここ出て、来てもなあゝ

あああ動けないゝゝゝ

「はあゝ」

華琳は、悩んでいた光に、切り出した

「ココには、もう来ないわよ、だから……」

「貴方は、次に進むべきだわ」

すこし寂しそうに伝えた。

「いやいや、来るかもしれんやろ」

「大丈夫よ」

「いやいやいやい」 「五月蠅い!!」

!!!!!!

「貴方を必要とする人は、まだいるのでしょ!! だったらその人たちの所に行きなさい!!」

「それに、貴方に守られるほど私達は弱くない」

「わかったよわった。そう言ってくれるなら、俺も安心や」

こいつらなら大丈夫やな、しかもここで行かないと俺が、かっこ悪いしな。

よっしゃ!!!! なら、次いくか!

「ありがとな、華琳ちゃん」

そう言い頭を撫でる

「やめなさいよ」



と言いつつ嬉しそうな華琳・・・

その後、春蘭に見つかり再び鬼ごっこが、始まった。

「何やってるニャ・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6839o/>

---

真・恋姫†無双 化け物を狩る者

2011年2月12日03時21分発行